主要地方道小杉婦中線臨時道路交付金事業（B）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

黒河尺目遺跡発掘調査報告

2002年1月

小杉町教育委員会

黒河尺目遺跡

2002年

小杉町教育委員会

序

本書は、平成13年度に実施いたしました、主要地方道小杉婦中線設置に伴う発掘調査報告書であります。

小杉町は、富山県のほぼ中央に位置し、町内の北域は下条川などが流れる射水平野の水田地帯が広がります。また、南域は射水丘陵のなだらかな丘陵地形で占めており、すそ野は太閤山団地などの住宅街となっています。この住宅街に隣接する県民公園太閤山ランドの展望台からは、自然豊かな町並みを一望することができます。

黒河尺目遺跡の所在する黒河地区は、射水丘陵が舌状にのびて平野部に接する地域にあたり、稲作とナシ栽培が盛んに行われています。黒河は、近世北陸道と高山へ至る飛騨道の分岐点として古地図に描かれ、今日においても富山・高岡間、小杉・八尾間などの道路が交差する交通の要所となっています。

今回の調査により、縄文時代～近世までと多岐にわたる遺構・遺物が確認されました。調査区の南東部から北西部にかけては谷がはしり、そこからは縄文時代の土器が発見されています。また、この谷に沿う東側の高台には、先人たちの生活が営まれた痕跡を認めることができます。

本書が今後の調査・研究を進めるうえでの参考となり、埋蔵文化財をはじめとする文化財保護と郷土の歴史を知るための一助となれば幸いです。

末尾になりましたが、調査に当たり終始ご協力いただきました地元の皆様、関係各位に、深く感謝の意を表すとともに、今後も益々のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年１月

小杉町教育委員会

教育長　稲葉　茂樹

例　言

1．本書は、富山県射水郡小杉町黒河地内に所在する黒河尺目遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、主要地方道小杉婦中線臨時道路交付金事業（B）に伴う本調査である。

3．調査は、小杉町の委託を受け、小杉町教育委員会の指導・協力のもと株式会社中部日本鉱業研究所が実施した。

4．現地発掘調査は、平成13年6月2日から10月22日までの期間行い、調査面積は約2,500㎡である。引き続き出土品整理作業及び報告書作成を平成13年10月23日から平成14年1月31日まで行った。

5．現地調査は、株式会社中部日本鉱業研究所　埋蔵文化財調査室調査員　中村恭子、田所人志が担当した。

6．本書の執筆は、第Ⅱ章第1・3項を小杉町教育委員会生涯学習課　稲垣尚美が行ない、それ以外を株式会社中部日本鉱業研究所埋蔵文化財調査室調査員　中村恭子・田所人志が担当した。その執筆分担は各文末に記した。

7．出土した墨書土器の文字解読を鈴木　景二氏（富山大学人文学部助教授）、川﨑　晃氏（財団法人高岡市民文化振興事業団高岡市万葉歴史館学芸課長）に依頼し、教示を得た。石器は、戸谷邦隆氏（石川県津幡町教育委員会生涯学習課文化財係）に指導を受けた。記して諸氏に感謝の意を表します。

8．本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。

(1)　方位は全て真北である。

(2)　遺構の表記は次の記号を用いた。

SB：建物　　SA：柵列　　SK：土坑　　SE：井戸　　SP：柱穴状ピット

黒色処理：　　須恵器・珠洲の断面：

鉄釉灰釉：

(3)　挿図の土器・石器・陶器類の縮尺は、1／4に統一した。木製品の縮尺は原則として1／4・1／6、分銅は原寸とした。写真図版の遺物縮尺は、原則として1／2・1／3とした。

(4)　本書での土層および土器の色調は、小出正忠・竹原秀雄編者1967『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社を用いた。

9．本調査の調査参加者は下記のとおりである。（五十音順・敬称略）

・現地調査

遠藤正成・大杉正夫・北密寛治・境しのぶ・坂田行子・坂本照子・坂本夏子・澤山正行・高越金男・高越文治・高橋八智子・竹島治作・西野浪子・橋爪芳雄・福田太一郎・福田久子・三上正夫・密勇治郎・南陽一・本林芳子

・整理作業

高橋英吏子・宮崎美紀・渡辺賀世子

目　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1

1．遺跡の位置 …… 1

2．周辺の歴史的環境 …… 2

Ⅱ．調査に至るまで …… 5

1．調査の経緯 …… 5

2．過去の調査について …… 5

3．試掘調査の概要 …… 7

Ⅲ．調査概要 …… 8

1．立地 …… 8

2．調査の方法 …… 8

3．基本層序 …… 9

4．遺構 …… 11

(1) 掘立柱建物 …… 11

(2) 柵列 …… 11

(3) 溝 …… 13

(4) 土坑・井戸 …… 17

(5) 柱穴状ピット …… 21

5．遺物 …… 23

(1) 遺構内遺物 …… 23

(2) 谷部 …… 26

Ⅳ．まとめ …… 53

参考・引用文献

挿図目次

第１図　小杉町と遺跡の位置 …… 1
第２図　周辺の遺跡と位置（1／25,000） …… 3
第３図　過去の調査区（1／3,000） …… 6
第４図　試掘の位置と出土遺物 …… 7
第５図　作業風景 …… 8
第６図　基本層序 …… 9
第７図　遺構配置図（1／300） …… 10
第８図　遺構実測図（1／80） …… 12
第９図　遺構実測図（1／40） …… 14
第10図　遺構実測図（1／40） …… 15
第11図　遺構実測図（1／40） …… 16
第12図　遺構実測図（1／40） …… 18
第13図　遺構実測図（1／40） …… 20
第14図　遺構実測図（1／40） …… 22
第15図　遺構内出土遺物実測図（1／４） …… 25
第16図　谷部出土遺物実測図・縄文土器（１／４） …… 27
第17図　谷部出土遺物実測図・縄文土器（１／４） …… 28
第18図　谷部出土遺物実測図・須恵器　（１／４） …… 31
第19図　谷部出土遺物実測図・須恵器　（１／４） …… 32
第20図　谷部出土遺物実測図・須恵器　（１／４） …… 33
第21図　谷部出土遺物実測図・須恵器　（１／４） …… 34
第22図　谷部出土遺物実測図・土師器　（１／４） …… 37
第23図　谷部出土遺物実測図・土師器・その他　（１／４） …… 38
第24図　谷部出土遺物実測図・石器　（１／４） …… 40
第25図　谷部出土遺物実測図・木製品　（１／６・１／４） …… 41

表　目　次

表１　周辺の遺跡 …… 4
表２　過去の調査区 …… 5
表３　遺構観察表 …… 42
表４　遺物観察表 …… 47

図版目次

図版1　全景 …… 57
図版2　遺構 …… 58
図版3　遺構土層 …… 59
図版4　遺構（完掘） …… 60
図版5　谷部遺物出土状況 …… 61
図版6　遺構内遺物　谷部出土遺物・縄文土器（1／3） …… 62
図版7　谷部出土遺物・縄文土器（1／3） …… 63
図版8　谷部出土遺物・須恵器（1／3） …… 64
図版9　谷部出土遺物・墨書土器（1／3） …… 65
図版10　谷部出土遺物・須恵器（1／3・4） …… 66
図版11　谷部出土遺物・土師器・越中瀬戸（1／3） …… 67
図版12　谷部出土遺物・土師器・珠洲・越中瀬戸等（1／3） …… 68
図版13　谷部出土遺物・石器（1／3） …… 69

Ⅰ．遺跡の位置と環境

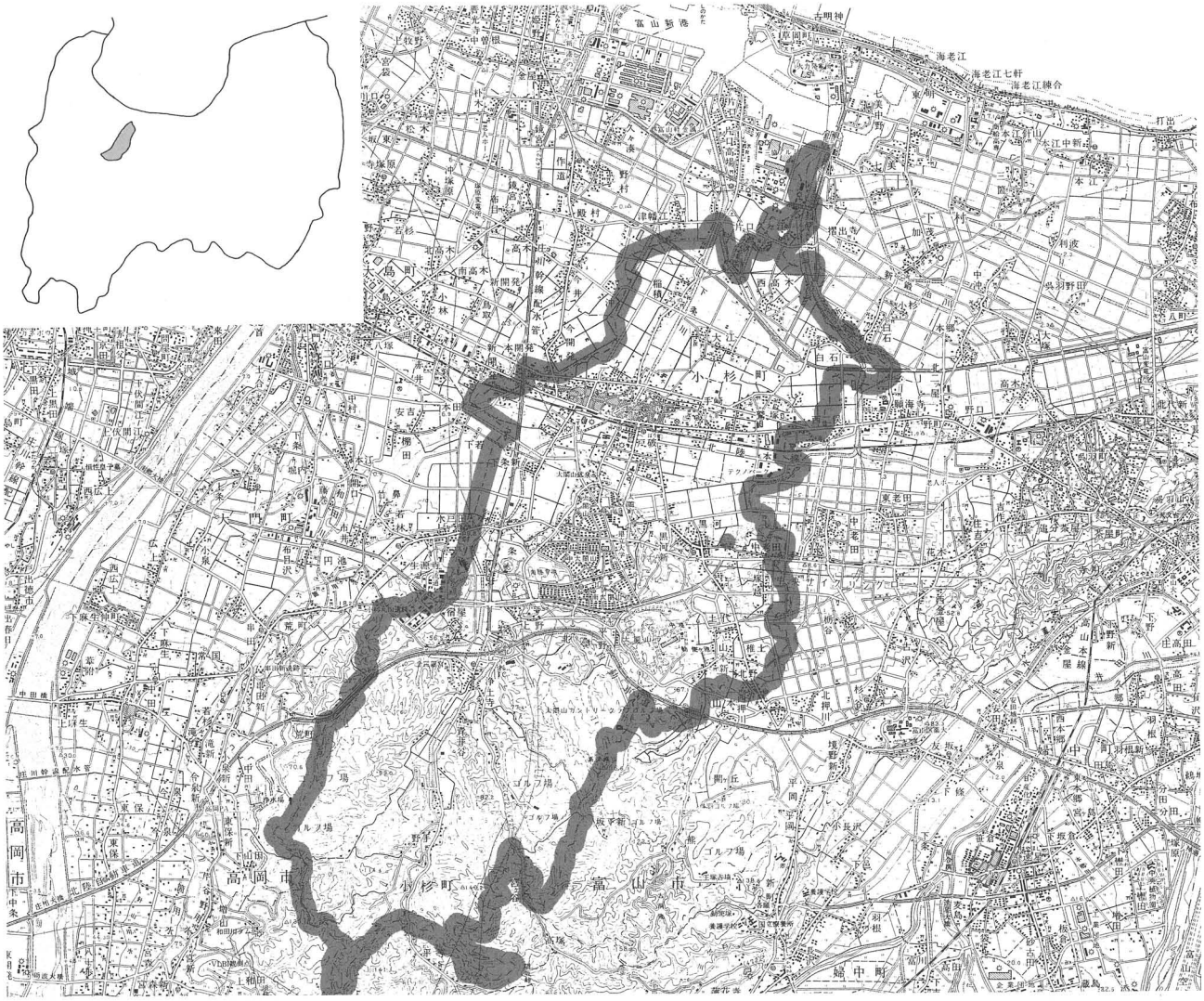
1．遺跡の位置

黒河尺目遺跡は、富山県射水郡小杉町黒河地内に所在する。小杉町は富山県のほぼ中央に位置し、東は富山市、西は大島町・大門町、北は新湊市と接しており、東西５㎞南北12㎞と楕円形の町域となっている。本町は射水郡の中枢の地であり、古くから富山・高岡間の交通の要所として発展してきた。地形としては、下条川をはじめとする河川が北流し、北側には射水平野が広がり、南側に射水丘陵が町全体の４割を占めている。

この射水平野は、地層としては最も新しくおよそ１万年～８千年前に形成された沖積層で、砂や粘土・礫が堆積している。この沖積層が堆積した時代は、海岸線が沖のほうに後退しており、平野部は現在より広かった。その後、気候の変化により海岸線が陸へ侵入し平野部が狭まり、縄文時代前期のピーク時には、現地形で標高５ｍ以下の小杉町の半分は海面下に没していた（縄文海進）。その後、河川等の土砂の堆積によって、かつての海は小さく放生津潟（現富山新港）として形を残し、広々とした射水平野を形成していく。

また、南側の射水丘陵は、小河川によって細かく刻まれた典型的な丘陵山地である。この丘陵地域の地質は、泥岩・砂岩層によって構成された青井谷泥岩層からなり、その上部に呉羽山礫層が点在している。町域の東側を流れる鍛冶川を中心とした扇形の地形は、射水丘陵と呉羽丘陵の南端に挟まれた、神通川の旧扇状地である。

黒河尺目遺跡は、射水丘陵の北端部で、この旧扇状地の微高地上に位置する。　（中村）



第１図　小杉町と遺跡の位置

2．周辺の歴史的環境

黒河尺目遺跡は、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が多岐にわたって出土し、周辺においても旧石器時代から近世にいたるまでの遺跡が確認されており、連綿とした人々の営みが見ることができ、富山県内においても有数な遺跡の密度の高い地域となっている。

歴史を追ってみていくと、まず、旧石器時代には、現在の太閤山を中心とする丘陵に遺跡が多く見られる。その後、縄文時代草創期(約12,000～10,000年前)を経て縄文時代早期(約10,000～6,000年前)には、前項でもふれたように、土地の沈降または海面の上昇により海が陸に侵入(海進)していった。

海進の最頂期は、縄文時代前期(約6,000～5,000年前)で、気候は温暖になり黒河周辺は丘陵地を背に目の前に海がせまっていたと考えられる。周辺の水田数十㎝下には植物(主に、ヨシ、アシ)の腐植土があらわれていることから、かつて水辺に近かったことがわかる。

縄文時代中期（約5,000～4,000年前）になると、温暖な気候から一転して寒冷になっていった。この頃から、現在の射水丘陵一帯に遺跡が集中し、小杉町で約70ヶ所の縄文遺跡の中でも、この時期のものが最も多い。

縄文時代後期(約4,000～3,000年前)から晩期(約3000～2,300年前)になると、中期からの気候の寒冷化がさらに進み、晩期には現在に似た海岸線となった。この頃は、現在の射水丘陵一帯においては、遺跡の数は少なくなる一方、富山県内では遺跡の規模は大きく数を増やしている。

弥生・古墳時代においては、弥生中期からの遺跡が確認されており、弥生後期から古墳時代にかけて平野部での遺跡数が急増している。このころから、射水平野における稲作のはじまりが想像できる。

奈良・平安時代になると、現在の太閤山の丘陵部一帯では鉄製品や須恵器が生産されるようになり、製鉄遺跡や須恵器窯跡などの生産遺跡も多く見られるようになった。生産遺跡は、北は大門町水戸田・小杉町黒河、南は富山市平岡、西は砺波市福山、東は富山市呉羽から古沢にかけての東西約13㎞、南北約12㎞の範囲で分布し、黒河は生産遺跡の北端であったことがわかる。生産地として発達した理由として、現在の射水丘陵一帯が丘陵性山地に樹枝状の谷が入りくみ平野に近かったこと、良質の粘土に恵まれていたこと、山林から燃料が得やすかったことなどの自然条件が整っていた。そして、その生産に携さわった工人の住居や作業場などの遺跡が数多く残っており、古代に手工業生産地として主要な役割を果たした地域であったことが窺える。

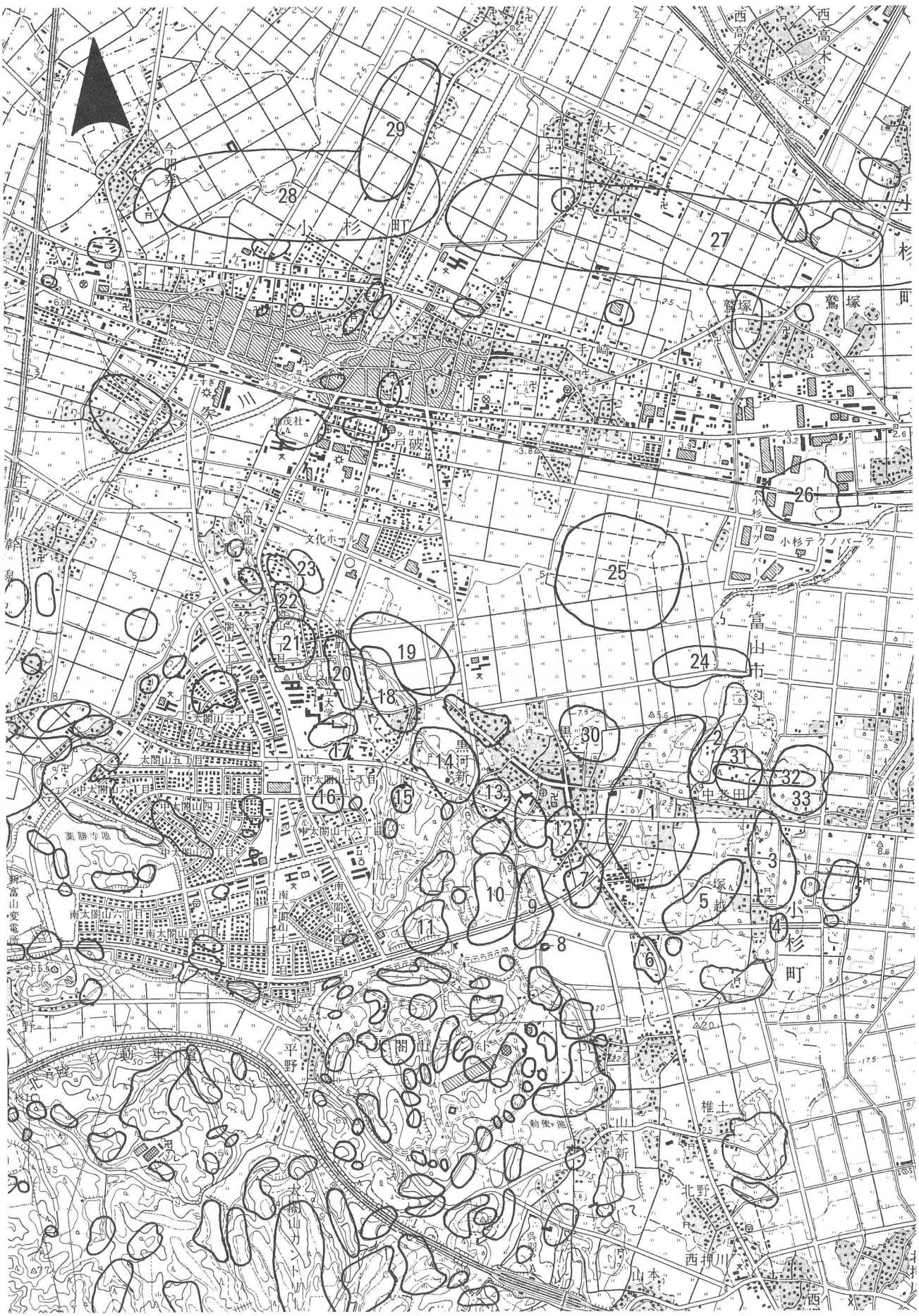
12世紀頃には、射水丘陵一帯は在地領主層による国衙領支配が展開される一方、低湿地には荘園形成が進み、京都下鴨神社(賀茂御祖神社)倉垣荘が設立され、黒河も同荘に属した。

鎌倉時代になると、黒河周辺は国衙領の黒河保に属し、守護支配の要地になり、河川舟運が盛んにおこなわれていた土地であったと考えられる。

その後、各地で耕地開発が盛んにおこなわれるようになり、黒河周辺も湿田地帯の開拓されるとともに集落を形成し規模は拡大していった。この開拓は、近世・近代の人々に引き継がれ、今日にいたっている。

江戸時代になると、黒河は巡見上使道(初期北陸道)が通る集落となり、一里塚があったことから街道沿いに栄えていたことが窺える。また、飛騨に向かう飛騨道との分岐地でもあったことも、栄えた一つの要因であったのではないだろうか。

（田所）



第2図　周辺の遺跡と位置（1/25,000）

番号	名　称	種　別	時　代	現　況	備　考
1	黒河尺目遺跡	集落	旧石・縄・奈・平・中・近	宅地・道路・田・畑	昭61・62・平２・３・12年本調
2	塚越貝坪遺跡	散布地・製鉄	縄文(中)・奈良・平・中	宅地・田・畑	昭62・63・平２年一部試掘
3	塚越大沢遺跡	製鉄	奈良・平安	宅地・田・畑	昭62・平２年一部試掘
4	塚越Ａ遺跡	製鉄	弥生・奈良	宅地・畑	平３年本調
5	塚越大沢Ⅱ遺跡	散布地	奈良・平安	宅地・畑	昭和62・63年一部試掘
6	畑総NO.23遺跡	散布地	奈良・平安	畑	平３年試掘
7	表野遺跡	集落・製鉄	旧石器・縄文・奈良	道路・畑	昭54年本調、平３年試掘
8	太閤山ランド内NO.８遺跡	散布地	古代	田	平３年試掘
9	東山Ⅱ遺跡	散布地・製鉄	縄文・古墳・奈良	道路・雑種地	昭54・57年本調、平２・３年試掘
10	東山Ⅰ遺跡	製鉄	奈良	道路・畑・雑種地	昭55年本調
11	高山遺跡	散布地・製鉄	旧石器・平安	道路・畑・山林	昭54年本調
12	黒河尺目西遺跡	散布地	奈良・平安・中世	宅地・田	昭63・平元・３年一部試掘
13	黒河竹山遺跡	散布地	縄文・奈良・平安	宅地・畑	昭62・63・平２年一部試掘
14	黒河西山遺跡	散布地・製鉄	古代・奈・平・近	宅地・田・畑	昭62・平２・３年試掘、昭62・63本調
15	黒河西山Ｂ遺跡	製鉄	古代	畑	平２年一部試掘
16	大開南Ｂ遺跡	製鉄	古代・奈良・平安	公園	昭48年本調、公園として整備
17	大開遺跡	散布地	縄文(中期)	宅地・畑	昭48年本調
18	一ツ山古墳群	墓・古墳	弥生・古墳・奈良	宅地・畑	昭63年本調
19	三谷遺跡	散布地	旧石・弥・古墳・奈・中世	学校用地	昭63年本調
20	二ツ山古墳群	古墳	古墳	学校用地	５基以上、昭62年試掘
21	中山南遺跡	集落	弥生	宅地・公園	昭50年県指定史跡、昭38・43年本調
22	中山中遺跡	散布地	旧石・縄文・弥・古墳・奈	宅地・畑	昭56・平元年試掘、平２年本調
23	中山北Ｂ遺跡	散布地	不明	田	平２年試掘
24	黒河・中老田遺跡	散布地	奈良・平安・中世	田	
25	針原西遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良	田	
26	針原東遺跡	散布地	縄・弥・古代・奈・平・中	宅地・田	平２・３・４年本調
27	ＨＳ－04遺跡	散布地	縄・弥・古・古代・中・近	宅地・田	白石遺跡を含む.平３・４年本調
28	ＨＳ－03遺跡	散布地	不明	宅地・田	一部愛宕遺跡と重複
29	愛宕遺跡	散布地	古代	田	昭62年本調
30	黒河遺跡	散布地		宅地・田	
31	畑総NO.16遺跡	散布地	不明	宅地・畑	
32	黒河新三十三塚	その他	近世	宅地・畑	
33	畑総NO.17遺跡	散布地	奈良・平安・中世	田・畑	

表１　周辺の遺跡

Ⅱ．調査に至るまで

1．調査の経緯

黒河尺目遺跡は、主要地方道小杉婦中線道路整備事業に伴い発掘調査が行われた。主要地方道小杉婦中線道路整備事業とは、昭和41年4月8日都市計画決定された都市計画道路七美・太閤山線の北部線から富山戸出小矢部線までの区間2.1㎞の整備事業をさす。今回の工事対象区間は第１期整備区間である町道東老田高岡線から富山戸出小矢部線までの1.0㎞で、伏木富山港及び国道８号線と北陸自動車道小杉ＩＣを直結する南北の主要幹線となり、平成８年度より着手し、平成15年度完成予定である。

小杉町では、平成10年11月に富山県高岡土木事務所の依頼により分布調査を行い、全区間試掘調査の必要があることを確認した。そして、平成11年7月から11月に試掘調査を行った結果黒河尺目遺跡9,310㎡、黒河・中老田遺跡および針原西遺跡について9,650㎡の本調査、未買収地については試掘調査の必要があると判断した。

試掘調査の中間報告の段階で、高岡土木事務所から平成12年度の本調査依頼の打診があったが、既に小杉町では町道東老田高岡線（主要地方道小杉婦中線道路整備事業第１期整備区間との交差点部分）の本調査が予定されていたため、同年9月に町教育委員会・町都市建設課・高岡土木事務所・県文化財課による協議の結果、富山県文化振興財団により本調査が行なわれることとなった。しかし、平成12年8月に13年度以降の本調査については富山県文化振興財団で対応できない旨が伝えられたため、小杉町では民間発掘機関に調査委託することとした。（稲垣）

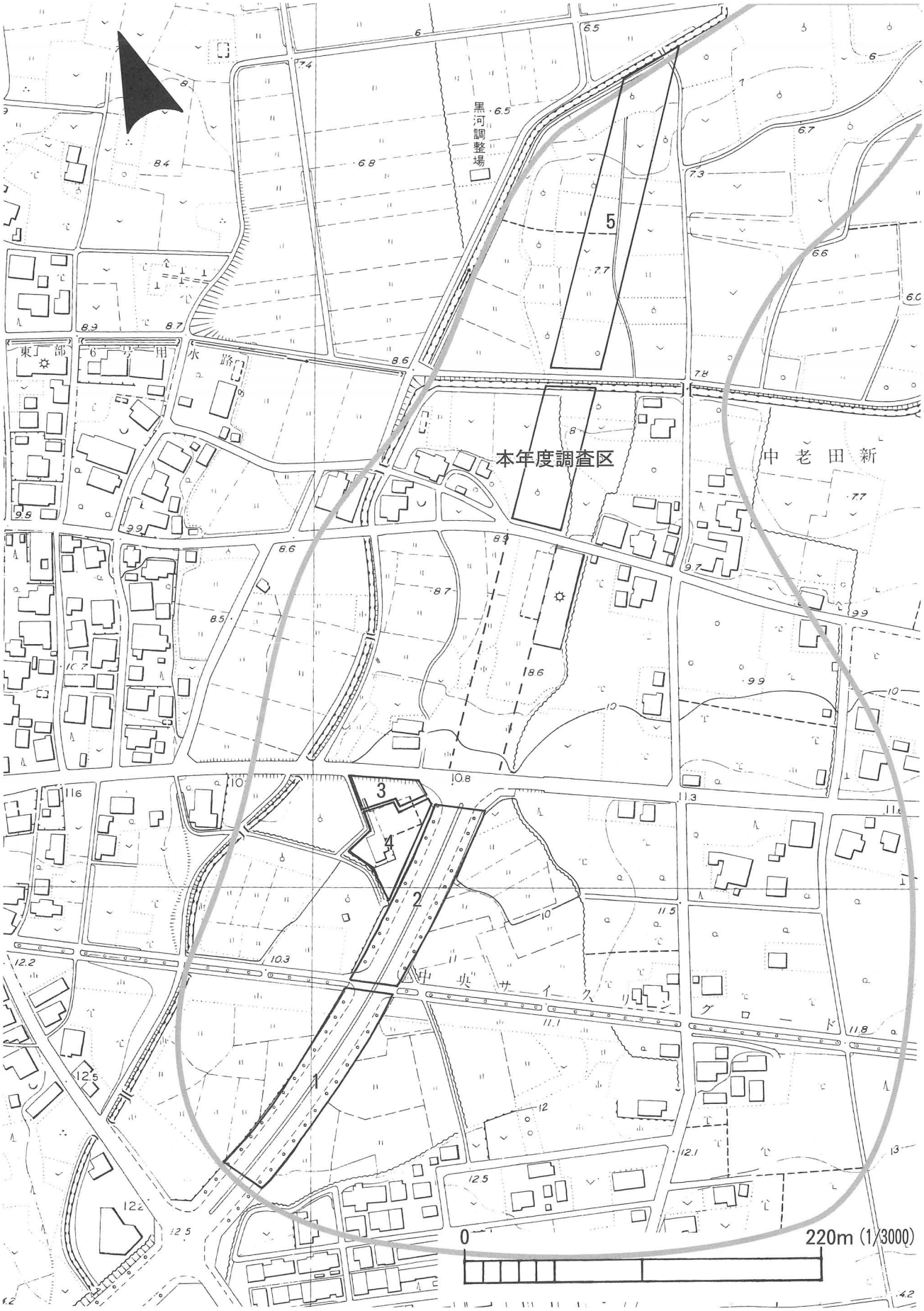
2．過去の調査について

黒河尺目遺跡は、昭和51年に都市計画街路七美・太閤山・高岡線の予定地を対象に埋蔵文化財の分布調査が行われ、あらたに存在が明らかにされた遺跡である。この都市計画街路は高岡市西広上から小杉町太閤山を経て、新湊市七美を結ぶ路線であり、昭和61年度に小杉町黒河地内の試掘調査が行われた。この結果、多数の遺構が確認され、奈良時代の土器が出土したことから、その時代の集落遺跡であることが推定され、「黒河尺目遺跡」と名づけられた。

本遺跡は、試掘調査を行い遺跡の範囲と性格を確認した結果をもとに、本調査を実施する方法で、昭和61年から本調査が行われている。これらの調査からは、奈良時代を中心とした集落跡が確認されている。

NO.	年度	発掘面積	時　代	遺　構	遺　物
1	昭和61	約3,400㎡	縄文・奈良・中世・近世	掘立柱建物・溝土坑他	縄文土器・石器・土師器・須恵器墨書土器・陶磁器・木製品
2	昭和62	約2,600㎡	縄文・奈良・中世・近世	掘立柱建物・溝土坑他	縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器製鉄関連遺物
3	平成２	約　246㎡	縄文・奈良・中世・近世	掘立柱建物・溝土坑他	縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器製鉄関連遺物
4	平成３	約1,000㎡	縄文・奈良・中世・近世	掘立柱建物・溝土坑他	縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器木製品
5	平成12	約5,000㎡	縄文・古代・中世	掘立柱建物・溝土坑・井戸他	縄文土器・土師器・須恵器・土製品石製品

表２　過去の調査区



第３図　過去の調査区（1/3,000）

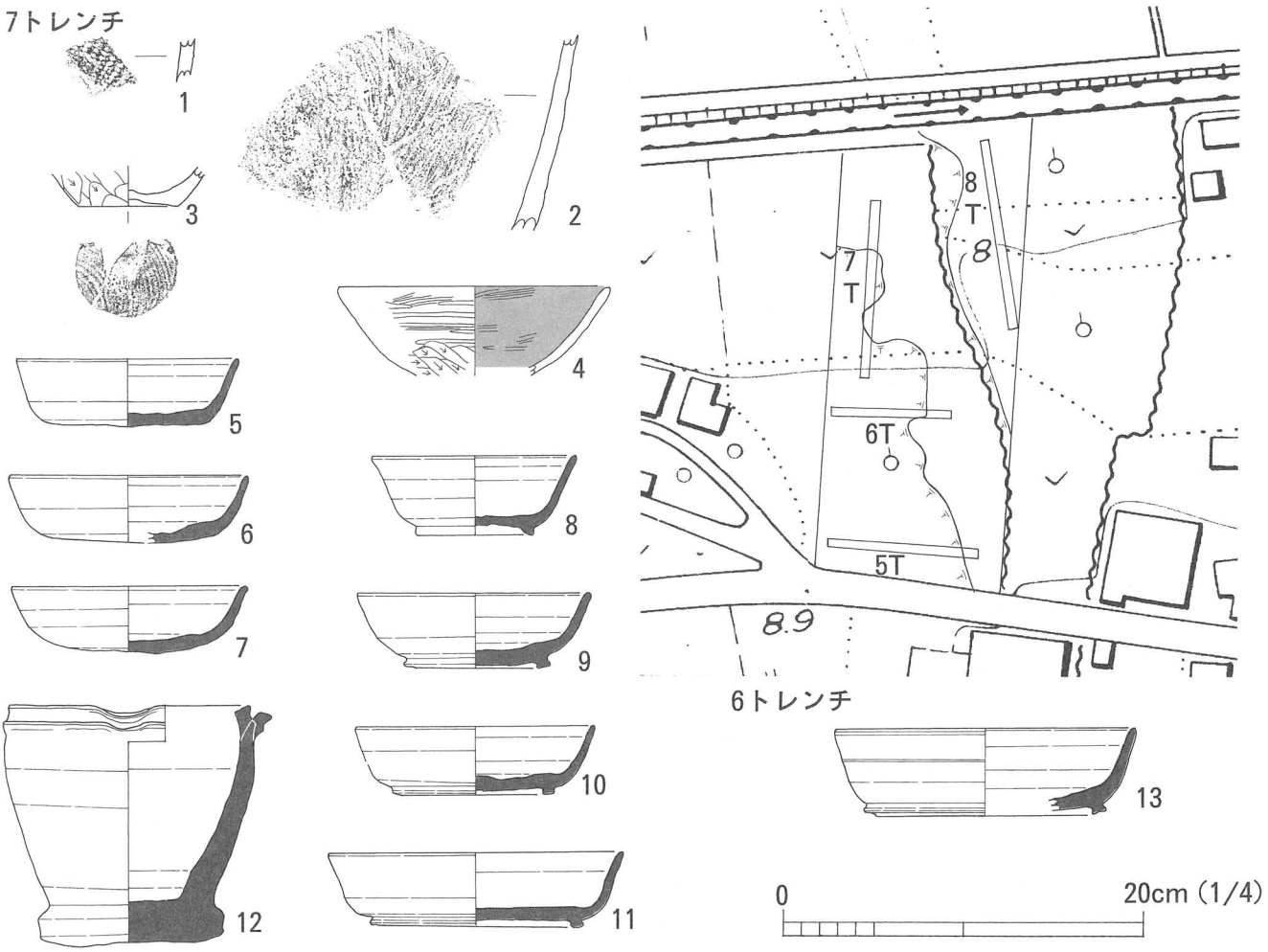
3．試掘調査の概要

黒河尺目遺跡は主要地方道小杉婦中線道路整備事業第１期整備区間内に位置していたために平成11年7月12日から平成11年7月19日まで延べ6日間の試掘調査を行った。試掘調査は重機により幅１ｍのトレンチを設け、その壁面を人力により精査し、包含層と遺構の確認を行った。

今回発掘調査の対象となった2,500㎡には、4本のトレンチを設定した。発掘面積は約100㎡である。ただし、調査区南側の約1,000㎡については1.5ｍ以上の産業廃棄物による盛土が行なわれていたため、トレンチの幅を広げ、階段状に掘り下げた。しかし、崩落の危険があり人力による断面精査を行うことができなかったため、十分な観察が行えなかった。

調査の結果、遺構は溝と土坑の他、大きな河道を確認した。溝は、いずれも浅いものであった。土坑については、半裁し断面を観察したが柱穴であるか否か判断できなかった。遺物は7トレンチ南部からの出土が中心で、おそらく河道の落ち際と考えられる。遺物は、縄文土器・古代の土師器・須恵器が検出された(第４図)。１～２は縄文土器。３～４は古代の土師器埦で、４は内面に黒色処理が施されている。５～７は杯Ａ、８～11・13は杯Ｂ、12は鉢でいずれも８世紀後半と考えられる。

以上の結果から、南から北西にかけて幅20ｍ前後の川跡があり、この川跡は周辺の発掘調査の結果などから婦川旧河道と考えられるが、縄文時代中期には既に河川としての機能はなかったと推測される。また、婦川旧河道および調査区南端から出土した縄文土器は調査区の南に位置する縄文時代遺跡からの流れ込みと判断し、対象地における遺跡の中心は、おそらく婦川旧河道右岸の自然堤防上に位置し、遺構・遺物の状況から時代は古代と推定した。　（稲垣）



第４図　試掘の位置と出土遺物

Ⅲ．調査概要

1．立地

黒河尺目遺跡は射水丘陵と射水平野の境に位置し標高約７～10ｍにあり、北西に向かって緩やかに傾斜している。今回の調査区は標高約7～８ｍを測り、果樹園・畑として使用されていた。調査範囲は都市計画道路設置に伴うため東西30ｍ南北約70ｍと南北に細長い。

2．調査の方法

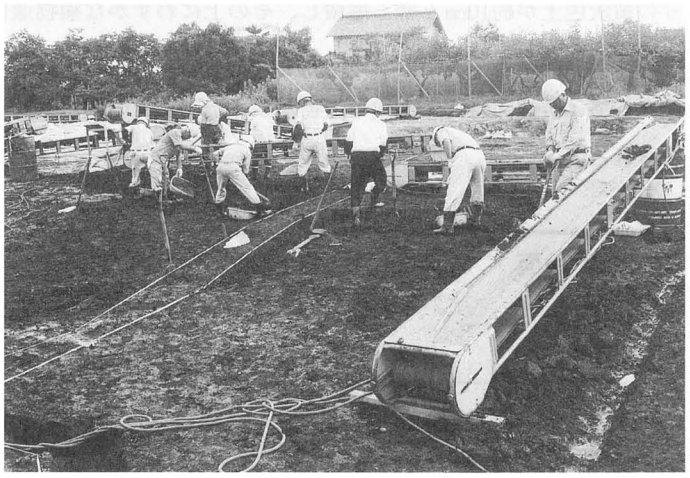
調査に際して事前に、調査区域の設定後、表土の深さが場所により異なるという試掘結果をふまえ、調査員立ち会いのもと重機による掘削を行った。次に調査対象区に国土座標軸に合わせて10m間隔に基準杭を設け、X軸を南北方向、Y軸を東西方向に設定した。

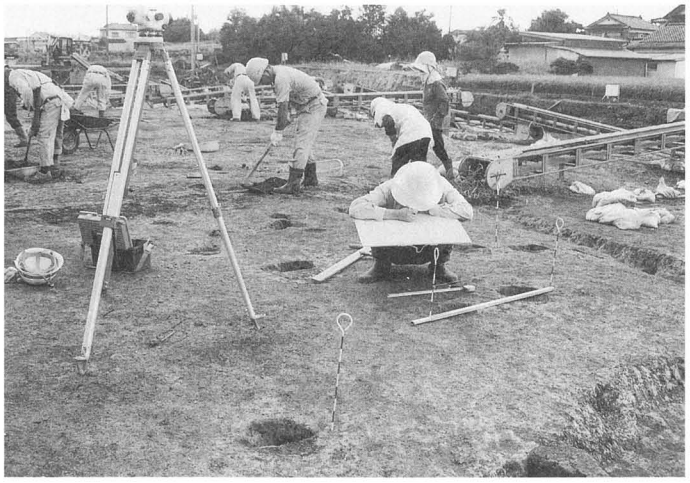
包含層は、スコップ等を使用し、人力掘削をした。排土搬出の都合上、調査は南北に長い調査区を半分に分け、包含層掘削は北側より行った。排土はベルトコンベアーによって調査区内に一度集積し、ダンプによる随時搬出を行った。南側は土砂の埋め戻しが数箇所あり、人力掘削は困難であるため、小杉町との協議のうえ、埋立土砂箇所は重機による掘削を行い埋立土砂と排土を分別して借り置くこととなった。

包含層除去後、地山上面での遺構検出作業を開始した。検出終了後、個々の遺構ごとに掘削・記録作業を行った。遺構完掘後、ラジコンヘリコプターによる航空測量及び撮影を行った。

確認された遺構は、北東角の標高約８ｍの高台上に多く検出し、東から西へ傾斜する谷地形が確認された。深さは最深部で現況高より1.8mを測り、遺物の多くは、この谷地より出土した。

出土遺物の洗浄は現地調査と並行して行った。現地調査終了後、出土遺物の整理作業及び報告書作成作業を実施した。遺物洗浄後は、バインダー処理、注記、仕分け、接合、復元などを順次進めていった。さらに、遺物実測、トレース作業等を行い、報告書の図版を作成した。





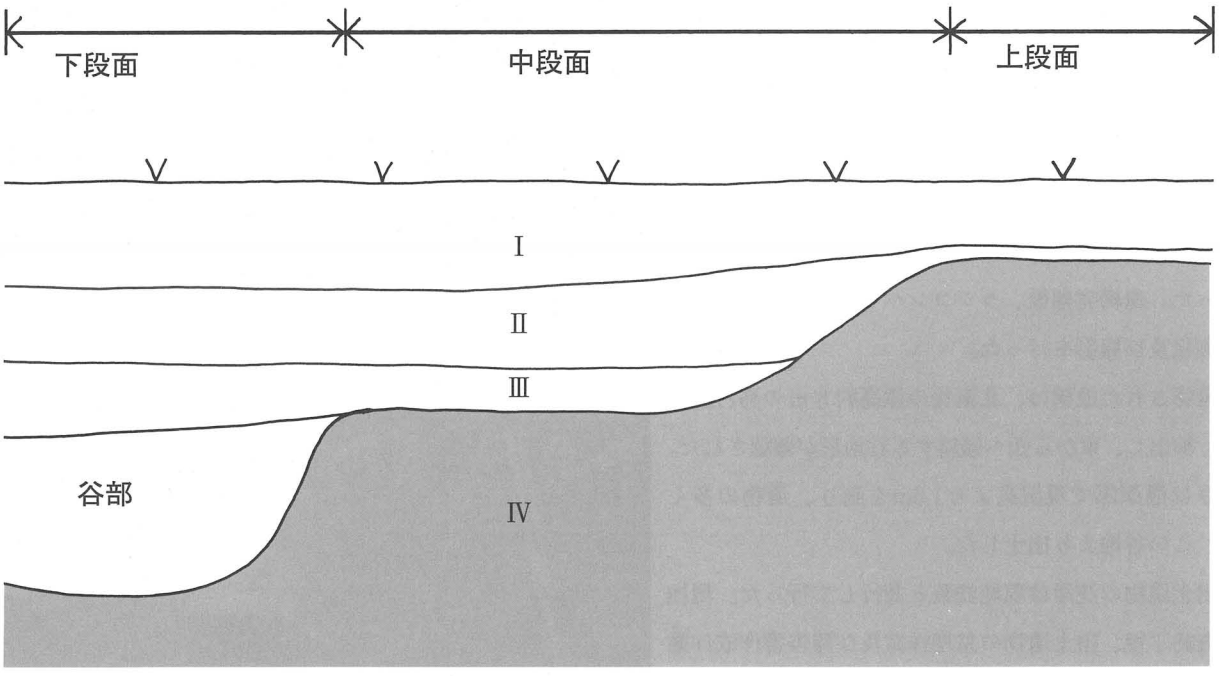
第５図　作業風景

3．基本層序

基本層序は、上部からⅠ層茶褐色土の表土・耕作土（５～30㎝）、Ⅱ層黒褐色シルト粘質土（30～50㎝）、Ⅲ層黒褐色粘質土（10～20㎝）、Ⅳ層淡黄色粘質土（地山）の順序で堆積している。調査地の北側は果樹園・畑として利用され、南側は建物が建てられていたこともあり、全体的に削平・攪乱を受けていた。調査区は、Ｘ５～９Ｙ４ラインより北東では標高約８ｍを測り、Ⅰ・Ⅱ層が薄く堆積しており、この北東角より南西に向けて傾斜している地形である。調査区の北側には県営東部六号用水路が流れている。調査区内の中心を用水路が縦走し、この六号用水へ北流していた。調査区内に流れていた用水路は、後世になって地形を利用して作られたものか、北端は緩やかに傾斜しているが、用水路を境に東西に分けて落差がみられ段状に落ち込んだ地形となっていた（標高約7.3m）。遺物の包含はⅠ・Ⅱ層でわずかに含み、Ⅲ層からは多量の土器が出土した。

今回の調査区は、射水丘陵の末端が樹枝状に伸びた小谷の谷筋にあたり、2段階に落差をもつ地形がみられた。

遺構はⅣ層まで掘り下げこの面で検出したが、Ｘ２Ｙ３～Ｘ８Ｙ２ライン（南東－北西）より西側でさらに段状に落ち込んでいた。この辺りでは旧婦川の流路が想定されており、調査当初、前述の落ち込みはこの流路かと思われた。しかし、掘り進むにつれ河川等の流水堆積が見られなかったこと、また、この落ち込みの埋土のどの層からも縄文時代から中世までの土器が同じように出土していることから、ある時期の短期間に埋没したものと考えられ、射水丘陵末端の小谷の落ち込みと考えられる。この小谷の最深部は標高約6.3mを測り、谷部の層序としては、最下層に植物遺体混じりの黄灰色土が約10㎝と薄く堆積し、その上にわずかな植物遺体と遺物を含む黒褐色粘質土がのっていた。この谷部も落差が激しく落ち込んでいるが、南西にむかって緩やかに標高を増している。南西角で標高約7.0mを測る。谷部の遺物としては、縄文時代・古代の遺物が多く出土し、中世の遺物はわずかであることから、中世以降に埋まったものと考えられる。



Ⅰ　茶褐色土（表土・耕作土）
Ⅱ　黒褐色シルト粘質土
Ⅲ　黒褐色粘質土
Ⅳ　淡黄色粘質土（地山）

第６図　基本層序

第7図　遺構配置図（1/300）

4．遺構

本調査で確認した遺構は、掘立柱建物３基、柵列２条、溝12条、土坑51基、井戸３基、多数の柱穴状ピットがある。

調査区は谷筋にあたり、北東から南西に向けて傾斜して２段の平坦面をなしている。調査区で最も高い遺構面は、北東角の標高7.8～8.0ｍを測る箇所で、調査区の約１／４を占める。（以下、この箇所を上段面とする。）県営東部六号用水を隔てて北側に平成12年度調査区と隣接しているが、上段面はこれらの遺構面と同一の面だと思われる。調査区の中心には旧用水路を境に段差があり、上段面とは比高差約50㎝で、段差下は標高7.1～7.4ｍを測る面がある。（中段面とする。）この中段面は、南に向かって徐々に標高が下がる。谷底部は標高6.2～6.8ｍを測り、中段面との比高差は約70㎝である。谷の方向は南東から北西へと、調査区を斜めに横切っている。（下段面とする。）

遺構の分布は上・中・下段面に大別でき、遺構の種類に偏りがある。上段面には柱穴状ピットが集中している。しかし、この箇所は特に攪乱、木根が多く見られた。このように、果樹園・畑地等の耕作による攪乱の影響を多大に受けていることを考えると、全てが遺構とは云い難く、調査の過程で区別することは困難であった。上段面で検出した遺構の出土遺物から、中世以降のものと考えられる。中段面では、柱穴状ピットはほとんど見られず、土坑と溝を検出した。これらは比較的の浅い遺構が多い。下段面からは土坑を検出した。この面の南側は、十数箇所も深く攪乱を受け遺構の有無は不明である。そして、下段は南西にむかって徐々に高さを増し、その緩斜面上に遺構を検出した。土坑というには規模が大きく、重なり合っている遺構を不明遺構とした。

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物は、上段面に多くの柱穴状ピットが重なりあうが、ピットの覆土・配列状況より柱穴とした。建物の柱穴の切り合い関係がないため、これらの新旧は明らかでない。

SB01（第８図）

Ｘ８Ｙ４に位置し、２間×２間の南北棟である。規模は桁行4.1m、梁行3.5m、平面積14.35㎡である。柱穴の位置は比較的整然としており、規模は直径25～35㎝、深さ10～30㎝を測る。主軸方位Ｎ－９°－Ｗをとる。出土遺物は土師器、須恵器片が数点、Ｐ19・23より出土している。

SB02（第８図）

Ｘ７Ｙ４に位置し、２間×２間の南北棟である。規模は桁行4.1m、梁行3.1m、平面積12.71㎡を測る。柱穴の位置は若干歪んでおり、直径約25～35㎝、深さ20～40㎝を測り、主軸方位Ｎ－２°－Ｗをとる。遺物が出土した柱穴はP51で、土師器片のみである。

SB03（第８図）

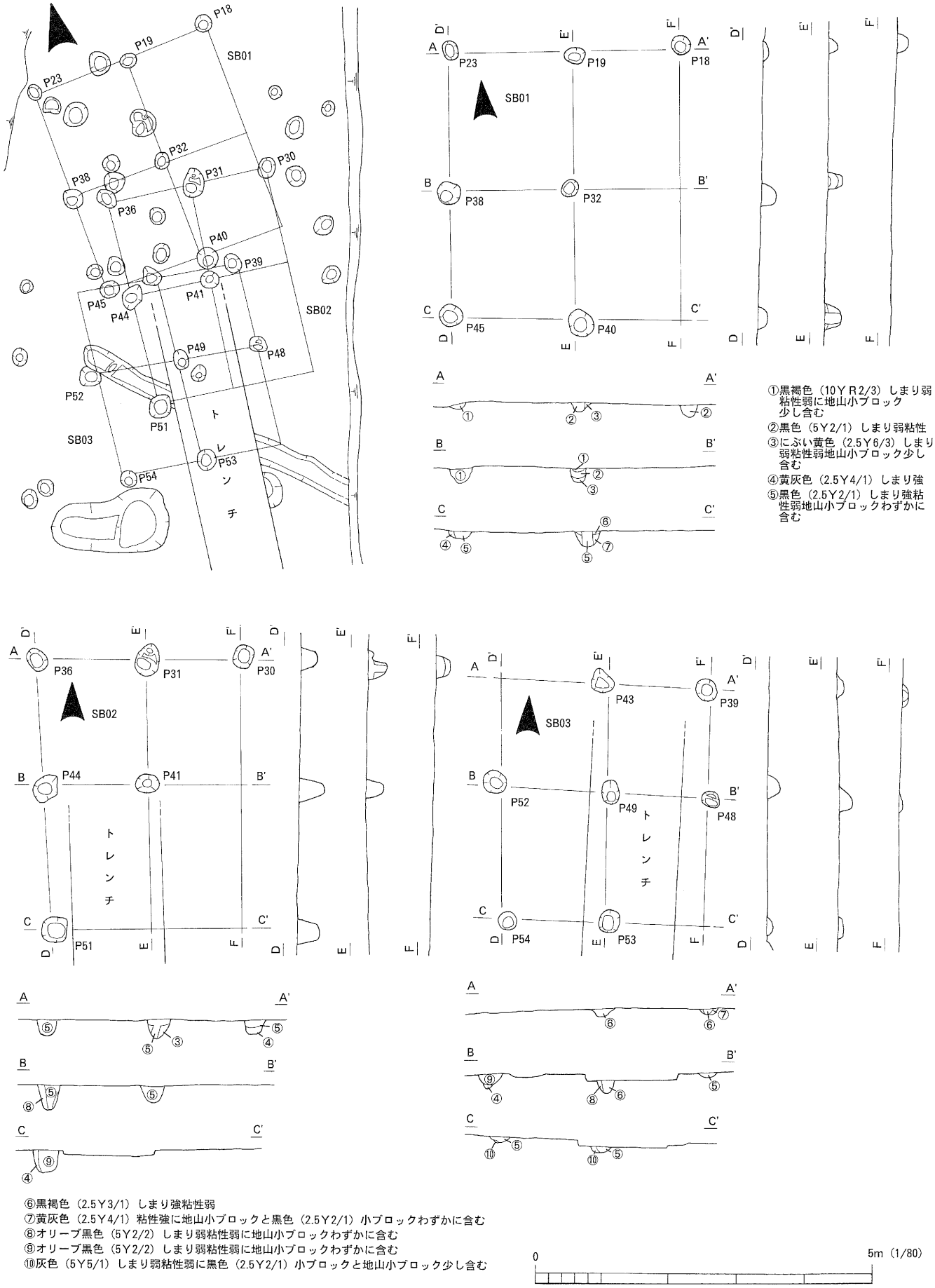
Ｘ７Ｙ４に位置し、２間×２間の南北棟である。規模は桁行3.7m、梁行3.2m、平面積11.84㎡を測り、柱穴の位置は若干歪む。主軸方位はＮ－５°－Ｗをとる。柱穴の規模は、直径約25～35㎝、深さ５～25㎝で、浅い柱穴が多い。遺物の出土は、Ｐ52のみで土師器片が出土している。

(2) 柵列

柵列は２条検出し、これらは上段面に位置している。この面が西に向かって下降しており、この落差のラインに沿って並ぶ。

SA01（第９図）

Ｘ７Ｙ４にあり、重複している掘立柱建物の西側に位置しているが、建物方位と柵方位は異なっており、建物に付属する柵列とはいい難い。柱間は不揃いであり、柱穴の規模は直径約20㎝、深さ10～20㎝、全長4.5ｍを測る。出土遺物はみられなかった。



第８図　遺構実測図（1/80）

SA02（第９図）

Ｘ６Ｙ４に位置する。柱穴の間隔は約1.3mで、規模は直径20～25cm、深さ10～20cmを測る。柱穴が３個並びの全長2.6mを測る。

(3) 溝

検出された溝は、12条である。上段面の３条は東西に走るもので、いずれも東側調査区域外に延びている。南北のものは2条検出した。中段面は、下段面とした谷部の肩に位置する７条の溝があり、殆どは谷筋に平行に南北に流れる。幅はほぼ均一を測り、深さが浅いものがほとんどで途切れる部分もある。出土遺物も少なく、年代や遺構の性格が不明なものが多い。

SD03（第９図）

上段面のＸ８Ｙ４に位置し、東西に走る溝である。幅40cm、深さ15cm、長さ約5.7mを測る。西端は攪乱に切られ、消滅している。土師器・須恵器の小片がわずかに出土している。この溝とSD05の間に柱穴状ピットが集中していることから、これらの溝は何かを区画する意味をもつものとも考えられる。

SD04（第９図）

上段面のＸ７Ｙ４に位置する。幅は均一で約35cm、深さ6cm、長さ約5.7mを測る。北西に向かって浅くなって消滅している。遺物は出土していない。SB02の柱穴と重複しているが、新旧関係はSD04が新しい。

SD05（第９図）

上段面のＸ６Ｙ４に位置する。幅27cm、深さ５cm、長さ7.6mの浅い溝である。西端は攪乱の手前で途切れるが、攪乱の西側にSD05に続くものと思われる覆土がわずかにみられ、中段面への落ち込み方向に走っている。遺物の出土は見られなかった。

SD07（第10図）

中段面のＸ６Ｙ３～Ｘ７Ｙ２に位置し、谷部の肩に沿って南北に走る溝である。幅33cm、深さ８cm。途中で途切れるが、ほぼ一直線に全長約29mを測る。この溝は比較的に浅く、南北の両端で消滅している。遺物の出土は、土師器片・須恵器片・杯など多く見られた。包含層遺物とも多く接合できるので流れ込みとも考えられ、溝の年代特定は難しい。

SD08（第10図）

中段面のＸ７Ｙ２で北西に位置する。幅約50cm、深さ10cm。東西に弧を描くように延びるが、西端はトレンチによって切られ、さらに消滅しているので、溝の正確な形状が判らない。遺物は出土していない。

SD09（第10図）

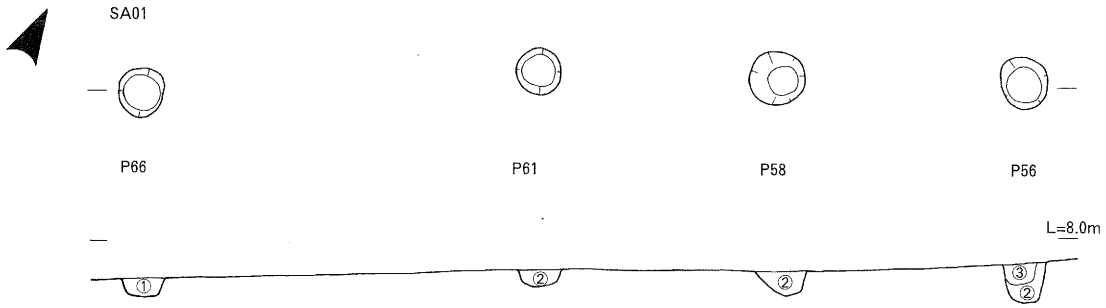
中段面のＸ７Ｙ２に位置する。幅約95cm、深さ7cmと浅く、全長4.8mの中央で途切れており、SK34と重なる部分だが新旧関係は判断できない。比較的浅い溝であり、須恵器・土師器の小片が出土している。

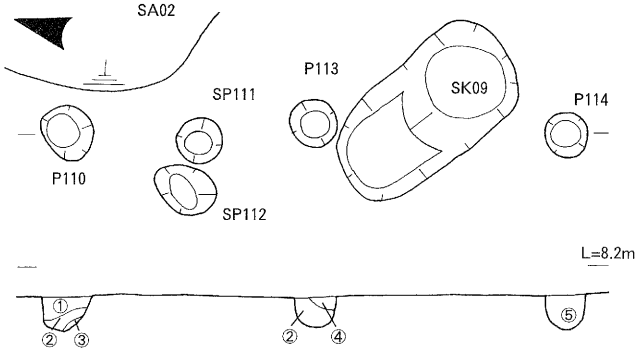
SD10（第10図）

中段面のＸ６Ｙ３に位置する。幅約40cm、深さ5cmで浅い。南から北へ徐々に浅くなり途切れるが、溝の南端ではSK37と重なる。SK37の方が新しい遺構である。遺物は、土師器片のみ出土する。

SD11（第10図）

調査区中央の中段面でＸ６Ｙ２に位置し、長さ3.3mの短い溝である。幅約60cm、深さ22cm。谷部にむかって幅が広く深くなり、谷に流れ込む溝である。遺物の出土は見られなかった。



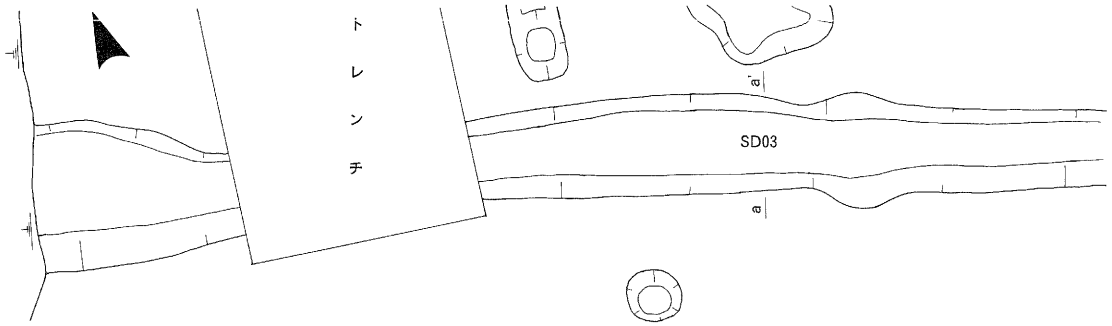


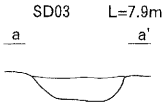
SA01

①黒色（5Y2/1）しまり弱に
地山小ブロックわずかに含む
②オリーブ黒色（5Y2/2）しまり弱に
地山小ブロックわずかに含む
③黒褐色（2.5Y3/1）しまり弱に
オリーブ色（5Y6/2）の小ブロック
わずかに含む

SA02

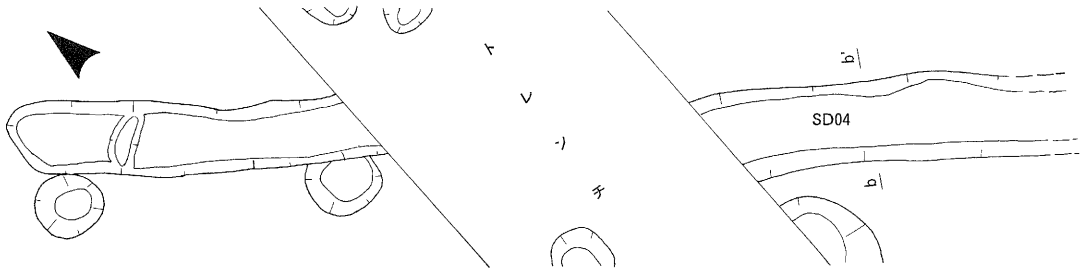
①黒色（2.5Y2/1）しまり弱に
地山中ブロックわずかに含む
②黄灰色（2.5Y5/1）粘性弱に
黒色（2.5Y2/1）の極小ブロックと
地山小ブロックわずかに含む
③灰色（5Y4/1）粘性弱に
地山小ブロックわずかに含む
④黒色（5Y4/1）しまり弱に
灰白色（5Y7/2）の極小ブロック少し含む
⑤黒褐色（2.5Y3/1）粘性強に
地山小ブロックわずかに含む

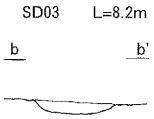




SD03

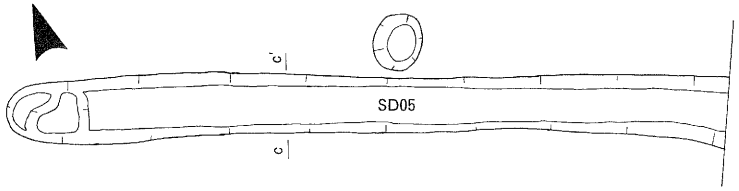
黒褐色（10YR2/2）しまり弱に
地山極小ブロックわずかに含む

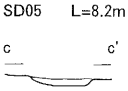




SD04

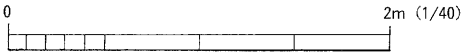
黄灰色（2.5Y4/1）しまり弱に
地山小ブロックわずかに含む



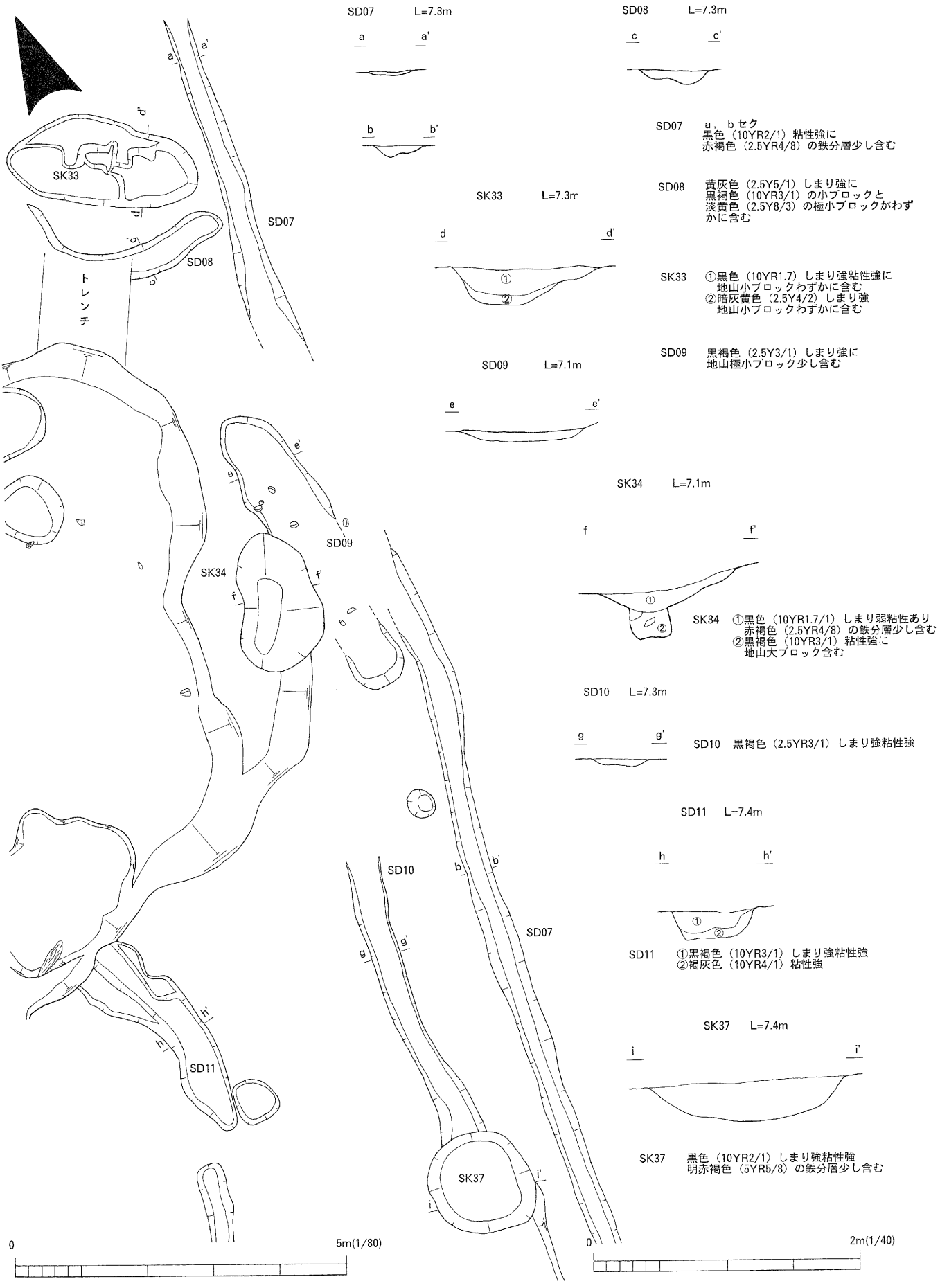


SD05

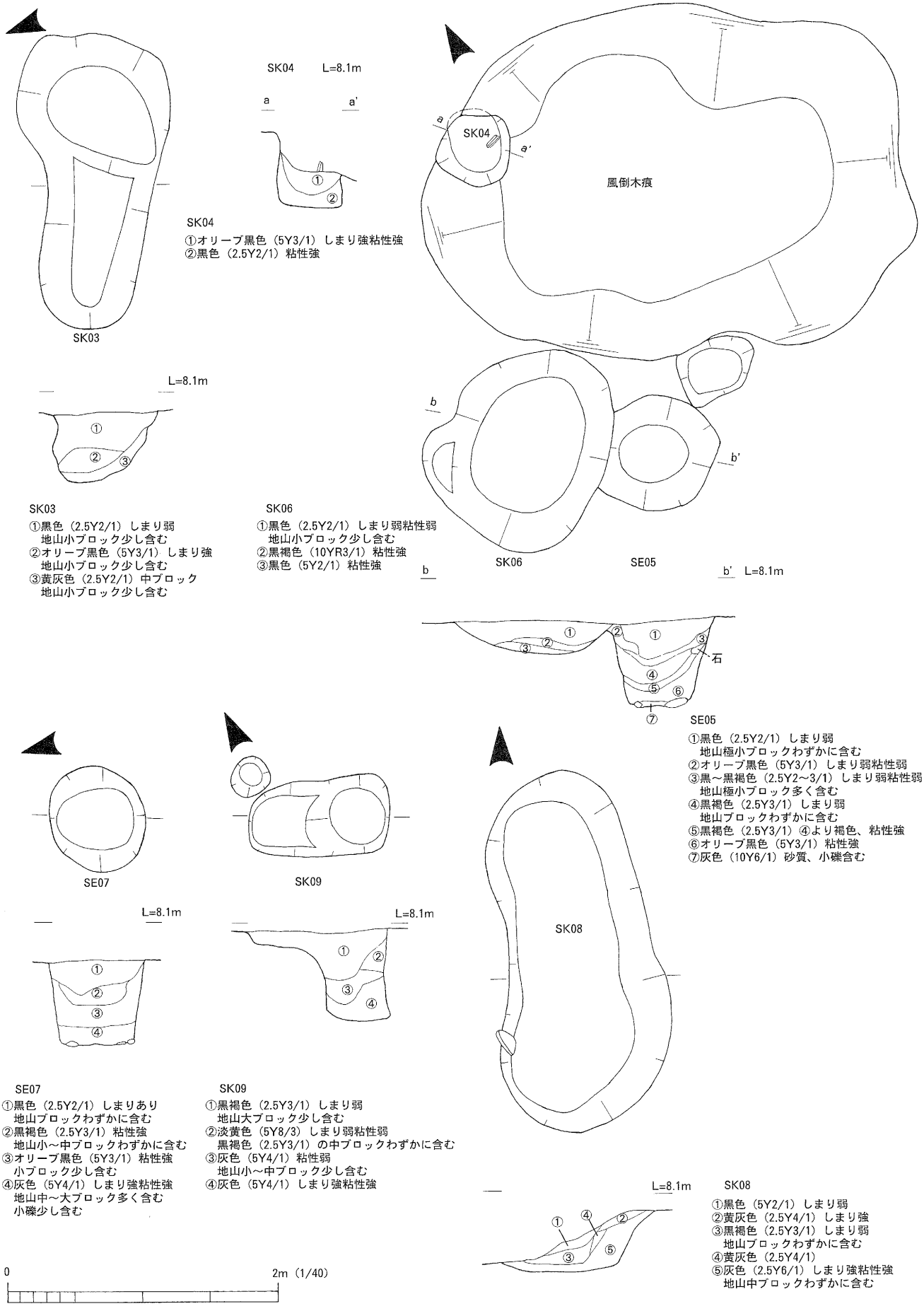
黄灰色（2.5Y6/1）しまり強に
オリーブ黒色（5Y3/1）の中ブロック多く含む



第9図　遺構実測図（1/40）



第10図　遺構実測図　平面図（1/80）　断面図（1/40）



第11図　遺構実測図　平面図（1/40）

(4) 土坑・井戸

土坑は51基、井戸３基を検出した。このうち半数以上の遺構は浅く、これらの遺構からの出土遺物は包含層からの流れ込みも考えられるので、遺構の年代は判断し難い。

SK03（第11図）

Ｘ７Ｙ４、上段面に位置し、長径約2.2m短径80cmの平面が楕円形で、深さ52cmを測る。西側が1段深く掘り込まれている。出土遺物は土師器片のみである。

SK04（第11図）

Ｘ７Ｙ４の上段面に位置し、風倒木痕の中で確認した。規模は、直径45cmで遺構検出面より深さ55cmを測る。出土遺物は、短頸壷または瓶類の高台付き底部の１点のみ出土している。

SE05（第11図）

Ｘ７Ｙ４の上段面に位置し、風倒木痕の南側に並ぶ。SK05は直径75cmの平面円形で、深さ64cmを測る。底部は砂礫層まで達しており、わずかに湧水していた。SK06と重複し、SK05が古い遺構である。遺物の出土は見られなかった。

SK06（第11図）

SK05の西に重複しており、不整形な円形の平面をもち、直径約114cm、深さ25cmを測る。出土遺物は、土師器・須恵器片が数点出土している。

SE07（第11図）

上段面のＸ７Ｙ４に位置し、直径約70cmの平面が円形で、深さ63cmの円筒状に掘り込まれている。形状はSK05より10cmほど浅いが、ほぼ同じである。底面は砂礫層まで達しており、平坦面をもつ。

SK08（第11図）

Ｘ６Ｙ３の上段面の西へと落ち込む傾斜面に位置する。長径2.7m、短径1.2mの略楕円形の平面を呈する。深さは、高台の遺構検出面より45cmを測る。

SK09（第11図）

上段面Ｘ６Ｙ４の南端に位置する。長径105cm、短径60cmの隅丸方形の平面形である。東側に最深部67cmを測る掘り込み部を持つ。底部は平坦面で、最下層より分銅が出土しており、その他には土器の出土はなかった。近世の遺構であると考えられる。

SK11（第12図）

北西になだらかに傾斜している、Ｘ９Ｙ３の北端に位置している。長径2.6m、短径1.1mの略楕円形で、深さ35cmを測る。SK08と似かよった形状・堆積状況である。

SK12～17（第12図）

Ｘ９Ｙ３～Ｘ８Ｙ３の北端で中段面に位置する。SK11の西側に隣接している。

SK12は、長径70cm・短径43cm・深さ5cmの楕円形である。

SK13は、直径約80cm・深さ約11cmで底部は凹凸面である。

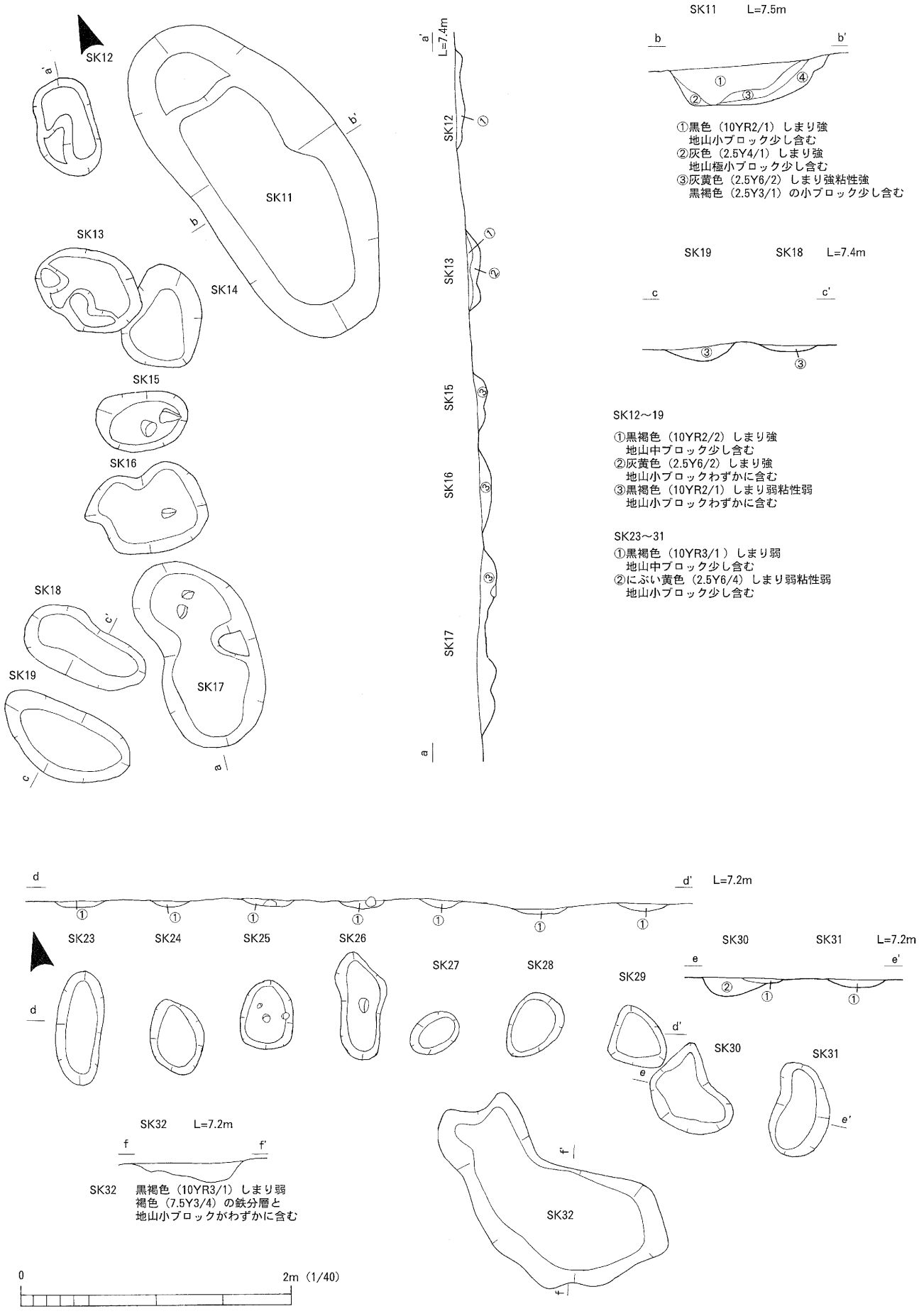
SK14は、直径約70cm・深さ6cmを測り、SK13と重複してSK14が新しい。

SK15は、直径約40cm・深さ９cmを測る。

SK16は、直径約58cm・深さ10cmを測る。

SK17は、長径1.4m・短径65cmの略楕円形で深さ15cmである。

SK12～17は、南にむかって緩やかに傾斜する面に南北に連続して並び、深度も徐々に深くなっている。こぶし大の石をわずかに残している。これらは一直線上に並び、波板状に凸凹している。それぞれの遺構から、遺物は出土していない。



第12図　遺構実測図（1/40）

SK18・19（第12図）

中段面のＸ８Ｙ２に連続し、SK17の西に位置する。SK18とSK19も南北に並ぶ。

SK18は、長径90cm・短径30cmの略楕円形で、深さは４cmと浅い。

SK19は、長径1m・短径44cmの略楕円形で、深さは11cmを測る。わずかに遺物が出土している。

SK12～17と同じように並ばないが、同じような方向で並び、まとまった位置にあることから、関連性をもつ遺構群と考えられる。

SK23～31（第12図）

中段面のＸ８Ｙ３の北に位置する遺構である。東西に不規則に列を成して並んでいる。

SK23は、長径85cm・短径25cm・深さ４cmを測り、楕円形の平面である。遺物を含む。

SK24は、直径18cm・深さ３cmを測る。遺物を含む。

SK25は、直径24cm・深さ３cmを測る。小礫が混入し、遺物も含む。

SK26は、長径75cm・短径31cm・深さ７cmを測り、略楕円形である。小礫が混入している。

SK27は、直径26cm・深さ3cmを測る。

SK28は、直径35cm・深さ3cmを測る。

SK29は、直径31cm・深さ6cmを測る。隅丸の三角形の平面形である。

SK30は、長径61cm・短径45cm・深さ13cmを測る。不整な楕円形である。

SK31は、長径75cm・短径35cm・深さ5cmを測り、略楕円形である。

これら全ては比較的に浅く、平面形も規模も違うものである。これらの北に位置するSK12～19と並ぶ方向は違うが、いずれも浅く規則的に並んでいるので、関連性が覗える。

SK23～31の遺構の周辺には、西へ1m離れた地点に同じような規模の土坑が１基、北には東西に並ぶ土坑が２基位置している。

SK32（第12図）

中段面のＸ８Ｙ３にあり、東西に並ぶSK23～31の南側に位置する。長径約1.9m・短径75cm・深さ15cmを測る。底面は凹凸面を呈する。この遺構からは、須恵器片が出土している。

SK33（第10図）

Ｘ７Ｙ２中段面の西側に位置し、SD08に囲まれた形で隣接する。長径2.9m・短径1.1mの略楕円形を呈する。深さは10～27cmで、凹凸を持つ底面である。遺物は出土していない。

SK34（第10図）

Ｘ７Ｙ２中段面の際に位置する。長径2.2m・短径１m・深さ10～35cmを測る。一段掘り込みが深くなっており、砂礫層に達して、わずかに湧水が見られた。遺物は出土していない。SD09と重複しているが、SD09が浅く途切れた部分での重なりで、新旧関係は明らかではない。

SK36（第13図）

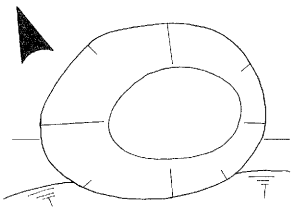
Ｘ６Ｙ２の調査区のほぼ中央で、谷にむかって張り出した中段面の落ち際に位置する。直径約1.2mの円形で、深さは70cmを測る。出土遺物は、須恵器杯Ａが2点出土している。覆土には植物遺体も見られた。

SK37（第10図）

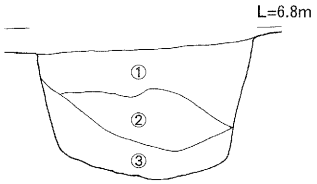
Ｘ６Ｙ３の中段面の中央に位置し、SD10と重複している。直径約1.5mの平面がほぼ円形で、深さは30cmを測る。

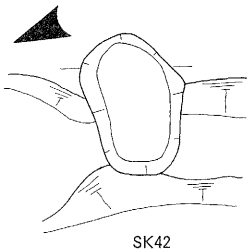
SK42（第13図）

Ｘ５Ｙ３の中段面で、途切れてはいるがSD07に重複する位置にある。長径80cm・短径45cm・深さ25cmを測る。

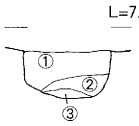


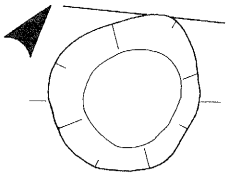
SK36



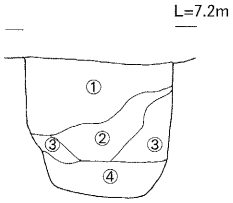


SK42





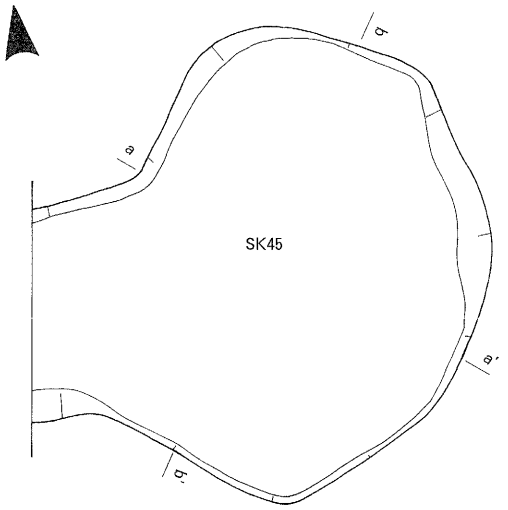
SE44

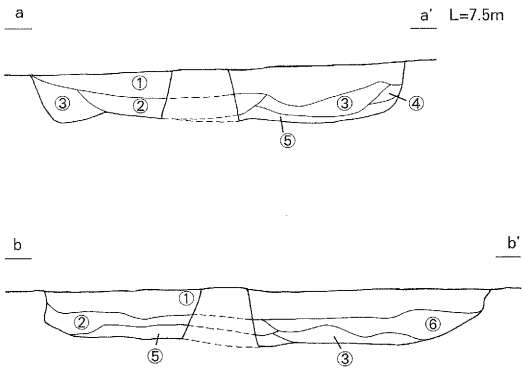


SK36　①黒色（10YR1.7/1）しまり弱
地山中ブロックわずかに含む
②黒色（2.5Y2/1）粘性強
③オリーブ黒色（5Y3/1）粘性強
砂質微量に含む

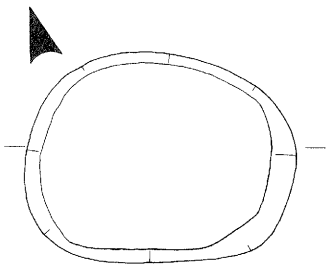
SK42　①黒褐色（10YR3/1）しまり強
②黒褐色（10YR3/1）しまり強粘性強
③褐灰色（10YR4/1）しまり強粘性強

SE44　①オリーブ黒色（5Y2/2）しまり強粘性強
②オリーブ黒色（5Y2/2）①より黒色
③黒色（2.5Y3/1）しまり強粘性強　に
地山中～大ブロック少し含む
④黒色（2.5Y2/1）粘性強　に
地山小～中ブロック少し含む

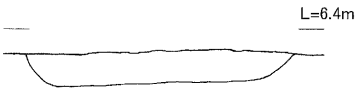




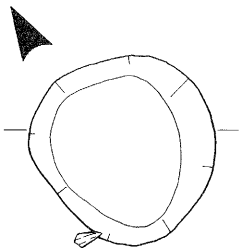
SK45　①黒褐色（10YR3/1）しまり弱粘性強
②黒色（10YR1.7/1）しまり弱粘性強
③黄灰色（2.5YR5/1）しまり弱粘性弱
④地山ブロック
⑤黄灰色（2.5Y4/1）粘性強
⑥黒色（2.5Y2/1）しまり強粘性強
各層に地山小～中ブロックをわずかに含む



SK46

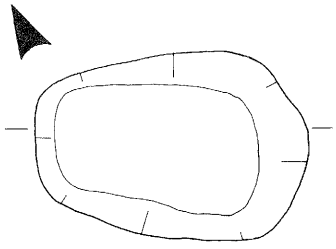


SK46　黒色（7.5YR1.7/1）しまり弱粘性強
植物遺体をわずかに含む

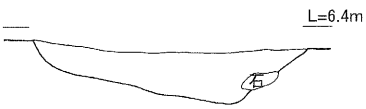


SK47

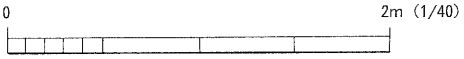
SK47　黒色（10YR1.7/1）しまり弱粘性強



SK48



SK48　黒色（10YR1.7/1）しまり弱粘性強
植物遺体をわずかに含む



第13図　遺構実測図（1/40）

SE44（第13図）

Ｘ４Ｙ３の中段面に位置し、直径79cm・深さ70cmを測る。底面は平面であり、砂礫層に達しており、湧水がみられた。

SK45（第13図）

中段面の南、Ｘ３Ｙ３に位置している。直径約2.8m・深さ30cmを測る。西側に張り出しているが、攪乱によって切られ、形状が判らず、現況は帆立形になっている。

SK46（第13図）

下段のＸ７Ｙ２に位置し、直径約1.4m・深さ17cmを測る。底面は平坦面を持つ。

SK47（第13図）

SK46の南側に位置し、直径1.0mの不整形な円形で、深さは27cmを測る。縄文土器・須恵器・土師器が出土している。

SK48（第13図）

SK46・47と共に南北に並んで位置し、長径1.5m・短径1.0mの不整形な楕円形を呈する。深さは27cmを測る。

(5) 柱穴状ピット

前述したとおり、柱穴状ピットは上段面に集中して検出した。平面形や規模は、比較的まとまりがみられる。

SP33（第14図）

Ｘ８Ｙ４に位置し、穴の規模は直径32cmの不整形な円形である。深さ10cmを測り、底面は凹凸面を持つ。土師器片が、数点出土している。

SP35（第14図）

Ｘ８Ｙ４に位置し、穴の規模は直径30cm、深さ33cmを測る。土師器片のみ出土している。

SP62（第14図）

Ｘ７Ｙ４に位置している。穴の規模は、直径33cm・深さ46cmを測る。土師器片が出土している。

SP64（第14図）

Ｘ７Ｙ４に位置し、規模は直径30cm・深さ32cmを測る。須恵器片が出土している。

SP76（第14図）

Ｘ７Ｙ４にあり、規模は直径29cm・深さ18cmを測る。土師器片のみ出土している。

SP81（第14図）

Ｘ７Ｙ４にあり、規模は直径28cm・深さ35cmを測る。須恵器片のみ出土している。

SP91（第14図）

Ｘ６Ｙ３の上段面の肩部に位置する。規模は直径26cm・深さ35cmを測る。他の穴より比較的小さい。縄文土器が1点のみ出土している。

SP94（第14図）

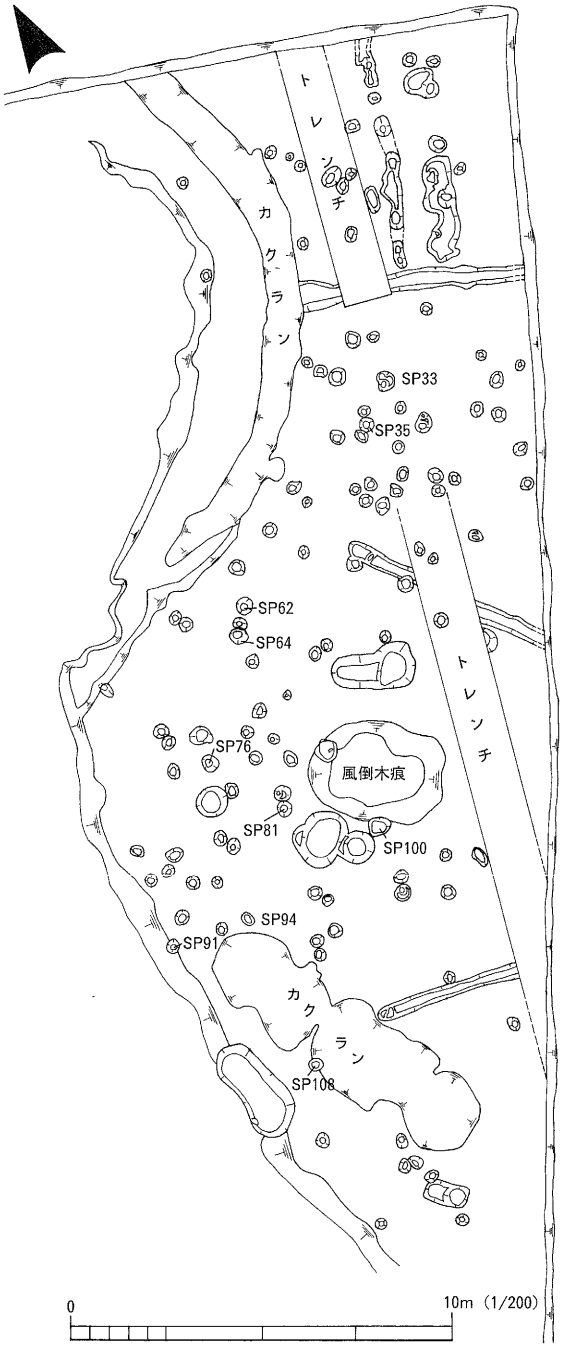
Ｘ６Ｙ４に位置し、規模は直径25cmで、比較的深く60cmを測る。土師器片が数点出土している。

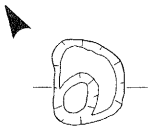
SP100（第14図）

Ｘ７Ｙ４の風倒木痕の南際に位置する。直径53cmの不整形な円形である。深さは16cmで、土師器片が出土している。

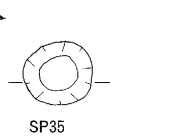
SP108（第14図）

Ｘ６Ｙ４に位置し、直径20cm・深さ13cmを測る。

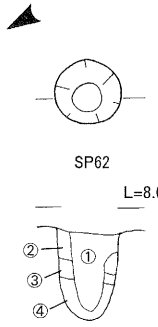




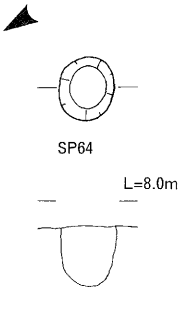
SP33
①オリーブ黒色（5Y2/2）しまり強
地山極小ブロックわずかに含む
②黄灰色（2.5Y5/1）しまり強
黒色（5Y2/1）の小ブロックと
地山小ブロックを少し含む



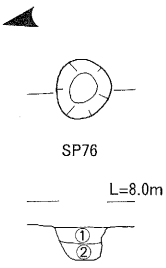
SP35
黒色（2.5Y2/1）粘性弱
地山小ブロック少し含む



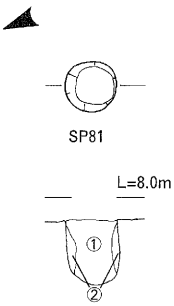
SP62
①黒褐色（2.5Y3/1）粘性強
②灰色（5Y4/1）粘性強
黒褐色（2.5Y3/1）の小ブロック少し含む
③黒色（5Y2/1）しまり強
④黄灰色（2.5Y5/1）しまり強
地山極小ブロック多く含む



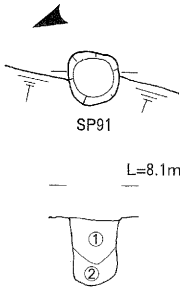
SP64
黒褐色（2.5Y3/1）粘性強
地山小ブロック少し含む



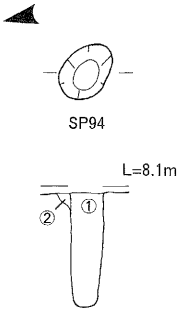
SP76　①黒色（5Y2/1）しまり強
②灰色（5Y4/1）粘性強
地山中ブロック少し含む



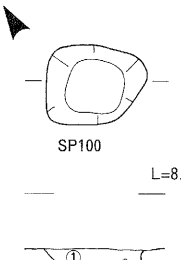
SP81　①黒褐色（2.5Y3/1）しまり強
地山小ブロックわずかに含む
②灰色（5Y4/1）粘性弱



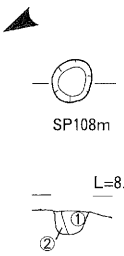
SP91
①黒褐色（2.5Y3/1）しまり弱粘性強
灰色（5Y6/1）の中ブロックわずかに含む
②黒褐色（2.5Y3/2）しまり強粘性弱



SP94
①黒色（5Y2/1）しまり強
地山中ブロック少し含む
②黄灰色（2.5Y5/1）しまり強



SP100
①黒色（2.5Y2/1）しまり強
地山小ブロック少し含む
②黒色（10Y2/1）しまり強
地山小ブロックと炭化物を少し含む



SP108
①オリーブ黒色（5Y2/2）しまり弱
明褐色（10YR7/6）の極小ブロックわずかに含む
②黄灰色（2.5Y4/1）しまり強

第14図　遺構実測図（1/40）

4．遺物

出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、珠洲焼、中世土師器、越中瀬戸、青磁、伊万里、石器、木製品等がある。検出した遺構は、比較的浅いものが多く、包含層の流れ込みと考えられる遺物もあるので、遺構の年代が判断し難い。遺構内から出土したものは少なく、ほとんどが小片であったので図化できるものは、各遺構で数点かぞえるのみであった。全形を知りえる遺物は少なかった。出土した遺物の多くは谷部からのものである。

(1) 遺構内出土遺物

SD03（第15図）

1は、わずかに「ハ」の字形を成す、太い高台がつく杯Bである。底部外面はヘラ切り後高台を貼り付け、ロクロナデ仕上げを行う。器壁は厚めである。2は、体部が直線的に立ち上がる器壁が薄い杯である。土師器・須恵器の小片が他に数点出土している。土師器片は摩耗が著しく、須恵器片は貯蔵具と思われ、叩き・当て具痕がみられた。

SD07（第15図）

この溝は浅いが、遺物の出土量は比較的多い遺構である。土師器片が多かったが、小片であり摩耗しているため図化できるものはなかった。須恵器も出土している。3は、器壁が薄い杯Bである。体部は直線的に立ち上がり、口端部でわずかに外反する。高台は細く、わずかに内傾して付いている。底部外面は薄く墨痕が残り、転用硯である。4は体部のみ残すもので、外傾角度が強く直線的に延び先細りしている、比較的浅い杯と思われる。

SD11（第15図）

須恵器・土師器片が出土した。杯Aは2点、杯Bは1点出土した。杯Aは、内外面をロクロナデで仕上げ底部外面はヘラ切りである。5は直線的に外傾し、器壁は均一で比較的低い杯である。6は、体部はやや外反して立ち上がり、端部は丸みをもつ。杯Bの7は、わずかに内湾した体部で、太く「ハ」の字形の高台がつく。調整は内外面をロクロナデ、底部外面をヘラ切り後高台貼り付け、ロクロナデを行なう。「－」のヘラ記号がある。

SK04（第15図）

風倒木痕の中から検出した土坑であるが、須恵器の8のみ出土した。8は、瓶類などの高台付きの底部である。高台は高く、内径が細長く伸びた嘴形である。

SE07（第15図）

杯Bの9は、直線的に外傾している体部をもち、高台は断面方形の「ハ」の字形につく。体部内外面ともロクロナデが行なわれる。

SK09（第15図）

上段面に位置するSK09の最下層より、刻印のある真鍮製の分銅10だけが出土した。1.6cm方形の高さ3.1cm、重量51ｇを測る。側面には「正得□」と「天下一」の文字が見られる。1682年「天下一」銘の使用が禁止されているが、これらの刻印から、1669年（寛文10）～1682年の間に製造された分銅であるということが明らかである。

SK36（第15図）

この土坑からは、須恵器の杯A2点と栗の皮が出土した。11・12ともに、内外面ロクロナデ、底部はヘラ切り後ナデ調整されている。体部はやや内湾して立ち上がり、器壁がやや厚めである。

SK37（第15図）

13の長頸瓶の胴部が1点だけ出土した。肩部に2条の沈線があり、自然釉が付着している。

SK42（第15図）

縄文土器14・15、土師器、須恵器、磨製石斧16が出土した。14の器面は縦の条痕文、15は単節の縄文が施されている。内面は丁寧なミガキが行なわれる。16は基部が欠損している、磨製石斧である。断面は隅丸長方形で、刃部は蛤刃である。

SK47（第15図）

縄文土器17、土師器、須恵器18・19が出土した。17は、器面は縦の条痕文にススが付着しており、内面丁寧なミガキが行なわれる。18は杯Aで、体部は直線的に外傾し、器高はやや低めのものである。内外面はロクロナデ、底部外面はヘラ切り後ナデが行なわれている。19は甕の胴部で、器面は格子の叩き目、内面は同心円の当て具痕がみられる。

SK50（第15図）

磨製石斧20、土師器片が出土した。20は基部が欠損している、磨製石斧である。表面が剥離しているが、断面は隅丸長方形である。

SK52（第15図）

SK52は下段面に位置し、21のみ出土している。縄文土器の深鉢の口辺部である。縦走する条痕文に、2条の沈線の間に山形の沈線が施されている。

SB01－P19（第15図）

掘立柱建物の柱穴から出土している遺物は少なく、SB01ではP19（須恵器）とP23（土師器）のみである。図化できるものは22の1点であった。22は須恵器の杯Bである。体部内外面はロクロナデ、底部内面はナデ、底部外面はヘラ切り後高台貼り付けしロクロナデが行なわれている。高台は「ハ」の字形につき、底部の器壁は厚い。

SB02－P51（第15図）

SB02の柱穴から遺物が出土しているのは、P51（土師器）である。23は、土師器の小型甕の口辺部で口径約14.7cmを測る。

SP62（第15図）

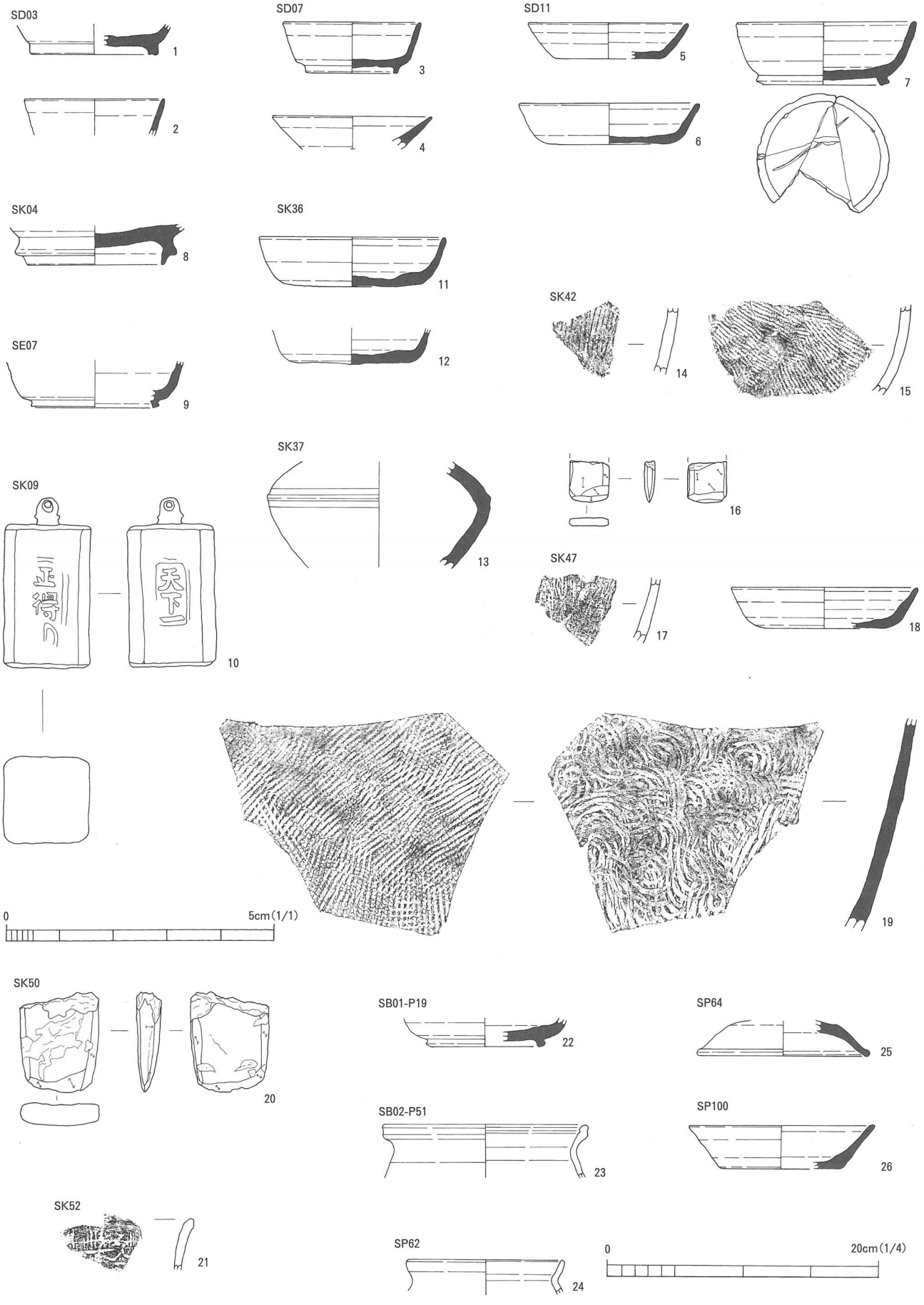
土師器のみ出土した。24は土師器の小型甕の口辺部で、口径11.4cmを測る。内面に薄くススが付着している。

SP64（第15図）

須恵器のみ出土した。25は須恵器の杯蓋で、つまみを欠いている。天井部はヘラ切り、口辺部はロクロナデされている。肩部に稜をもち、口縁部でわずかに外屈している。

SP100（第15図）

土師器、須恵器・26が出土した。26は杯Aで、体部は直線的に外傾している。底部と体部の境は明瞭である。



第15図　遺構内出土遺物実測図（1/4　10は原寸）

(2) 谷部

今回の調査で出土した遺物の多くは、谷部からのものがほとんどである。この谷の覆土は大まかに4層に分かれるが、どの層からも縄文土器や須恵器が出土している。最上層では、縄文～中世の遺物が出土している。

i．縄文土器（第16・17図）

縄文土器は谷部での各層から出土しているが、下層へ下るにあたって若干ではあるが出土量は増えている。全体的にみると、条痕文・無文の土器片が多いが、図化できるものが少なかった。

第16図は、口辺部を図化したものである。1～12は、口辺部に指頭による圧痕で凹線文が施され、胴部は縦走する条痕文である。全て、鉢類の口辺部だと思われる。1・2は2条の凹線文が巡り、口唇部は櫛歯状工具による短いナデが施されている。1・2は同一個体と思われる。形態は、胴部から直線的に延び、口唇部で外反するものである。3・4も同様に凹線文、口唇部は櫛歯状工具による短いナデ、条痕文が施される。3は内湾して立ち上がる。5は、わずかに内湾して立ち上がり、横位の条痕文をもつ胴部で、口辺部に2条の凹線文、口唇部に指頭痕がみられる。6は、口唇部で櫛歯状工具による短いナデと、同一工具によると思われる条痕文が縦に入っている。7は2条の凹線文に、口唇部は指頭痕がみられる。8・9も端部に櫛歯状工具による、列点文が施されている。そして、8には2条の、9には3条の凹線文がある。10・11は小片ではあるが口唇部に2条の凹線文がみられ、10は内面にも1条の凹線文が施されている。12は、1条の凹線文に、口唇部は列点文が施されている。

出土した縄文土器で、直線的に延びる口辺部がほとんどであったが、13は「く」の字状に屈曲していた。13は、直線的に立ち上がる胴部が、頸部で外屈し口が開く形となっている。頸部で3条の沈線がめぐり、隆起している部分に刺突文が並んでいる。口唇部でわずかにふくらみをもち、指頭による圧痕がみられ、そして低い山形を成す波状口縁である。

14～16は、口辺部に沈線がめぐっているものである。14は5条の沈線のみであるが、15・16は半隆起線文帯がつき、16においては隆起線文上に刺突文がみられる。

17・18はほぼ直立する口辺部で、17は横位の条痕文、18は単節の縄文が施されている。

条痕地の口縁に数条の凹線文をめぐらすものは、後期後葉にみられる。直立した口辺部で縄文施文と条痕施文の土器は、後期から晩期の変換期にみられるものである。

第17図では、先ず浅鉢を挙げる。19・20・23は無文のもので、磨きが施されている。19と20は同一個体と思われ、径の小さい底部から直線的に胴部が外傾してのび、口唇部でわずかに内湾している。23は、小さい底部からわずかに外反して伸びる胴部を持つ。わずかに粘土帯の継ぎ目がみられる。21・22は口辺部にそれぞれ4～3条の沈線をもつ、浅鉢である。これらの浅鉢は内外面丁寧に磨かれている。

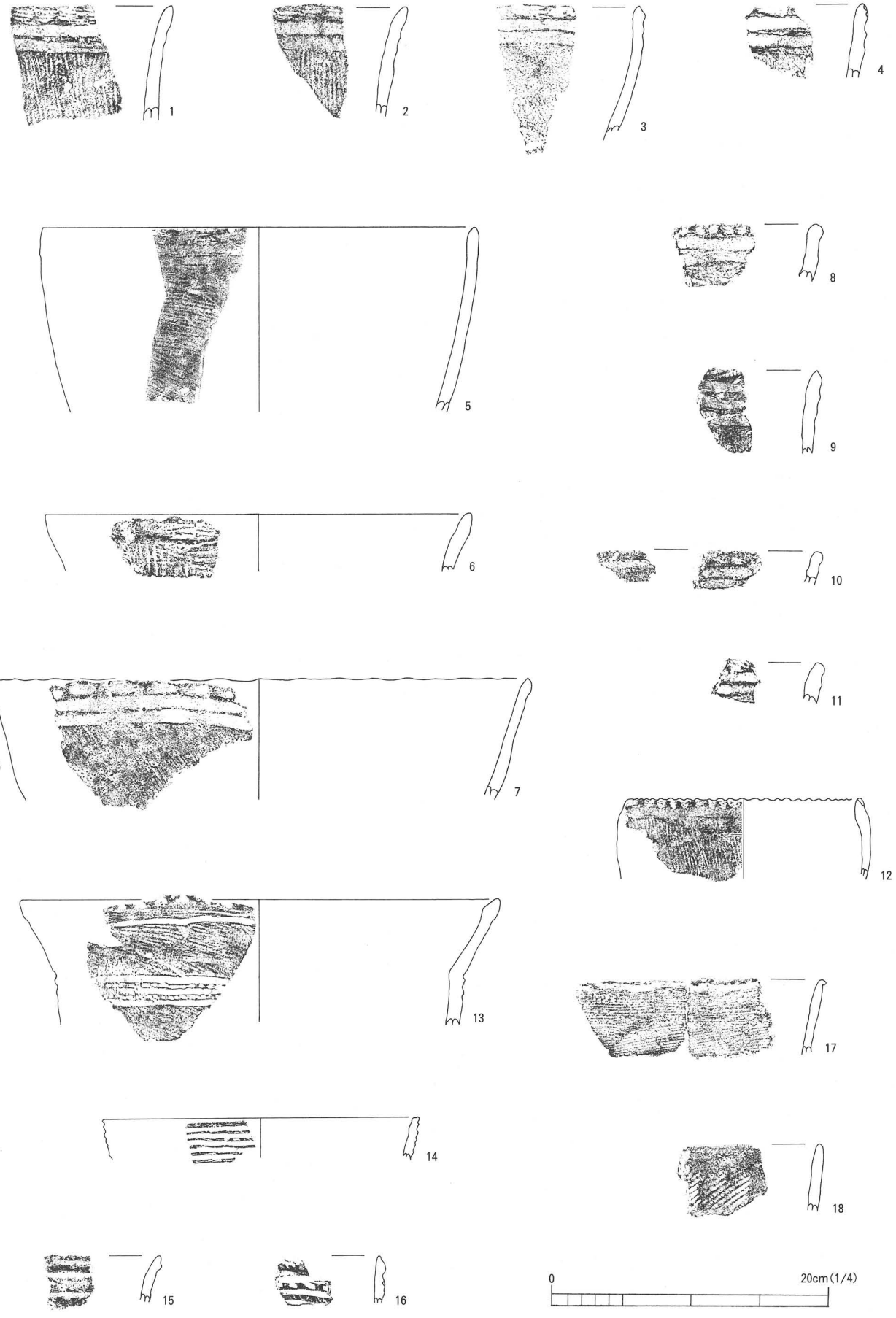
24は、深鉢の直線的にのびる胴部～底部である。25・26は、スダレ状圧痕と思われる。27は、大きい底部で網代圧痕がわずかにみられる。摩耗しているため、網代の編み方をよみとることは出来なかった。その他にも、底部外面の圧痕がみられるもの多かったが、摩耗が著しく、図示できなかった。

28・29は縦に隆帯文がつき、これを境に左右の胴部に違う施文がみられる。29は土器片が小さいため施文をよみとることは出来ないが、28は斜めの沈線と列点文が施されている。

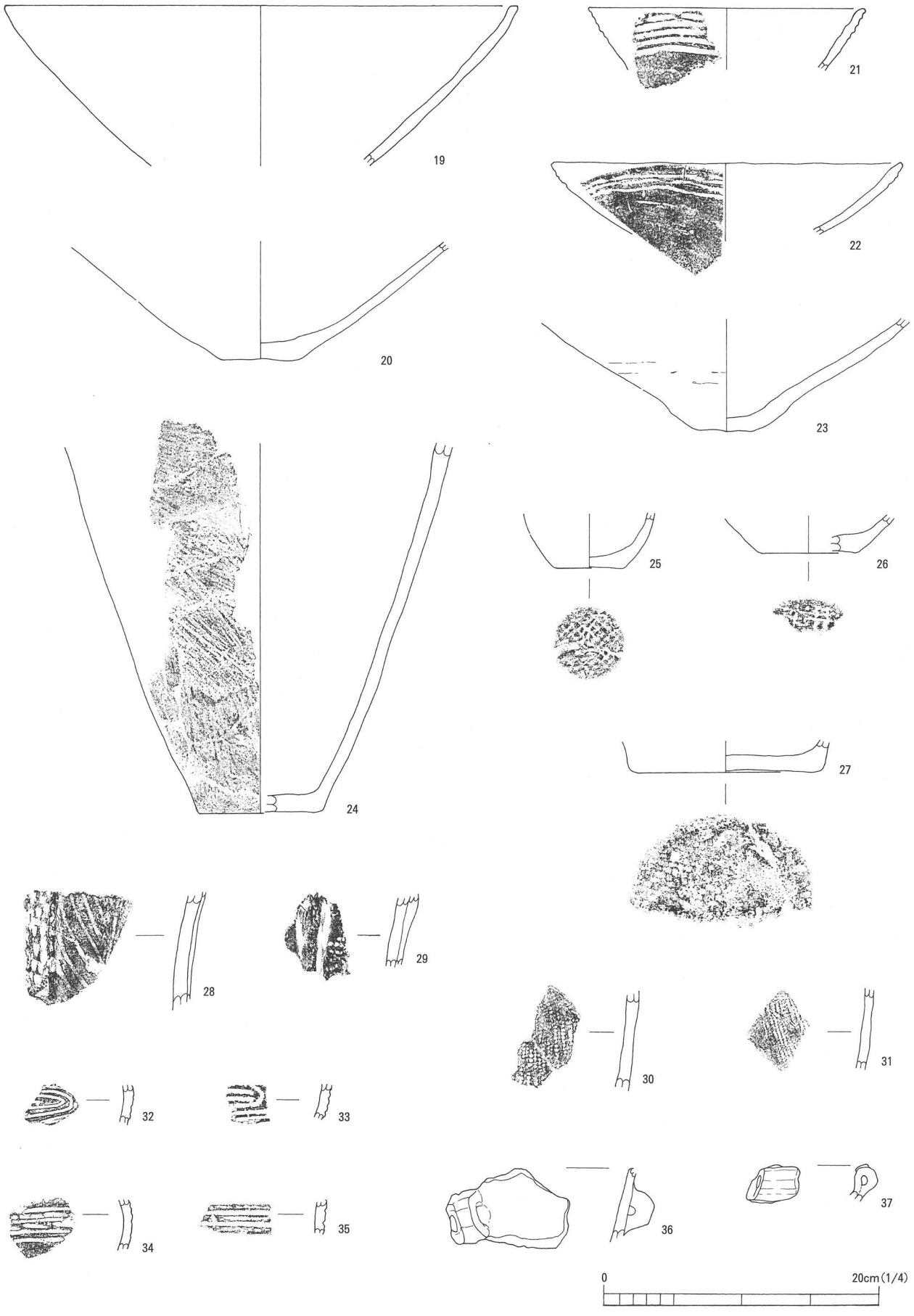
今回出土した土器では、縄文を施したものは少なく、十数点数えるのみであった。30・31は単節の縄文がみられる。

32は楕円状の沈線、33は楕円の沈線内に2本の沈線が描かれている。34・35は数条の沈線が施されている。

36・37は、装飾部である。36は磨き調整された胴部につくものである。37は頂上部に付くものだろうか、輪を結ぶ下は欠損しており、この輪状の頂部に薄く押し潰された円形の貼付文がみられる。



第16図　谷部出土遺物実測図・縄文土器（1/4）



第17図　谷部出土遺物実測図・縄文土器（1/4）

ii．須恵器

須恵器は、今回の調査で出土した遺物の4割を占める。そのうち供膳具が半分強出土し、完形品も数点であるが出土している。器種を見てみると、供膳具形態のものは杯蓋・杯B・杯A・高杯などがあり、貯蔵具形態のものでは短頸壷蓋・長頸瓶・広口瓶・甕、谷部にあたるトレンチ内より擂鉢（第4図）がある。小片だけで推測されるものでは、横瓶の存在がうかがえる。

杯蓋（第18図）

1～3は柱状のつまみをもち、頂部からやや丸みを帯びながら伸び、口縁部で外屈する。端部は丸く簡略化している。頂部のヘラ切り後のナデつけが雑であり、口縁部内外面はロクロナデ調整がおこなわれている。この形のものが、小さく口径12cm前後を測る。4～7、10・11は、天井部に平坦面をもち、肩部に稜を成し口縁部へのびる。端部は断面三角形がほとんどであるが、やや外側に引き出して丸くおさめるもの（6）、内側に稜をもつもの（10・11）もある。8・9は、柱状化したつまみをもち、器壁が厚く、器高が低い。頂部から口縁部は平坦であり、端部は下方へ折れる。12・13は、天井部に平坦面をもち、肩部から口縁部にむかって丸みをおびる。端部は丸みをもつ断面三角形である。14・15は、端部の折り返しが短く、面取りされたような形である。

調整をみると、4・5・8・12・13・15は天井部を回転ヘラ削り、口縁部の内外面はロクロナデ、内面中心は不定方向のナデが行なわれる。その他は、天井部ヘラ切り後軽くナデがはいり、口縁部から内面中心までロクロナデのもの、中心は不定方向のナデが入るものがある。

10・12は、内面に墨痕がみられ転用硯である。15は、内面に「－」ヘラ記号がみられる。図化したものだけで法量の分類をすると、口径の小さいものから11.5～13.3cm、13.8～14.8cm、15.0～16.6cmとなる。

杯B（第18・19図）

16～25は、体部が直線的に外傾し、口端部でわずかに外反する。高台は、断面方形の直立して付くものがほとんどで、17・24は「ハ」の字状に付く。18は体部に1条の沈線をめぐらせるもので、高台は細く長い。19は、体部と底部の境付近に短い高台が付くものである。調整は、底部外面はヘラ切り、底部内面から体部はロクロナデである。20・25は底部内面が不定方向のナデが行なわれる。26は、体部が直立した器高の高いものであり、体部半ばに2条の沈線をめぐらす。底体部の境に回転ヘラ削りが施されている。27は、底部外面に「＝」のヘラ記号がみられる。28の底部外面に墨痕がみられ、転用硯である。

29～39は、体部が短く、低い高台が「ハ」の字状につき内径が接地する形のものである。29の高台も「ハ」の字状ではあるが、細長いものである。体部が外反するもの（29～35）、わずかに内湾して立ち上がるもの（36・37）、直立するもの（38・39）がある。これらの全てが、体部の内外面がロクロナデ、底部外面ヘラ切り、底部内面不定方向のナデ調整が行なわれているものである。32は底部外面に「×」のヘラ記号がみられる。40は、今回出土した杯Bでこの1点のみ底部に回転糸切り痕がみられるものであり、小片であるが図化した。この小片は底部のみであるが、高台は貼付によるものではなく、一端糸切りによる切り離しを行なった後、高台をつくるために凹みをつけて、高台の境としている。また、断面を見てみると、底部に薄い粘土板を貼り付けたものである。

法量を分類すると、口径の小さいものから10.0～11.2cm（16～24）、11.6～14.8（29～39）に分けることができる。

杯Bでは墨書土器が3点ある。24は底部外面に2文字みられるが、「□田ヵ」墨痕が薄く判読が難しい。25は体部外面に「大」の墨書が見られる。筆の運びが雑で、線も太いことから「＊」とも読み取ることができる。しかし、周辺遺跡でも「大」の墨書土器が出土していることを考えれば、「大」の字でも妥当であろう。36は底部外面に2文字みられる

が、判読不明である。

杯A（第19・20図）

法量による分化は、明瞭ではない。強いて分類すると底部の形状であるが、底部に丸みをもつものは67のみで、平坦面をもつものは68～70のみである。その他、41～66はそれらの中間のものとなり、大半を占める。調整をみると、底部外面は全てロクロナデ後のナデつけであり、体部から底部内面ロクロナデと体部内外面ロクロナデ、底部内面ナデが半分の割合である。

墨書土器は2点出土しており、49の底部外面に比較的墨痕の残りが良く「長」が判読できた。52も底部外面に「黒川」と読むことができた。

51の底部外面には「×」のヘラ記号がみられた。

その他の器種（第20・21図）

71は、短頸壷蓋である。口端部は内側へ折れる。器壁は降灰の為調整不明であるが、口辺部内面はロクロナデ、天井部内面は不定方向のナデ調整が行なわれている。

72は、高杯の脚部で上半部に2条の沈線がみられる。丁寧なロクロナデが行なわれている。

73は、把手付鉢である。器面は叩き後ロクロナデが行なわれ、沈線が何条もみられる。

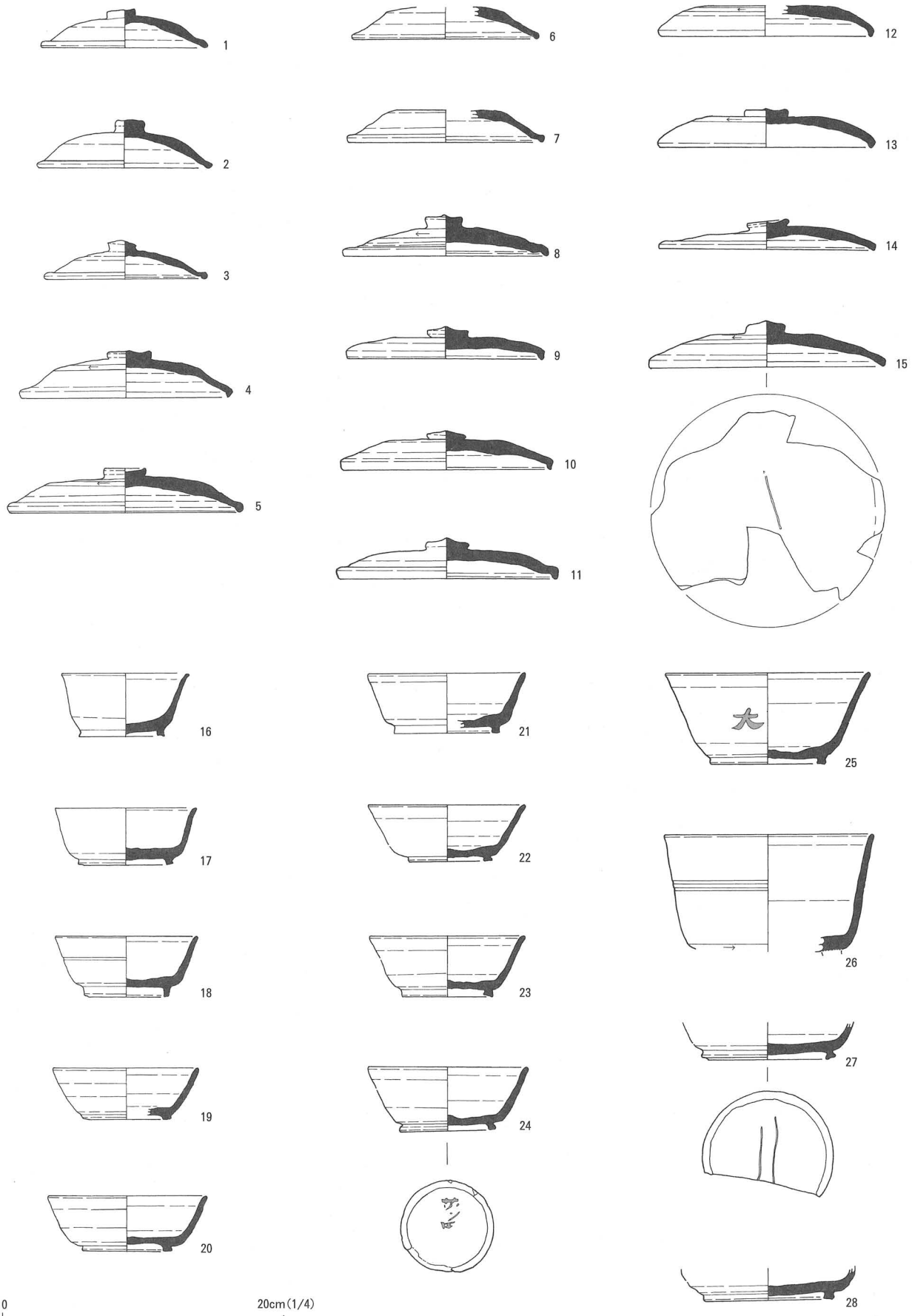
74・79は、広口瓶である。74は口頸部のみであるが、口端部で外へ折れるように外屈する。79は口端部を欠損しているが、外反して平坦面をもつ。頸部の下半部に2条の沈線を持つ。肩部が張り、鋭く屈曲する。口頸部～肩部にかけては、降灰のため調整不明であるが、胴部上半部はロクロナデ、下半部は回転ヘラ削りが行なわれる。

75～78は長頸瓶もしくは広口瓶などの瓶類と思われる。75は小型で肩部に沈線をもち、ロクロナデ調整が行なわれる。76も肩部に沈線を持ち、調整はロクロナデである。77は、肩部に沈線があり、高台は「ハ」の字状に付き端部は下方へ延びるが面取りしている。胴上半部はロクロナデ、下半部は回転ヘラ削り調整である。78は胴部に丸みをもち、高台は「ハ」の字状につき端部が下方と外側へつまみ出されている。調整はロクロナデである。

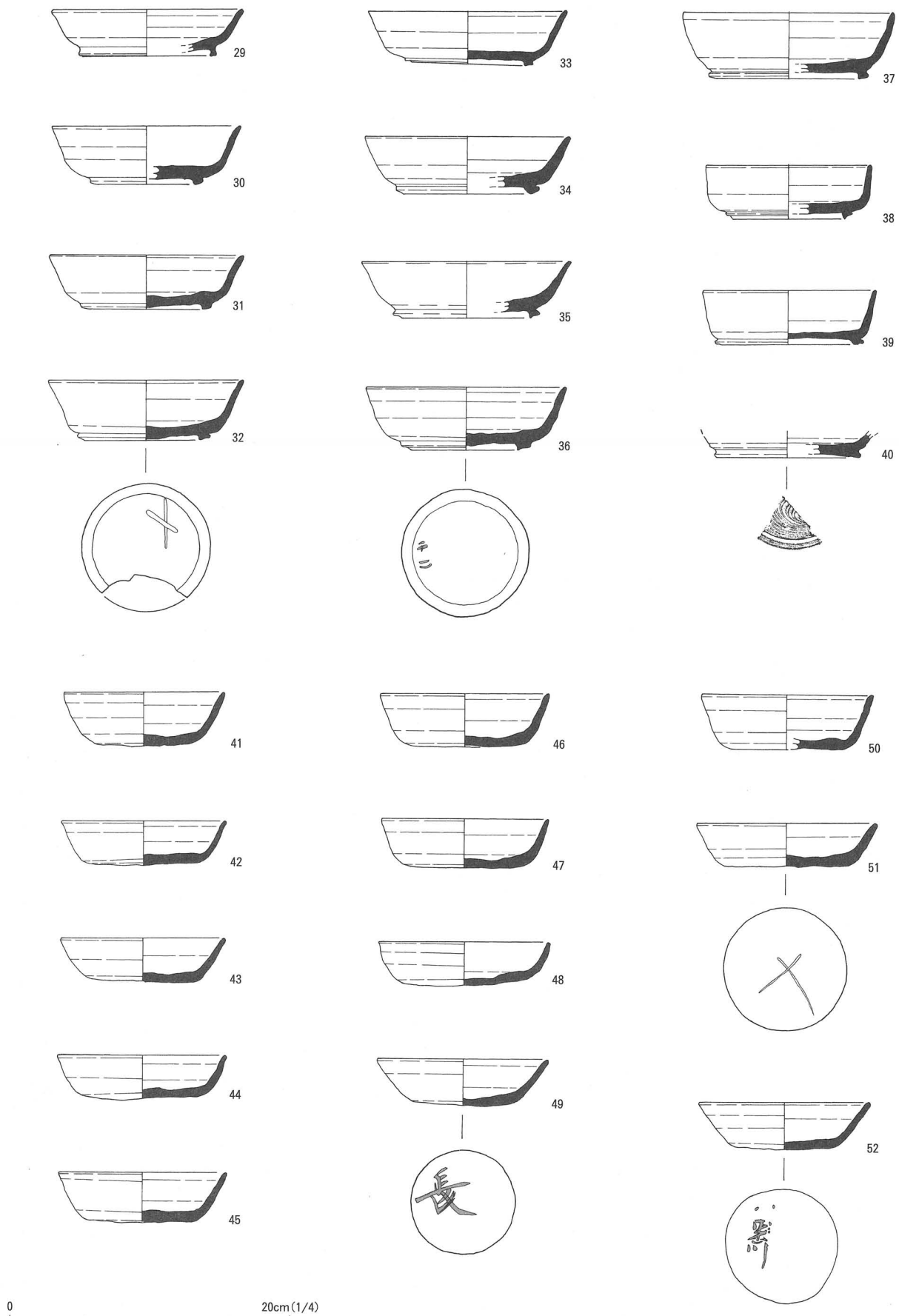
80は、長頸瓶である。比較的残りが良く、復元が出来た。頸部は上部に2条の沈線をもつ。胴部はやや丸みをもち、肩部に沈線がみられる。高台は長く「ハ」の字状に広がって付き、端部は下方へ引き出され、欠損はしているが断面三角形をもつものと考えられる。高台の付け根にヘラ状工具による刺突による穴があり、残存するもので2箇所の孔が見られるが、その間隔をみると3ヶ所の穿孔がうかがえる。

81～83は甕である。81・82は口縁部が短く、「く」の字状に外屈しており、端部は面形成している。83は、頸部は厚く接合しており、口頸部は外反して立ち上がり、端部で厚みを持って内側に稜を形成している。甕の調整は、口縁部ロクロナデ、胴部は叩き、当て具痕がみられる。

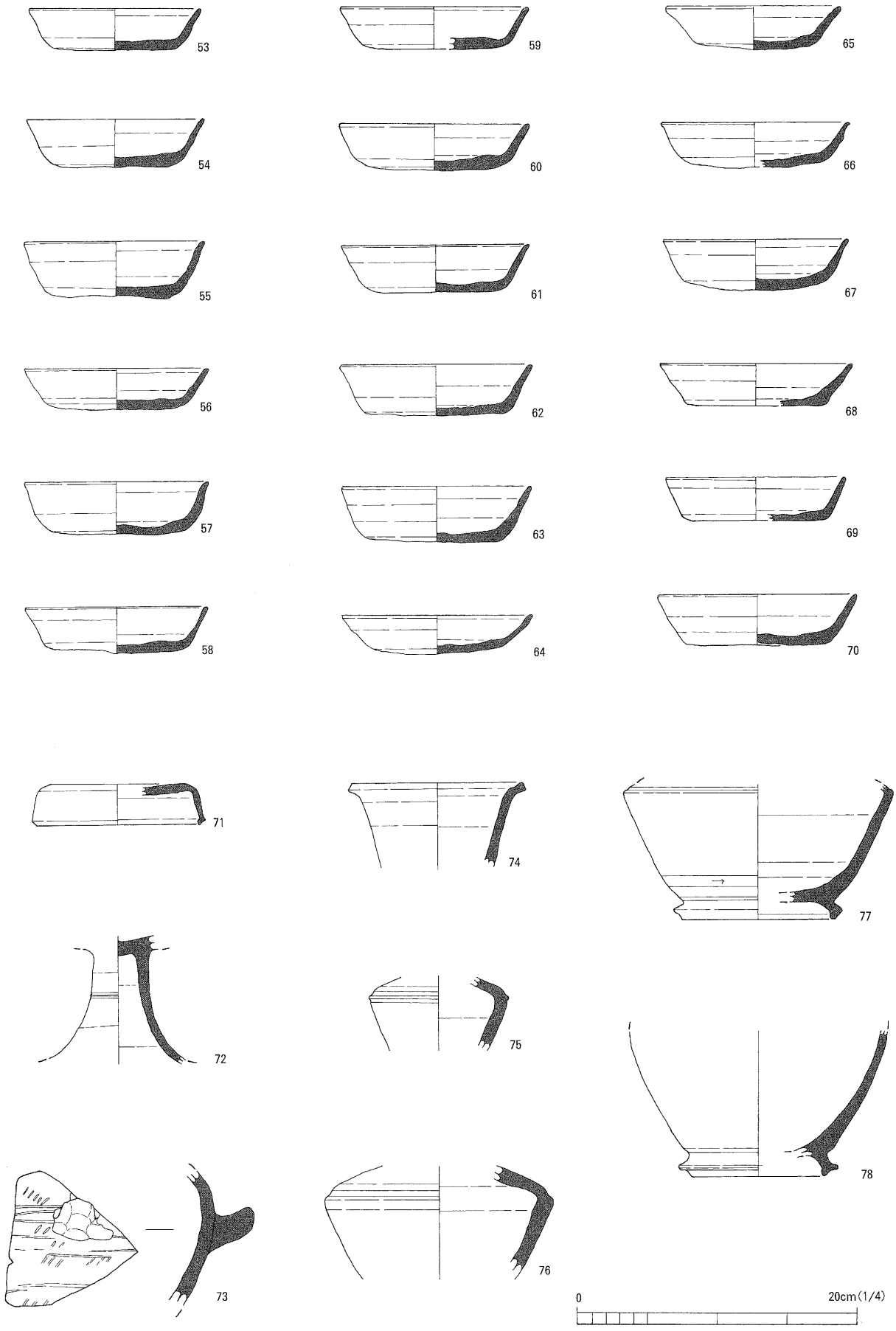
84～87は、口縁部がわずかに外反するもので、端部を面形成している。口縁部ロクロナデ、胴部は叩き後内外共にカキ目で仕上げている。壷ないし小甕と考えられる。



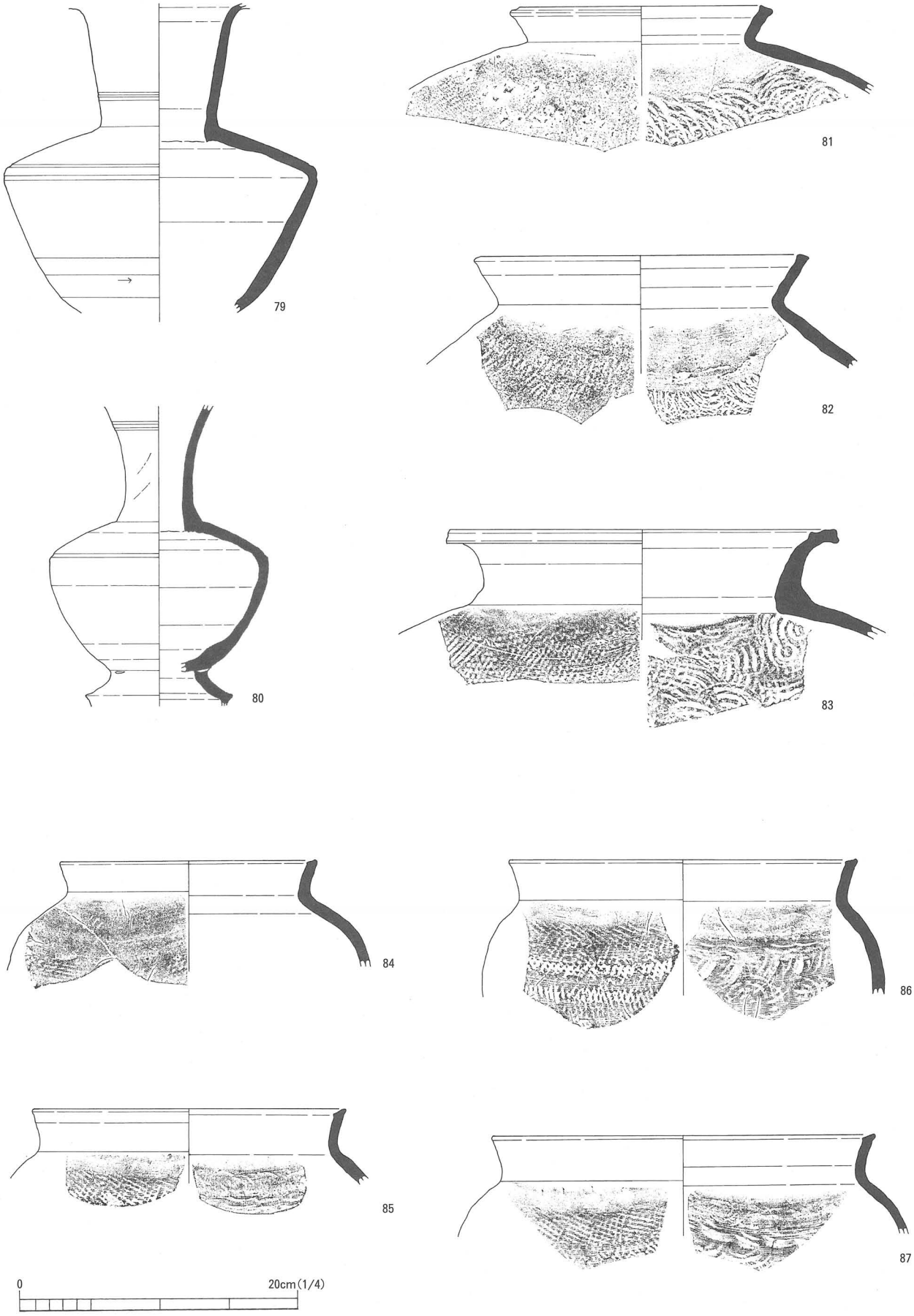
第18図　谷部出土遺物実測図・須恵器（1/4）



第19図　谷部出土遺物実測図・須恵器（1/4）



第20図　谷部出土遺物実測図・須恵器（1/4）



第21図　谷部出土遺物実測図・須恵器（1/4）

iii．土師器・その他（第22・23図）

谷部より出土している土師器は、摩耗が著しく図化できるものも少ない。土師器の器種は、甕、甑、高杯、埦などが出土している。内黒土器も出土しているが、皿の器種のみである。その他に、土錘、フイゴの羽口、中世土師皿、珠洲焼、青磁、越中瀬戸、伊万里が出土している。

甕　1～8は甕である。1は、口縁部が外反し、端部の折り返しがやや長めに立ち上がる。2・4は、口縁部が短く「く」の字状に外屈する。2の端部は断面三角で、胴部器面はカキ目、口縁部～内面はロクロナデ調整である。4は端部が丸く、調整は全面ロクロナデが行なわれる。3は器壁が薄く、口縁部が外反する。5・6は長胴甕であり、直線的に伸びた胴部から、「く」の字状に外屈した口縁部をもつ。5の端部は、丸みをもって内側に折り返しており、頸部にわずかカキ目調整がみられ、口縁部から内面はロクロナデである。6は、端部は内側に折り返し、器面はロクロナデ調整である。この端部折り返しのものは、9世紀にみられるものである。7は、口縁部内側に緩い段を持ち、方形の端部である。口縁部内面にカキ目がわずかにみられる。8は、甕の胴下半部である。須恵器整形のもので、内外共にタタキが見られ、底部内部はナデ調整でタタキ目が少し消されている。

11・12は小型甕である。端部をつまみだした形となる。ともにロクロナデ調整である。11は胴中心部に最大径をもつ。12は口縁部に最大径をもつ。

24は小甕の底部だと思われ、体部にヘラ削りがみられ、内面は中心までロクロナデ調整である。

25は、底部糸切りによる切り離しが行なわれている。甕の底部だと思われる。

26は高台が高く、甕類の底部と思われる。底部糸切り痕がみられる。

甑　9・10は甑の口辺部と考えられる。9は、胴部をカキ目が施され、口端部で外側につまみ出されている。10は、口端部で外屈し、端部面取りしている。調整は、内外面共にロクロナデである。

高杯　13は高杯の脚部である。脚部は低く、外側へ強く張り出している。端部は下方へ引き出された断面三角である。

内黒土器　14～17は、内面黒色処理を施された皿である。口径は12.0～13.8㎝、器高は1.65～2㎝を測る。調整は、内面ミガキ、器面ロクロナデ、底部外面は不定方向のヘラ削りが行なわれている。15・16は口端部で外反し、14・17は口縁部外面が凹状に強くロクロナデが入る。

埦　わずかではあるが、出土している埦をなるべく図化して挙げた。18の体部は直線的に外傾して立ち上がる。器壁はかなり薄く、摩耗が著しく調整が不明である。底部外面はわずかに回転糸切り痕がうかがえる。19～21は、体部が内湾して立ち上がるものである。18～21は9～10世紀のものと思われる。22は、前者のものと比べて底径が大きくなる。高台状になる底部を持ち、体部下半に段を持ち内湾して立ちあがる。23は、器厚は均一であり、体部は内湾して立ち上がる。口径は大きめである。これら全てロクロ成形である。底部切り離しで糸切り痕を残すものは18・21・22、19は底体部の境から底部外面を不定方向のヘラ削り、23は体部下部を回転ヘラ削り・底部外面は不定方向のヘラ削りである。

土師器皿　非ロクロ成形である。口縁部外面は軽い1段ナデである。口径は8～9.4㎝、11.8～14.2㎝に2つに分類できる。28・31は口縁部に強いナデが入り、段を持ち、口縁部の端部を三角形状につまみあげている。28の内面にハケ状工具の痕が残る。27・30・32・33は、口縁部が短くわずかに外傾するものである。34は口端部にふくらみをもつものであ

る。35・36は直線的に外傾するものである。29・37・38は底部から丸みをもって開くものである。12～13世紀と考えられる。

土錘　41の土錘は、にぎりの痕と「×」のヘラ記号がみられる。両端部はヘラ削りによる切り離しである。長さ6.3㎝、最大径4.5㎝、孔の径1.5㎝を測る。

羽口　フイゴの羽口は数点出土しており、42は比較的残りの良いものであった。

不明土製品　40は不明土製品で、欠損部分を推測すると完形品は楕円形と思われる。片側に6条の沈線があり、両面共に中央に凹みをもつ。１㎜径の石粒を多く含む。

珠洲焼　珠洲焼の出土は少なく、十数点を数えるだけであった。43は甕である。43は、口縁部が肥厚し短く「く」の字状に屈曲する。端部は丸みを帯びた方形である。珠洲Ⅳ期のものと思われる。46は壷もしくは甕で、右下がりの比較的細かいタタキ目を残す胴部である。44・45は擂鉢である。44の卸し目は6条を単位とした曲線文をもつ。45は、10条の単位で直線的な卸し目をもつ。底部の切り離しは、静止糸切りである。

越中瀬戸　47～54は、越中瀬戸である。47～51は皿である。47は、体部半ばで段をもち、口縁部で外反するものである。底部の切り離しは、回転糸切りである。48は器壁にやや厚みがあり、口端部で外反している、折縁皿である。灰釉が施されている。49は、直線的に立ち上がる体部が半ばでわずかに段を持つものである。50は、底部のみで見込み部分に二重菊紋が押捺されている。灰釉が施されている。51の底部は、削り出しによる三角形の高台である。

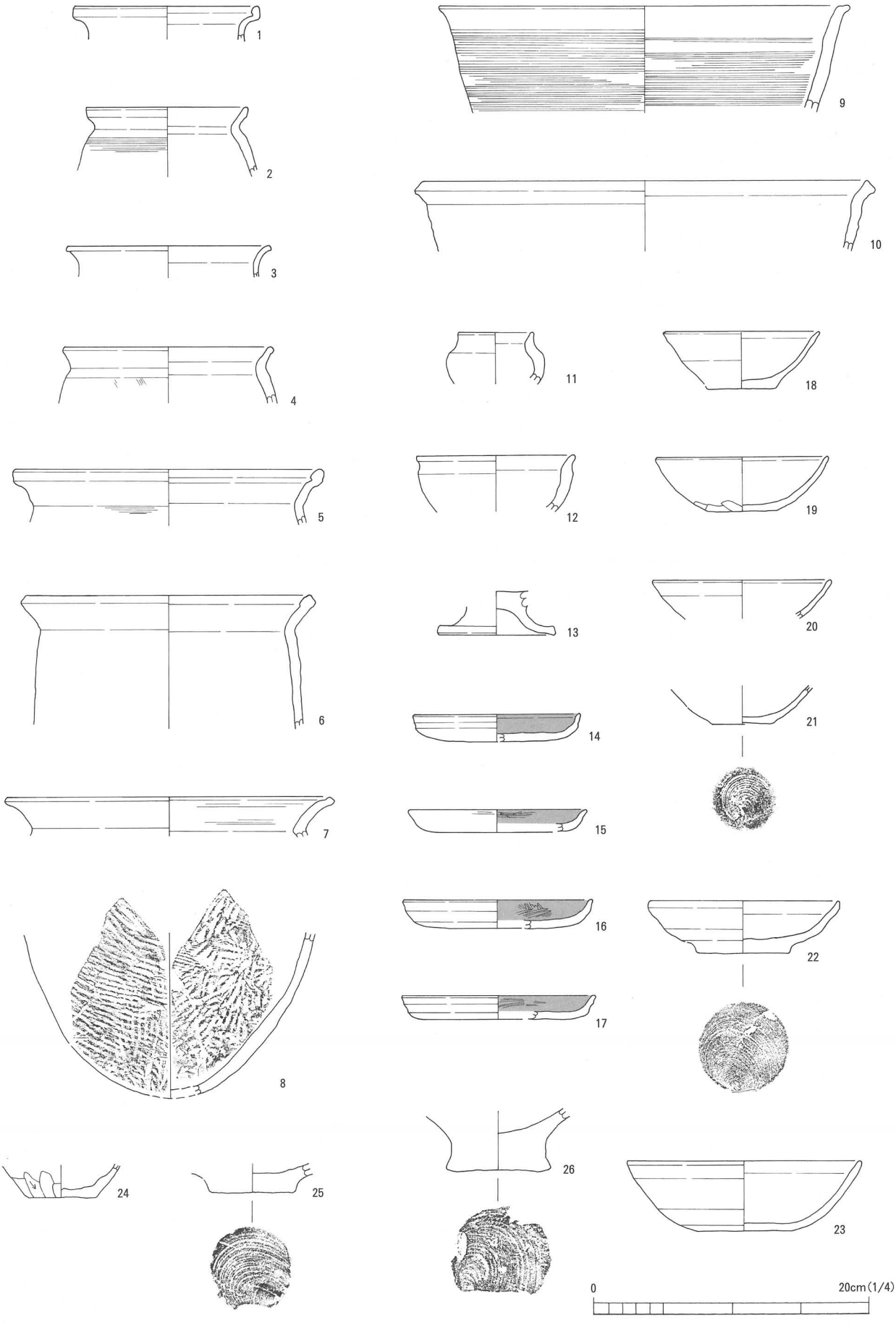
52は小型鉢で、底部は回転糸切りによる切り離しである。内面全面に薄く鉄釉が施されている。

53は、向付である。口縁部でわずかに外反している。

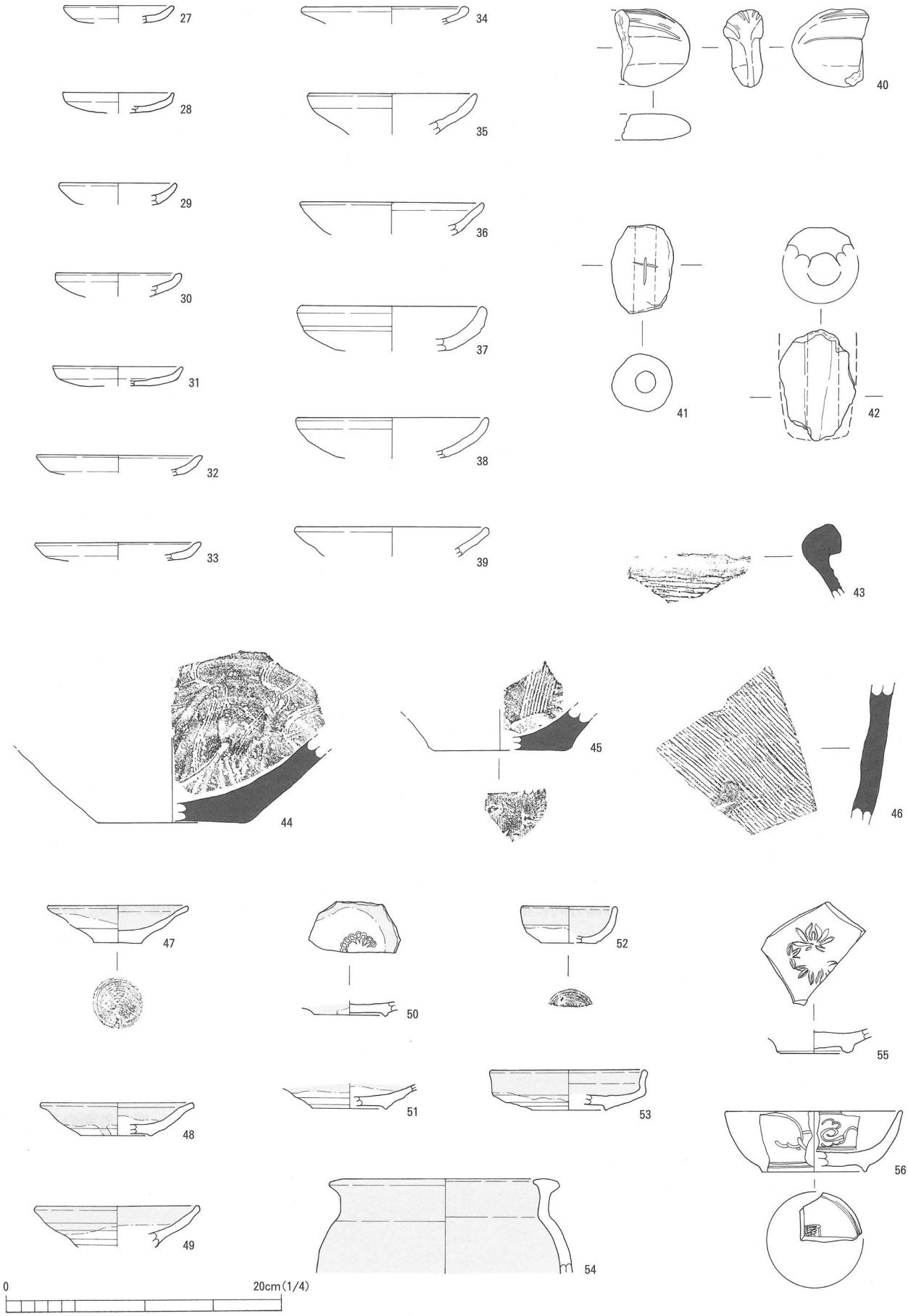
54は甕で、頸部が直立し、口端部は肥厚して内外につまみ出している。鉄釉は、47、49、52、53、54に施され、灰釉は48、50である。

その他陶磁器類　55は青磁の底部で、高台削り出しによるものである。底部内面には彫りによる花文様が施され、釉は厚く灰オリーブ色、胎土は灰白色である。

56は伊万里の碗で、体部は内湾して立ち上がる。底部の器厚は厚く、高台は細く短く付く。



第22図　谷部出土遺物実測図・土師器（1/4）



第23図　谷部出土遺物実測図・土師器・その他（1/4）

ⅳ．石器（第24図）

谷部より多くの石器が出土した。打製石斧・磨製石斧・砥石・凹石・石錘が出土している。

打製石斧　1～7は打製石斧である。1は側面ともう一面の下端部に打撃を加え、下端に刃部を作っているが鋭さはない。2は片面のみ大きな打撃により、刃部を作り出している。1、2は比較的厚く、側縁の片側にくびれをもつ。

3、6、7は撥形に分類した。3は、側縁と刃縁のみ打ち欠いて刃部をつくり、やや偏平な形となる。6は、側縁のみ打撃痕がみらる。刃縁が弧状で使用により打撃痕が著しく磨耗している。装着部は両面ともに加工されている。幅が細く、厚みのあるものである。7は、基部のやや上部に最大の厚みをもち、刃部にむかって先細りしている。

4、5は短冊形に分類し、偏平な打製石斧である。4、5ともに長方形の形を作るが、基部と刃部は薄くなっている。4の刃部は、使用による磨耗が著しい。その他にも、2点打製石斧が出土している。

磨製石斧　8のみ完形品で、9～11は基部を欠いていており刃部のみである。8は定角式磨製石斧で、両側縁および基端も研磨されたもので、断面は隅丸長方形である。刃部は蛤刃である。9～11も蛤刃である。9は断面が楕円形で、側縁との境があいまいである。10は、側縁が丁寧に研磨されており、断面は膨らみをもつ長方形の形となる。11は断面が隅丸長方形で、刃部の幅が狭く、欠損しているが基部に向かってやや膨らんでいる。

その他に、磨製石斧の刃部が2点、基部が1点出土している。

砥石　12、13は砥石である。12は長方形を成し、偏平なものである。13は縦断面が菱形の形をしており、上半分の研磨面は使用が激しく内湾しており、下半分が刃先を擦ったような溝が何本かみられ、上下面で使い分けが行なわれている。両面とも同じような砥面をもつ。その他にも2点の砥石が出土している。

凹石　14は、凹石とした。両面に凹部をもつもので、一面は2ヶ所、裏面は1ヶ所にみられる。

石錘　15は、礫を打ち欠いただけの礫石錘である。半分を欠いている。礫石錘は縄文時代全般を通じて存在するものである。

ⅴ．木製品(第25図)

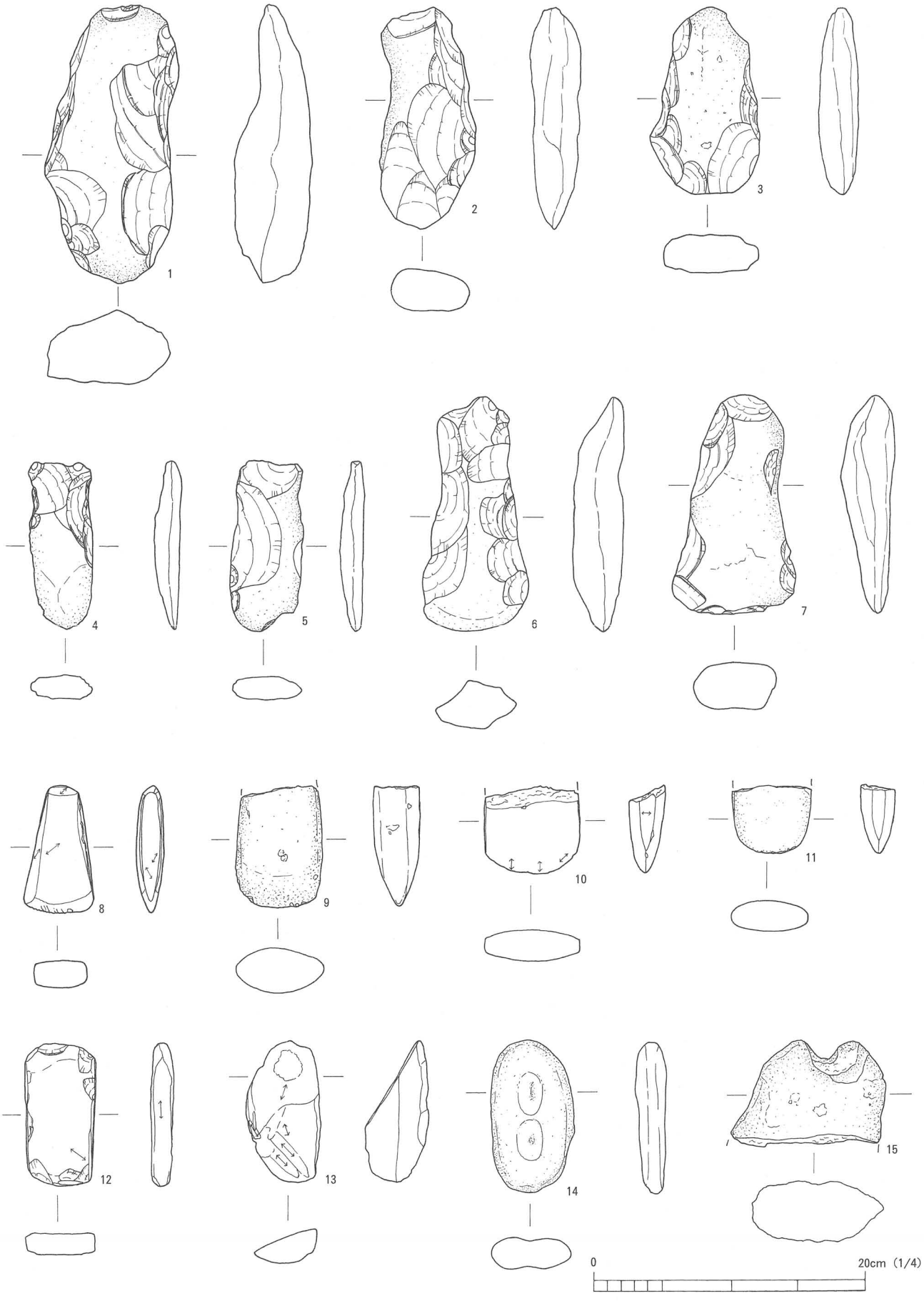
木製品は、杭、板材、曲物、椀が出土している。

1～3の杭は、谷の落ち際に打ち込まれていたもので、6本出土している。地山にはわずか10cm程度しか打ち込まれておらず、杭としての利用を想定するならば、かなり上層より打ち込まれたものと考えられる。1列60～70cm間隔の2列配列になっている。杭は全面もしくは部分的に削り、下端を尖らせている。加工部分は20～30cmである。いずれの杭も上部は欠損しており、残存長で50～91cmを測る。

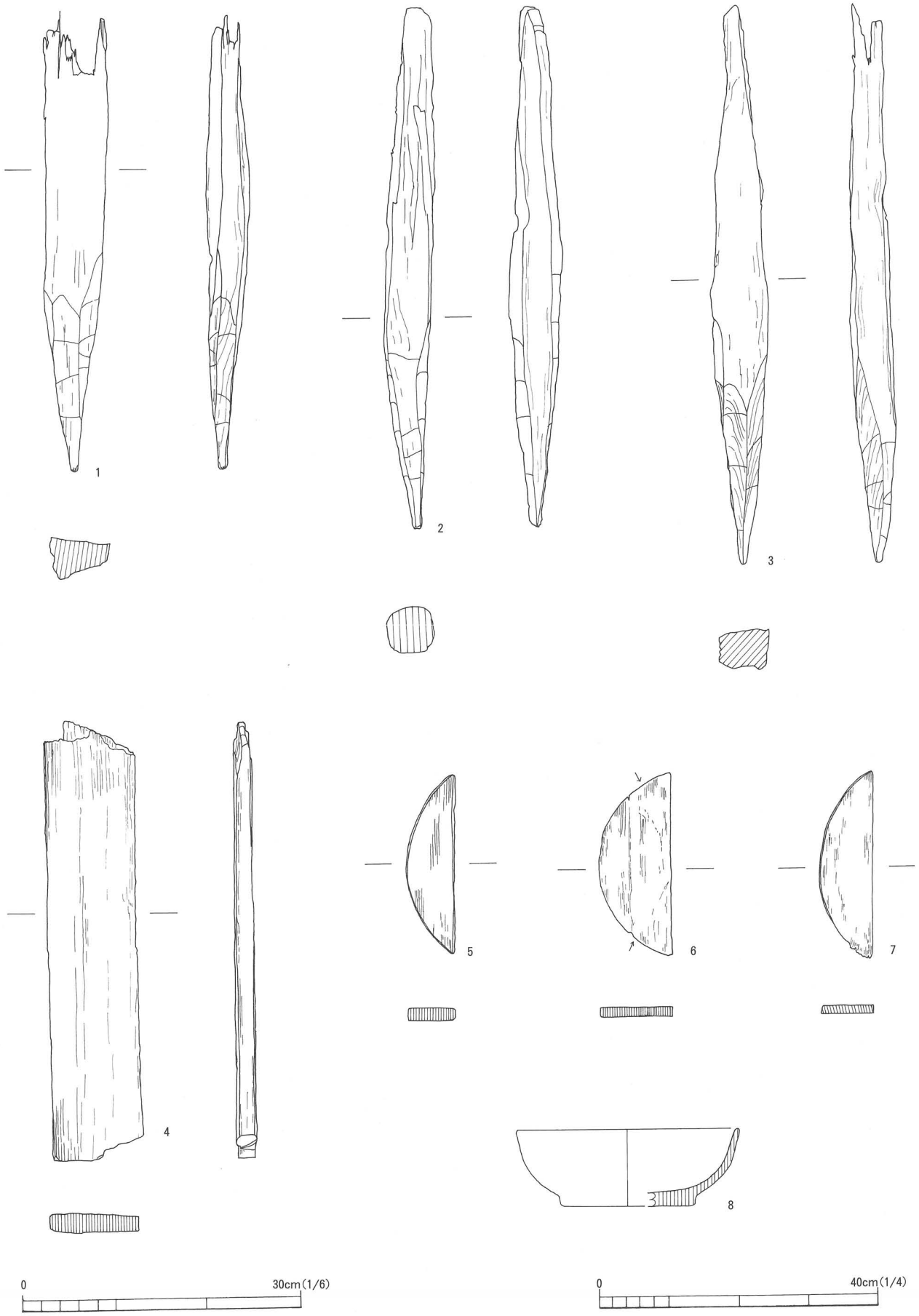
4の板材は、上下とも一部欠損しているが、加工痕がみられる。上端部は斜めに削り仕上げている。長さ48.1cm、幅9.6cm、厚さ2.2cmを測る。

5～7は、曲物の底板で復元径13.6～18.6cmを測る。6は2箇所に目釘痕がみられ、底板と側板との結合には目釘が使用されたものである。

8は、椀である。体部は薄く、小さい台部を作り出しているものである。内外面黒漆がみられ、底部外面のみ漆が施されていない。この形は12世紀中頃から出現するタイプの椀である。　（中村）



第24図　谷部出土遺物実測図・石器（1/4）



第25図　谷部出土遺物実測図・木製品（1～4＝1/6、5～8＝1/4）

表３　遺構観察表

挿図	遺構番号	出土区	規模：長	規模：短	規模：深	出土遺物	備　　考
第８図	SB01―Ｐ18	Ｘ８　Ｙ４	φ0.25		0.18		
第８図	―P19	Ｘ８　Ｙ４	φ0.30		0.14	土師器・須恵器	第15図
第８図	―P23	Ｘ８　Ｙ４	φ0.25		0.08	須恵器	
第８図	―P32	Ｘ８　Ｙ４	φ0.27		0.30		
第８図	―P38	Ｘ８　Ｙ４	φ0.33		0.23		
第８図	―P40	Ｘ７　Ｙ４	φ0.33		0.24		トレンチ内
第８図	―P45	Ｘ７　Ｙ４	φ0.34		0.11		
第８図	SB02―P30	Ｘ８　Ｙ４	φ0.30		0.22		
第８図	―P31	Ｘ８　Ｙ４	φ0.34		0.30		
第８図	―P36	Ｘ８　Ｙ４	φ0.24		0.20		
第８図	―P41	Ｘ７　Ｙ４	φ0.26		0.24		トレンチ内
第８図	―P44	Ｘ７　Ｙ４	φ0.36		0.38		
第８図	―P51	Ｘ７　Ｙ４	φ0.37		0.35	土師器	第15図
第８図	SB03―P39	Ｘ７　Ｙ４	φ0.27		0.10		
第８図	―P43	Ｘ７　Ｙ４	φ0.34		0.12		トレンチ内
第８図	―P48	Ｘ７　Ｙ４	φ0.24		0.06		
第８図	―P49	Ｘ７　Ｙ４	φ0.26		0.20		
第８図	―P52	Ｘ７　Ｙ４	φ0.36		0.24	土師器	
第８図	―P53	Ｘ７　Ｙ４	φ0.30		0.09		
第８図	―P54	Ｘ７　Ｙ４	φ0.29		0.10		
第９図	SA01―P66	Ｘ７　Ｙ４	φ0.25		0.10		
第９図	―P61	Ｘ７　Ｙ４	φ0.28		0.10		
第９図	―P58	Ｘ７　Ｙ４	φ0.27		0.15		
第９図	―P56	Ｘ７　Ｙ４	φ0.23		0.21		
第９図	SA02―P110	Ｘ６　Ｙ４	φ0.26		0.20		
第９図	―P113	Ｘ６　Ｙ４	φ0.24		0.16		
第９図	―P114	Ｘ６　Ｙ４	φ0.20		0.20		
―	SD01	Ｘ８　Ｙ４	2.75	0.60	0.10	陶磁器類	
―	SD02	Ｘ８　Ｙ４	3.98	0.35	0.13		
第９図	SD03	Ｘ８　Ｙ４～５	5.70	0.40	0.15	土師器・須恵器	
第９図	SD04	Ｘ７　Ｙ４	5.70	0.35	0.06		
第９図	SD05	Ｘ６　Ｙ４	7.60	0.27	0.05		
―	SD06	Ｘ６～４ Ｙ３～４	8.50	0.52	0.18	土師器・越中瀬戸	
第10図	SD07	Ｘ８～５ Ｙ２～５	28.60	0.33	0.08	土師器・須恵器	第15図
第10図	SD08	Ｘ７　Ｙ２	3.40	0.50	0.10		
第10図	SD09	Ｘ７　Ｙ２～３	4.80	0.97	0.07	土師器・須恵器	
第10図	SD10	Ｘ６　Ｙ２～３	5.10	0.40	0.05	土師器	
第10図	SD11	Ｘ６　Ｙ２	3.34	0.60	0.22	土師器・須恵器	第15図

挿図	遺構番号	出土区	規模：長	規模：短	規模：深	出土遺物	備　考
—	SK01	X8　Y4	φ0.78		0.20		
—	SK02	X7　Y4	φ0.54		0.25		トレンチ内
第11図	SK03	X7　Y4	2.22	0.80	0.52		
第11図	SE04	X7　Y4	φ0.45		0.55	須恵器	第15図
第11図	SE05	X7　Y4	φ0.75		0.64		
第11図	SK06	X7　Y4	φ1.14		0.25	土師器・須恵器	
第11図	SE07	X7　Y4	φ0.70		0.63	須恵器	第15図
第11図	SK08	X6　Y3	2.72	1.22	0.45		
第11図	SK09	X6　Y4	1.05	0.60	0.67	須恵器	第15図
—	SK10	X8　Y3	1.85	1.05	0.20	須恵器	
第12図	SK11	X9　Y3	2.63	1.17	0.35		
第12図	SK12	X9　Y3	0.70	0.43	0.05		
第12図	SK13	X9　Y3	0.81	0.61	0.11		
第12図	SK14	X9　Y3	0.70	0.33	0.06		
第12図	SK15	X8　Y3	0.57	0.40	0.09		
第12図	SK16	X8　Y3	0.58	0.50	0.10		
第12図	SK17	X8　Y3	1.42	0.65	0.15	土師器・須恵器	
第12図	SK18	X8　Y2	0.95	0.39	0.04		
第12図	SK19	X8　Y2	1.05	0.52	0.11	須恵器	
—	SK20	X8　Y2	1.20	0.50	0.06	土師器・須恵器	
—	SK21	X8　Y2	1.00	0.40	0.11	須恵器	
—	SK22	X8　Y2	0.85	0.34	0.07		
第12図	SK23	X8　Y2	0.85	0.25	0.04	土師器	
第12図	SK24	X8　Y2	φ0.18		0.03		
第12図	SK25	X8　Y3	φ0.24		0.03	土師器・須恵器	
第12図	SK26	X8　Y3	0.75	0.31	0.07		
第12図	SK27	X8　Y3	φ0.26		0.03		
第12図	SK28	X8　Y3	0.35	0.22	0.03		
第12図	SK29	X8　Y3	φ0.31		0.06		
第12図	SK30	X8　Y3	0.61	0.45	0.13		
第12図	SK31	X8　Y3	0.72	0.35	0.05		
第12図	SK32	X8　Y3	1.90	0.75	0.13	須恵器	
第10図	SK33	X8～7　Y2	2.91	1.10	0.28		
第10図	SK34	X7　Y2	2.12	1.08	0.35		
—	SK35	X6　Y2	φ0.58		0.11		
第13図	SK36	X6　Y2	φ1.16		0.70		第15図
第10図	SK37	X6　Y3	φ1.49		0.30		第15図
—	SK38	X6　Y3	φ0.21		0.05		
—	SK39	X6　Y3	φ0.54		0.08		

挿図	遺構番号	出土区	規模：長	規模：短	規模：深	出土遺物	備　考
—	SK40	X 5　Y 3	φ0.70		0.22		
—	SK41	X 5　Y 3	φ0.70		0.15		
第13図	SK42	X 5　Y 3	0.80	0.45	0.25	土師器・須恵器・石器	第15図
—	SK43	X 4　Y 3	0.87	0.46	0.12		
第13図	SE44	X 4　Y 3	φ0.79		0.70		
第13図	SK45	X 3　Y 3	2.80	1.93	0.30		
第13図	SK46	X 7　Y 2	φ1.45		0.17		
第13図	SK47	X 7　Y 2	φ1.03		0.27	土師器・須恵器	第15図
第13図	SK48	X 7　Y 2	1.45	1.00	0.27		
—	SK49	X 4　Y 1	φ0.85		0.36		
—	SK50	X 4　Y 1	1.56	0.67	0.44	土師器・須恵器・石器	第15図
—	SK51	X 4　Y 1	1.00	0.55	0.27	縄文土器	
—	SK52	X 4　Y 1	φ0.65		0.13	土師器・須恵器	第15図
—	SK53	X 3　Y 1	φ0.44		0.16		
—	SK54	X 2　Y 2	φ1.13		0.21		
—	SP01	X 9　Y 5	φ0.28		0.12		
—	SP02	X 9　Y 4	φ0.23		0.10		
—	SP03	X 8　Y 4	φ0.30		0.11		
—	SP04	X 8　Y 5	φ0.19		0.13		
—	SP05	X 8　Y 4	φ0.26		0.13		
—	SP06	X 8　Y 4	φ0.58		0.13		
—	SP07	X 8　Y 4	φ0.21		0.12		
—	SP08	X 8　Y 4	φ0.24		0.11		
—	SP09	X 8　Y 4	φ0.35		0.17		
—	SP10	X 8　Y 4	φ0.13		0.11		
—	SP11	X 8　Y 4	φ0.13		0.14		
—	SP12	X 8　Y 4	φ0.19		0.11		
—	SP13	X 8　Y 4	φ0.22		0.37		
—	SP14	X 8　Y 4	φ0.20		0.19		
—	SP15	X 8　Y 4	φ0.24		0.11		
—	SP16	X 8　Y 4	φ0.24		0.15		
—	SP17	X 8　Y 4	φ0.30		0.10		
—	SP20	X 8　Y 4	φ0.28		0.36	須恵器	
—	SP21	X 8　Y 4	φ0.35		0.14		
—	SP22	X 8　Y 4	φ0.28		0.14		
—	SP24	X 8　Y 5	φ0.18		0.06		
—	SP25	X 8　Y 4	φ0.17		0.06		
—	SP26	X 8　Y 4	φ0.20		0.41		
—	SP27	X 8　Y 4	φ0.29		0.18		

挿図	遺構番号	出土区	規模：長	規模：短	規模：深	出土遺物	備　考
—	SP28	X 7　Y 5	φ0.25		0.21		
—	SP29	X 7　Y 5	φ0.25		0.26		
第14図	SP33	X 8　Y 4	φ0.32		0.10	土師器	
—	SP34	X 8　Y 4	φ0.28		0.13		
第14図	SP35	X 8　Y 4	φ0.30		0.33	土師器	
—	SP37	X 8　Y 4	φ0.22		0.22		
—	SP42	X 7　Y 4	φ0.27		0.11		
—	SP46	X 7　Y 4	φ0.27		0.18		
—	SP47	X 7　Y 4	φ0.25		0.14		
—	SP50	X 7　Y 4	φ0.17		0.15		トレンチ内
—	SP55	X 7　Y 4	φ0.19		0.11		
—	SP57	X 7　Y 4	φ0.22		0.21		
—	SP59	X 7　Y 4	φ0.15		0.85		
—	SP60	X 7　Y 4	φ0.24		0.14		
第14図	SP62	X 7　Y 4	φ0.33		0.46	土師器	第15図
—	SP63	X 7　Y 4	φ0.17		0.15		
第14図	SP64	X 7　Y 4	φ0.30		0.32	須恵器	
	SP65	X 7　Y 4	φ0.22		0.29		
—	SP67	X 7　Y 4	φ0.21		0.21		
—	SP68	X 7　Y 3	φ0.20		0.25		攪乱
—	SP69	X 7　Y 4	φ0.17		0.11		
—	SP70	X 7　Y 4	φ0.25		0.10		
—	SP71	X 7　Y 4	φ0.18		0.12		
—	SP72	X 7　Y 4	φ0.27		0.12		
—	SP73	X 7　Y 4	φ0.23		0.11		
—	SP74	X 7　Y 4	φ0.29		0.32		
—	SP75	X 7　Y 4	φ0.38		0.19		
第14図	SP76	X 7　Y 4	φ0.29		0.18	土師器	
—	SP77	X 7　Y 3	φ0.19		0.11		
—	SP78	X 7　Y 3	φ0.19		0.10		
—	SP79	X 7　Y 3	φ0.30		0.20		
—	SP80	X 7　Y 3	φ0.31		0.25		
第14図	SP81	X 7　Y 4	φ0.28		0.35	須恵器	
—	SP82	X 7　Y 4	φ0.25		0.14		
—	SP83	X 7　Y 4	φ0.28		0.11		
—	SP84	X 7　Y 4	φ0.27		0.20		
—	SP85	X 7　Y 3	φ0.20		0.12		
—	SP86	X 7　Y 3	φ0.24		0.24		

挿図	遺構番号	出土区	規模：長	規模：短	規模：深	出土遺物	備　　考
—	SP87	X 7　Y 3	φ0.30		0.18		
—	SP88	X 7　Y 3	φ0.20		0.09		
—	SP89	X 7　Y 3	φ0.29		0.24		
—	SP90	X 7　Y 3	φ0.24		0.11		
第14図	SP91	X 6　Y 3	φ0.26		0.35	縄文土器	
—	SP92	X 6　Y 3	φ0.21		0.15		
—	SP93	X 6　Y 3	φ0.26		0.12		
第14図	SP94	X 6　Y 4	φ0.25		0.60	土師器	
—	SP95	X 6　Y 4	φ0.13		0.11		攪乱
—	SP96	X 6　Y 4	φ0.17		0.16		
—	SP97	X 6　Y 4	φ0.25		0.18		
—	SP98	X 6　Y 4	φ0.25		0.24		
—	SP99	X 6　Y 4	φ0.36		0.25		
第14図	SP100	X 7　Y 4	φ0.53		0.16	土師器	第15図
—	SP101	X 6　Y 4	φ0.18		0.19		
—	SP102	X 6　Y 4	φ0.26		0.25		
—	SP103	X 6　Y 4	φ0.29		0.10		
—	SP104	X 6　Y 4	φ0.16		0.10		
—	SP105	X 6　Y 4	φ0.11		0.11		
—	SP106	X 6　Y 4	φ0.24		0.22		
—	SP107	X 6　Y 4	φ0.20		0.12		
第14図	SP108	X 6　Y 4	φ0.20		0.13		
—	SP109	X 6　Y 4	φ0.22		0.10		
—	SP111	X 6　Y 4	φ0.25		0.19		
—	SP112	X 6　Y 4	φ0.17		0.13		
—	SP115	X 6　Y 4	φ0.20		0.13		
—	SP116	X 9　Y 3	φ0.33		0.11		
—	SP117	X 8　Y 2	φ0.21		0.16		
—	SP118	X 6　Y 3	φ0.34		0.25		
—	SP119	X 6　Y 3	φ0.26		0.10		
—	SP120	X 6　Y 3	φ0.50		0.53		攪乱
—	SP121	X 5　Y 3	φ0.25		0.16		
—	SP122	X 3　Y 1	φ0.22		0.10		
—	SX01	X 3　Y 1	3.06	2.00	0.08		
—	SX02	X 3　Y 1	3.64	2.10	0.30	土師器	
—	SX03	X 3　Y 1	4.47	4.12	0.37		
—	SX04	X 4　Y 1	5.34	3.44	0.25		
—	SX05	X 4　Y 1	2.15	2.00	0.29		

表４　遺物観察表

試掘調査遺物

図　版	No.	遺構番号	種　類	器　種	口　径 (cm)	器　高 (cm)	底　径 (cm)	色　調	残存率	備　　考
第４図	1	７トレンチ	縄文土器	－	－	－	－	5Y5/1 灰色	－	
第４図	2	７トレンチ	縄文土器	－	－	－	－	2.5Y7/1 灰白色	－	
第４図	3	７トレンチ	土師器	埦	－	－	5.40	2.5Y5/2 暗灰黄色	底部完形	
第４図	4	７トレンチ	内黒土器	埦	15.0	－	－	2.5Y6／3 にぶい黄色	1/8	内面黒色
第４図	5	７トレンチ	須恵器	杯Ａ	12.0	3.70	－	10GY5/1 緑灰色	4/5	
第４図	6	７トレンチ	須恵器	杯Ａ	12.9	3.80	9.75	N7/0 灰白色	3/4	
第４図	7	７トレンチ	須恵器	杯Ａ	12.7	3.75	6.45	10YR6/2 灰黄褐色	3/4	
第４図	8	７トレンチ	須恵器	杯Ｂ	11.0	4.40	6.50	5B6/1 青灰色	完形	
第４図	9	７トレンチ	須恵器	杯Ｂ	12.7	4.20	8.00	N6/0 灰色	1/2	
第４図	10	７トレンチ	須恵器	杯Ｂ	13.0	3.75	8.80	N6/0 灰色	1/2	
第４図	11	７トレンチ	須恵器	杯Ｂ	16.0	4.20	11.70	2.5Y7/2 灰黄色	2/3	
第４図	12	７トレンチ	須恵器	揺鉢	12.9	13.30	10.00	5G6/1 緑灰色	3/4	
第４図	13	６トレンチ	須恵器	杯Ｂ	16.2	4.75	13.20	N6/0 灰色	1/4	

遺構内遺物

図　版	No.	遺構番号	種　類	器　種	口　径 (cm)	器　高 (cm)	底　径 (cm)	色　調	残存率	備　　考
第15図	1	SD03	須恵器	杯B	－	－	9.60	2.5Y7/2 灰黄色	1/6	
第15図	2	SD03	須恵器	杯	10.2	－	－	N6/0 灰色	1/9	
第15図	3	SD07	須恵器	杯B	10.0	3.80	6.80	5PB7/1 明青灰色	ほぼ完形	転用硯
第15図	4	SD07	須恵器	杯	11.6	－	－	5Y7/1 灰白色		
第15図	5	SD11	須恵器	杯Ａ	11.8	2.65	8.30	N6/0 灰色	1/10	
第15図	6	SD11	須恵器	杯Ａ	13.3	3.05	－	N7/0 灰白色	1/6	ヘラ記号有り
第15図	7	SD11	須恵器	杯Ｂ	13.1	4.75	9.85	10YR7/4 にぶい黄橙色	2/3	
第15図	8	SK04	須恵器	瓶類	－	－	11.10	10GB5/1 青灰色	底部完形	
第15図	9	SK07	須恵器	杯Ｂ	－	－	9.40	10GY5/1 緑灰色		
第15図	10	SK09	金属製品	分胴	長さ3.1	幅1.6	－		完形	重量51ｇ
第15図	11	SK36	須恵器	杯Ａ	13.7	3.65	10.90	N6/0 灰色	1/4	
第15図	12	SK36	須恵器	杯Ａ	－	－	9.10	2.5Y7/2 灰黄色		
第15図	13	SK37	須恵器	長頸瓶	－	－	－	7.5Y7/1 灰白色		
第15図	14	SK42	縄文土器		－	－	－	2.5Y7/2 灰黄色		
第15図	15	SK42	縄文土器		－	－	－	10YR6/2 灰黄褐色		
第15図	16	SK42	石器	磨製石斧	長さ3.05	幅2.8	厚0.6		刃部	重量12g　チャート
第15図	17	SK47	縄文土器		－	－	－	10YR5/2 灰黄褐色		
第15図	18	SK47	須恵器	杯Ａ	13.7	2.95	10.20	10Y6/1 灰色	1/10	
第15図	19	SK47	須恵器	甕	－	－	－	5B5/1 青灰色		
第15図	20	SK50	石器	磨製石斧	－	幅5.80	厚1.65			重量113ｇ　砂岩
第15図	21	SK52	縄文土器		－	－	－	10YR4/2 灰黄褐色		
第15図	22	SP19	須恵器	杯Ｂ	－	－	8.80	5GY6/1 オリーブ灰色		
第15図	23	SP51	土師器	甕	14.7	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙色		
第15図	24	SP62	土師器	甕	11.4	－	－	5YR6/4 にぶい橙色		
第15図	25	SP64	須恵器	杯蓋	12.3	－	－	5B5/1 青灰色	1/6	
第15図	26	SP100	須恵器	杯Ａ	13.5	3.25	9.20	2.5Y8/1 灰白色	1/9	

遺構内遺物

図　版	No.	出土地点	種　類	器　種	口　径 (cm)	器　高 (cm)	底　径 (cm)	色　調	残存率	備　　考
16	1	X7Y2	縄文土器	深鉢	—	—	—	2.5Y6/2 灰黄色		
16	2	X5Y3	縄文土器		—	—	—	10YR7/2 にぶい黄橙色		
16	3	X5Y3	縄文土器	深鉢	—	—	—	2.5Y6/2 灰黄色		
16	4	X5Y2	縄文土器	深鉢	—	—	—	2.5Y7/2 灰黄色		
16	5	X5Y3	縄文土器	浅鉢	31.40	—	—	2.5Y7/1 灰白色		
16	6	X5Y3	縄文土器	深鉢	—	—	—	2.5Y7/2 灰黄色		
16	7	X5Y3	縄文土器		25.40	8.70	—	10YR6/2 灰黄褐色		
16	8	X5Y3	縄文土器	深鉢	—	—	—	2.5Y8/2 灰白色		
16	9	X7Y2	縄文土器	深鉢	—	—	—	2.5Y6/1 黄灰色		
16	10	X7Y2	縄文土器		—	—	—	2.5Y5/2 暗灰黄色		
16	11	X5Y3	縄文土器		—	—	—	2.5Y7/2 灰黄色		
16	12	X7Y2	縄文土器		16.50	—	—	2.5Y4/1 黄灰色		
16	13	X5Y2	縄文土器		22.60	—	—	10YR6/2 灰黄褐色		
16	14	X5Y3	縄文土器		25.80	—	—	2.5Y6/2 灰黄色		
16	15	X5Y2	縄文土器		23.40	—	—	2.5Y6/3 にぶい黄色		
16	16	X6Y2	縄文土器	深鉢	—	—	—	2.5Y7/2 灰黄色		
16	17	X5Y3	縄文土器	深鉢	—	—	—	2.5Y6/1 黄灰色		
16	18	X6Y2	縄文土器	深鉢	—	—	—	10YR8/3 浅黄橙色		
16	19	X7Y2	縄文土器		37.40	—	—	7.5YR5/2 灰褐色		
16	20	X7Y2	縄文土器		—	—	—	10YR4/1 褐灰色		
16	21	X5Y3	縄文土器	浅鉢	19.90	—	—	2.5Y7/2 灰黄色		
16	22	X5Y3	縄文土器	浅鉢	25.20	—	—	2.5Y5/1 黄灰色		
16	23	X5Y3	縄文土器	浅鉢	—	—	4.10	2.5Y6/2 灰黄色		
16	24	X6Y2	縄文土器	深鉢	—	—	—	2.5YG6/3 にぶい黄色		
16	25	X5Y3	縄文土器		—	—	5.00	2.5Y5/2 暗灰黄色	底部完形	網代痕有り
16	26	X5Y3	縄文土器		—	—	6.80	2.5Y8/2 灰白色		網代痕有り
16	27	X6Y2	縄文土器		—	—	13.80	10YR7/3 にぶい黄橙色		網代痕有り
16	28	X7Y2	縄文土器		—	—	—	2.5Y3/1 黒褐色		
16	29	X5Y2	縄文土器		—	—	—	10YR5/1 褐灰色		
16	30	X5Y3	縄文土器		—	—	—	10YR5/3 にぶい黄褐色		
16	31	X5Y3	縄文土器		—	—	—	5YR5/6 明赤褐色		
16	32	X5Y3	縄文土器		—	—	—	2.5Y5/2 暗灰黄色		
16	33	X5Y3	縄文土器		—	—	—	2.5Y6/2 灰黄色		
16	34	X7Y2	縄文土器		—	—	—	2.5Y4/1 黄灰色		
16	35	X6Y3	縄文土器		—	—	—	2.5Y7/2 灰黄色		
16	36	X5Y1	縄文土器		—	—	—	10YR5/3 にぶい黄褐色		
16	37	X5Y2	縄文土器		—	—	—	2.5Y6/3 にぶい黄色		

須恵器

図　版	No.	出土地点	種　類	器　種	口　径 (cm)	器　高 (cm)	底　径 (cm)	色　調	残存率	備　　考
第18図	1	X7Y2	須恵器	杯蓋	11.90	2.85	—	10YR6/4 にぶい黄橙色	4/5	
第18図	2	X5Y1	須恵器	杯蓋	12.50	3.45	—	5Y5/1 灰色	1/2	
第18図	3	X4Y2	須恵器	杯蓋	11.60	2.80	—	N5/0 灰色	1/3	
第18図	4	X6Y2	須恵器	杯蓋	14.65	3.40	—	5G5/1 緑灰色	2/3	
第18図	5	X4Y2	須恵器	杯蓋	16.30	3.15	—	2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形	
第18図	6	X6Y2	須恵器	杯蓋	13.30	—	—	5PB5/1 青灰色	1/2	
第18図	7	X5Y2	須恵器	杯蓋	13.80	—	—	5B6/1 青灰色	1/4	
第18図	8	X2Y3	須恵器	杯蓋	14.40	2.90	—	N6/0 灰色	2/3	
第18図	9	X5Y2	須恵器	杯蓋	13.80	2.05	—	N6/0 灰色	1/8	
第18図	10	X3Y2	須恵器	杯蓋	14.80	2.80	—	N6/1 灰色	1/5	転用硯（墨痕有り）
第18図	11	X3Y3	須恵器	杯蓋	15.60	2.90	—	2.5GY6/1 オリーブ灰色	完形	
第18図	12	X4Y2	須恵器	杯蓋	15.00	—	—	10GY5/1 緑灰色	1/3	転用硯（墨痕有り）
第18図	13	X6Y2	須恵器	杯蓋	15.55	2.80	—	2.5YR6/1 黄灰色	3/4	
第18図	14	X4Y2	須恵器	杯蓋	15.30	2.20	—	N6/0 灰色	2/3	
第18図	15	X3Y2	須恵器	杯蓋	16.60	3.30	—	5Y7/1 灰白色	1/2	ヘラ記号有り
第18図	16	X4Y2	須恵器	杯B	9.10	4.50	6.05	2.5Y5/1 黄灰色	9/10	
第18図	17	X6Y2	須恵器	杯B	10.05	4.05	6.70	2.5Y5/1 黄灰色	2/3	
第18図	18	X4Y2	須恵器	杯B	10.00	3.40	6.00	N5/0 灰色	1/2	1条の沈線有り
第18図	19	X7Y2	須恵器	杯B	10.30	3.65	6.40	5B5/1 青灰色	1/6	
第18図	20	X5Y1	須恵器	杯B	11.40	3.95	6.40	5BG5/1 青灰色	1/3	
第18図	21	X3Y3	須恵器	杯B	11.00	4.25	7.50	N5/0 灰色	1/3	
第18図	22	X5Y1	須恵器	杯B	11.20	4.15	5.90	5B6/1 青灰色	1/2	
第18図	23	X5Y1	須恵器	杯B	11.10	4.35	6.45	N6/0 灰色	1/3	
第18図	24	X5Y1	須恵器	杯B	11.20	4.65	6.85	5Y6/1 灰色	4/5	墨書有り
第18図	25	X6Y2	須恵器	杯B	14.50	6.45	8.20	N6/0 灰色	1/3	墨書有り
第18図	26	X6Y2	須恵器	杯B	14.70	—	—	5B6/1 青灰色	1/8	2条の沈線有り
第18図	27	X7Y2	須恵器	杯B	—	—	8.40	N6/0 灰色	底部1/2	ヘラ記号有り
第18図	28	X6Y2	須恵器	杯B	—	—	9.25	5BG5/1 青灰色	底部1/2	転用硯（墨痕有り）
第19図	29	X6Y2	須恵器	杯B	13.20	3.30	9.70	10YR5/2 灰黄褐色	1/3	
第19図	30	X7Y2	須恵器	杯B	13.45	4.20	8.20	2.5Y5/1 黄灰色	2/3	
第19図	31	X3Y2	須恵器	杯B	13.80	3.90	9.20	10YR8/3 浅黄橙色	1/4	
第19図	32	X5Y2	須恵器	杯B	13.70	4.30	9.40	7.5Y6/1 灰色	1/2	ヘラ記号有り
第19図	33	X6Y2	須恵器	杯B	14.05	3.95	9.10	10G6/1 緑灰色	2/3	
第19図	34	X3Y3	須恵器	杯B	14.50	—	10.20	2.5Y7/2 灰黄色	1/8	
第19図	35	X7Y2	須恵器	杯B	14.90	4.00	11.00	7.5YR4/1 灰褐色	1/3	
第19図	36	X6Y2	須恵器	杯B	14.20	4.55	9.10	2.5Y7/2 灰黄色	2/3	墨書有り
第19図	37	X6Y2	須恵器	杯B	14.80	4.70	11.30	5Y5/1 灰色	1/4	
第19図	38	X3Y3	須恵器	杯B	11.60	3.90	7.90	2.5GY6/1 ｵﾘｰﾌﾞ灰色	1/2	
第19図	39	X3Y2	須恵器	杯B	12.10	3.95	10.50	N6/0 灰色	1/2	漆わずかに付着
第19図	40	X4Y2	須恵器	杯B	—	—	—	2.5GY6/1 ｵﾘｰﾌﾞ灰色		
第19図	41	X6Y2	須恵器	杯A	11.40	3.80	—	5Y6/1 灰色	1/2	
第19図	42	X4Y2	須恵器	杯A	11.50	3.20	—	N6/0 灰色	ほぼ完形	

図　版	No.	出土地点	種　類	器　種	口　径 (cm)	器　高 (cm)	底　径 (cm)	色　調	残存率	備　　考
第19図	43	X4Y2	須恵器	杯A	11.60	3.20	—	7.5GY5/1 緑灰色	2/3	
第19図	44	X5Y2	須恵器	杯A	11.80	3.25	—	N7/0 灰白色	2/3	
第19図	45	X6Y2	須恵器	杯A	11.80	3.60	—	5Y6/1 灰色	ほぼ完形	
第19図	46	X6Y2	須恵器	杯A	11.80	3.80	—	2.5Y7/1 灰白色	1/2	
第19図	47	X3Y2	須恵器	杯A	11.90	3.55	—	2.5GY7/1 明ｵﾘｰﾌﾞ灰色	1/2	
第19図	48	X6Y2	須恵器	杯A	12.00	3.15	—	N6/0 灰色	2/3	
第19図	49	X5Y1	須恵器	杯A	12.00	3.35	—	2.5GY6/1 ｵﾘｰﾌﾞ灰色	2/3	墨書有り
第19図	50	X5Y2	須恵器	杯A	12.20	3.95	—	2.5Y6/3 にぶい黄色	1/5	
第19図	51	X3Y3	須恵器	杯A	12.60	3.20	—	N6/0 灰色	ほぼ完形	ヘラ記号有り
第19図	52	X5Y1	須恵器	杯A	12.00	3.40	—	2.5Y5/2 暗灰黄色	3/4	墨書有り
第20図	53	X3Y3	須恵器	杯A	12.10	3.00	—	N6/0 灰色	2/3	
第20図	54	X7Y2	須恵器	杯A	12.60	3.45	—	5Y5/1 灰色	1/2	
第20図	55	X6Y2	須恵器	杯A	12.75	4.10	—	N7/0 灰白色	1/2	
第20図	56	X3Y2	須恵器	杯A	13.00	3.00	—	2.5GY6/1 ｵﾘｰﾌﾞ灰色	1/2	
第20図	57	X6Y2	須恵器	杯A	13.00	3.75	—	5Y6/1 灰色	ほぼ完形	
第20図	58	X6Y2	須恵器	杯A	13.10	3.30	—	2.5Y7/1 灰白色	2/3	
第20図	59	X7Y2	須恵器	杯A	13.20	3.00	—	10Y7/1 灰白色	1/2	
第20図	60	X3Y3	須恵器	杯A	13.40	3.45	—	2.5Y8/2 灰白色	ほぼ完形	
第20図	61	X6Y2	須恵器	杯A	13.40	3.45	—	2.5Y7/2 灰黄色	1/3	
第20図	62	X7Y2	須恵器	杯A	13.50	3.65	—	10YR7/2 にぶい黄橙色	1/4	
第20図	63	X6Y2	須恵器	杯A	13.50	4.05	—	5Y6/1 灰色	ほぼ完形	
第20図	64	X6Y2	須恵器	杯A	13.60	2.90	—	2.5Y6/2 灰黄色	2/3	
第20図	65	X6Y2	須恵器	杯A	12.40	3.15	—	5Y7/2 灰白色	1/2	
第20図	66	X6Y2	須恵器	杯A	13.00	3.20	—	2.5Y7/2 灰黄色	1/6	
第20図	67	X6Y2	須恵器	杯A	13.05	3.75	—	5Y5/1 灰色	2/3	
第20図	68	X6Y2	須恵器	杯A	13.55	3.10	—	10YR5/1 褐灰色	1/2	
第20図	69	X6Y2	須恵器	杯A	13.50	3.15	—	N6/0 灰色	1/2	
第20図	70	X3Y2	須恵器	杯A	14.00	3.60	—	2.5Y6/1 黄灰色	1/4	
第20図	71	X7Y2	須恵器	短頸壷の蓋	11.90	3.00	—	5PB4/1 暗青灰色	1/4	
第20図	72	X5Y4	須恵器	高杯	—	—	—	N6/0 灰色	1/3	
第20図	73	X5Y3	須恵器	把手付鉢	—	—	—	5Y7/1 灰白色		
第20図	74	X5Y1	須恵器	瓶類	12.60	—	—	10BG5/1 青灰色		
第20図	75	X8Y2	須恵器	小型瓶	—	—	—	N7/0 灰白色		
第20図	76	X6Y2	須恵器	長頸瓶	—	—	—	5Y7/1 灰白色		
第20図	77	X3Y2	須恵器	瓶類	—	—	12.00	N7/0 灰白色	胴部1/2	
第20図	78	X5Y3	須恵器	短頸壷	—	—	9.70	N7/0 灰白色		
第21図	79	X6Y2	須恵器	広口瓶	—	—	—	N6/0 灰色	1/3	
第21図	80	X6Y2	須恵器	長頸瓶	—	—	10.60	N6/0 灰色	2/3	
第21図	81	X3Y2	須恵器	甕	19.00	—	—	N6/0 灰色		
第21図	82	X3Y2	須恵器	甕	24.20	—	—	N6/0 灰色		
第21図	83	X5Y3	須恵器	甕	28.30	—	—	5Y7/2 灰白色		
第21図	84	X6Y2	須恵器	壷	18.60	—	—	2.5Y7/3 浅黄色		
第21図	85	X6Y2	須恵器	壷	22.70	—	—	5Y6/1 灰色		
第21図	86	X6Y2	須恵器	壷	25.20	—	—	5Y6/1 灰色		
第21図	87	X6Y2	須恵器	壷	27.80	—	—	10YR6/1 褐灰色		

土師器・その他

図　版	No.	出土地点	種　別	器　種	口　径 (cm)	器　高 (cm)	底　径 (cm)	色　調	残存率	備　　考
第22図	1	X5Y3	土師器	甕	13.60	—	—	2.5Y7/2 灰黄色		
第22図	2	X3Y3	土師器	小甕	11.80	—	—	2.5Y6/2 灰黄色		
第22図	3	X5Y2	土師器	甕	21.00	—	—	2.5Y4/1 黄灰色		
第22図	4	X6Y2	土師器	甕	15.00	—	—	2.5Y6/2 灰黄色		
第22図	5	X3Y2	土師器	甕	21.80	—	—	2.5Y6/2 灰黄色		
第22図	6	X4Y1	土師器	甕	21.40	—	—	2.5Y6/2 灰黄色		
第22図	7	X7Y2	土師器	甕	14.00	—	—	2.5Y7/3 浅黄色		
第22図	8	X5Y1	土師器	甕	—	—	—	2.5Y7/2 灰黄色		
第22図	9	X3Y2	土師器	甑	30.00	—	—	2.5Y7/1 灰白色		
第22図	10	X5Y2	土師器	甑	32.40	—	—	2.5Y6/2 灰黄色		
第22図	11	X5Y2	土師器	小型甕	5.30	—	—	2.5Y6/2 灰黄色	1/10	
第22図	12	X6Y2	土師器	小型甕	11.40	—	—	10YR6/2 灰黄褐色		
第22図	13	X6Y2	土師器	高杯	—	—	8.40	5YR6/6 橙色		
第22図	14	X7Y2	土師器	皿	12.00	2.00	—	2.5Y6/2 灰黄色	1/5	内面黒色
第22図	15	X7Y2	土師器	皿	12.80	1.65	—	2.5Y7/3 浅黄色		内面黒色
第22図	16	X7Y2	土師器	皿	13.60	2.00	—	2.5Y7/3 浅黄色	1/10	内面黒色
第22図	17	X4Y2	土師器	皿	13.80	1.70	—	10YR7/3 にぶい黄橙色	1/4	内面黒色
第22図	18	X5Y2	土師器	椀	11.40	4.20	5.00	2.5Y8/2 灰白色	1/2	
第22図	19	X5Y2	土師器	椀	12.60	—	5.00	2.5Y8/3 淡黄色	1/4	
第22図	20	X6Y2	土師器	椀	13.00	—	—	2.5Y7/3 浅黄色	1/5	
第22図	21	X7Y2	土師器	椀	—	—	6.40	10YR6/3 にぶい黄橙色		
第22図	22	X6Y2	土師器	椀	13.70	6.50	—	2.5Y7/2 灰黄色	1/3	
第22図	23	X5Y3	土師器	椀	17.20	5.10	—	10YR6/3 にぶい黄橙色	2/3	
第22図	24	X6Y2	土師器	椀	—	—	5.00	10YR5/2 灰黄色		
第22図	25	X3Y2	土師器	壷	2.10	—	6.30	2.5Y7/2 灰黄色		
第22図	26	X5Y1	土師器	壷	—	—	7.60	7.5YR5/3 にぶい褐色		
第23図	27	X5Y2	土師器	土師皿	8.00	—	—	2.5Y7/3 浅黄色	1/8	
第23図	28	X4Y3	土師器	土師皿	8.00	—	—	7.5YR6/3 にぶい橙色	1/4	
第23図	29	X7Y2	土師器	土師皿	8.30	—	—	2.5Y7/2 灰黄色		
第23図	30	X3Y3	土師器	土師皿	9.00	—	—	2.5Y8/2 灰白色		
第23図	31	X8Y2	土師器	土師皿	9.40	—	—	10YR7/4 にぶい黄橙色	1/6	
第23図	32	X3Y1	土師器	土師皿	11.80	—	—	10YR8/2 灰白色	1/10	
第23図	33	X3Y1	土師器	土師皿	12.00	—	—	2.5Y6/1 黄灰色		
第23図	34	X5Y2	土師器	土師皿	12.80	—	—	2.5Y6/3 にぶい黄色		
第23図	35	X7Y2	土師器	土師皿	12.40	—	—	5Y5/1 灰色	1/8	
第23図	36	X5Y2	土師器	土師皿	13.20	—	—	2.5Y7/3 浅黄色	1/8	
第23図	37	X5Y3	土師器	土師皿	14.00	—	—	2.5Y8/2 灰白色	1/5	
第23図	38	X3Y1	土師器	土師皿	14.00	—	—	2.5Y6/2 灰黄色	1/8	
第23図	39	X6Y2	土師器	土師皿	14.20	—	—	2.5Y6/2 灰黄色	1/10	
第23図	40	X7Y2	土製品	不明	—	—	—	2.5Y8/2 灰白色	1/2？	
第23図	41	X5Y3	土製品	土錘	長さ 6.3	幅 4.4	—	2.5Y5/1 黄灰色	完形	ヘラ記号有り
第23図	42	X6Y2		羽口	—	—	—			
第23図	43	X5Y3	珠洲焼	大甕	—	—	—	5BG5/1 青灰色		
第23図	44	X7Y3	珠洲焼	擂鉢	—	—	10.60	2.5Y7/3 浅黄色		

図版	No.	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	残存率	備考
第23図	45	X5Y2	珠洲焼	擂鉢	—	—	9.60	5G5/1 緑灰色		
第23図	46	X5Y3	珠洲焼	甕	—	—	—	5BG5/1 青灰色		
第23図	47	X6Y3	越中瀬戸	皿	10.10	2.70	3.50	7.5YR7/3 にぶい橙色	3/4	
第23図	48	X7Y2	越中瀬戸	皿	11.00	2.40	5.20	5Y6/2 灰オリーブ色	1/4	
第23図	49	X7Y3	越中瀬戸	皿	12.00	—	—	7.5YR6/4 にぶい橙色		
第23図	50	X6Y2	越中瀬戸	皿	—	—	5.20	2.5Y7/2 灰黄色		
第23図	51	X6Y2	越中瀬戸	皿	10.00	—	—	7.5YR6/3 にぶい褐色		
第23図	52	X6Y3	越中瀬戸？	小鉢	6.80	2.70	—	10YR7/3 にぶい黄橙色	1/3	
第23図	53	X5Y3	越中瀬戸	向付	11.60	2.95	—	2.5Y6/2 灰黄色	1/8	
第23図	54	X7Y3	越中瀬戸	甕	16.70	—	—	7.5Y2/2 黒褐色		
第23図	55	X8Y2	青磁	碗	—	—	—	5Y7/2 灰白色	底部完形	
第23図	56	X7Y2	伊万里	碗	12.90	4.50	—	N7/0 灰白色	1/10	

石製品

図版	No.	出土地点	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率	備考
第24図	1	X7Y2	打製石斧	泥岩	26.00 20.70	9.00	5.50	1217.0	完形	
第24図	2	X5Y2	打製石斧	濃飛流紋岩	16.30	7.00	3.30	506.0	完形	
第24図	3	X5Y2	打製石斧	濃飛流紋岩	13.50	6.85	2.80	375.0	完形	
第24図	4	X6Y2	打製石斧	安山岩質流紋岩	12.40	4.50	1.90	145.0	完形	
第24図	5	X5Y3	打製石斧	流紋岩	12.60	5.00	1.70	144.0	完形	
第24図	6	X5Y2	打製石斧	砂岩	17.40	6.00	3.55	503.0	完形	
第24図	7	X8Y3	打製石斧	花崗岩	16.15	6.20	3.50	571.0	完形	
第24図	8	X6Y2	磨製石斧	石灰岩	9.40	3.90	2.00	136.0	完形	
第24図	9	X7Y2	磨製石斧	玢岩	7.00	6.40	3.40	290.0	刃部	
第24図	10	X5Y2	磨製石斧	変成岩	6.40	6.90	2.30	148.0	刃部	
第24図	11	X6Y2	磨製石斧	凝灰岩	4.95	5.50	2.20	74.0	刃部	
第24図	12	X5Y3	砥石	泥岩	10.50	1.50	5.00	156.0	完形	
第24図	13	X8Y3	砥石	凝灰岩	10.50	4.60	5.40	222.0	完形	
第24図	14	X2Y2	凹石	砂岩	11.20	6.10	2.20	218.0	完形	
第24図	15	X8Y3	石錘	流紋岩	7.55	9.60	4.30	393.0	1/2	

木製品

図版	No.	出土地点	種別	器種	残存長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	残存率		備考
第24図	1	X7Y2	木製品	杭	52.00	6.60	4.40			
第24図	2	X5Y2	木製品	杭	57.10	4.80	5.10			
第24図	3	X5Y2	木製品	杭	61.40	5.50	4.00			
第24図	4	X6Y2	木製品	板材	48.10	9.60	2.20			
第24図	5	X5Y3	木製品	底板	直径(17.9)	—	0.90	1/3		
第24図	6	X5Y2	木製品	底板	直径(13.6)	—	0.70	1/3		2ヶ所目釘痕有り
第24図	7	X8Y3	木製品	底板	直径(18.6)	—	0.60	1/3		
第24図	8	X6Y2	木製品	椀	口径16.0	器高5.6	底径9.6	1/10		黒漆

Ⅳ. ま と め

前章まで述べてきた要点を整理・要約し、周辺遺跡を考慮しながら、各時代をまとめてみたい。

1．縄文時代

縄文時代の遺構は、検出できなかった。しかし、縄文土器や石器が多数谷部より出土した。土器の器種は、鉢、浅鉢、深鉢があるが、全形を窺える土器は少ない。土器の形態から所属時期は晩期のものと思われ、下野式土器に類例が見られた。石川県下野遺跡を標識とした下野式は、大洞C_2～A式期を包括し北陸の晩期の土器形式である。富山県下では、口唇部を櫛状工具で刻む特徴がみられる。

深鉢は、口縁部に沿って指頭による2条の凹線文があり、口唇部を櫛状工具による短いナデが施され、体部には斜めもしくは横方向の条痕文が施されているものがほとんどである。浅鉢は、無文のものと口縁部に沈線が施されている2種類がある。

これらは、晩期後半の大洞C_2～大洞A式の遺物が出土した針原東遺跡が報告されている（上野章1994）ものと類似するものである。その他に、周辺の縄文晩期の遺跡は、中山中遺跡、南太閤山Ⅰ遺跡がある。

2．奈良・平安時代

奈良・平安時代は、中段面より検出した遺構が考えられる。遺物を伴う遺構は浅く、遺物の流れ込みも考えられるので断定できるものではない。

谷部出土の遺物を見ると、谷を挟んで南側で昭和61・62・平成２・３年に調査された黒河尺目遺跡の報告とわずかに類似したものがみられる。先の調査区で確認された奈良時代の遺物が、この谷に流れ込んだと考えるのが妥当であろう。また、昭和61年度調査区（第3図―１）で、同じ文字が墨書された土器「大」が出土している。さらに、平成12年度に調査が行なわれた、黒河尺目遺跡と隣接する黒河中老田遺跡からは、「黒川」と墨書された杯Aが出土している。その他にも、「□主」と墨書されたもので、一文字目は、「茅」あるいは「第」と読めるが判読できない（三島2001）ものもある。今回の調査でも、「□田ヵ」と墨書されたもので、一文字目は「…」だけが明らかに判るものが出土している。二文字目は、「田」あるいは「主」ともみることができる。これらは、黒河・中老田遺跡で出土した墨書と同じ文字である可能性も否定できない。

須恵器については、先の調査と類似するものが出土している。昭和61年度調査で、杯蓋の端部を下方に引き出す特徴のものを平岡窯跡と小杉流団№16遺跡2号窯跡―Ⅱの間に位置づけているものと、類似するものがある。また、杯蓋でつまみが柱状化し頂部から山傘状に口縁部にのび端部が丸くなるもの、杯Aで底部が平らで体部の外傾度の強いものがある。これらの土器群は石太郎Ｆ窯跡の遺物に類似点を求めることができ、石太郎Ｆ窯跡は8世紀後半とされる（山本・岡本1986）。これらより、奈良時代前半～後半の須恵器と考えられる。

土師器は、高杯、内黒土器、甕類、甑、埦が出土しており、8世紀後半～9世紀とし、平安時代前半と考えられる。

周辺の遺跡では、黒河尺目遺跡の東に位置する、塚越貝坪遺跡、畑総№15遺跡で奈良時代の遺構・遺物が確認されている。畑総№15遺跡からは、古代の炭焼窯が確認されている。射水丘陵では多く見られる製鉄遺構であり、鉄生産時に大量に必要とする木炭を作るための炭焼窯で、これまでの調査例から１基の箱形製鉄炉に対しておよそ３～４基の炭焼窯が必要とされている（原田2000）。また、黒河尺目遺跡からも製鉄関連遺物が出土していることから、この周辺に製鉄炉の存在が推測される。そして、それをとりまく集落跡は製鉄に従事した工人達の集落とも考えられる。

3．中世・近世

中世・近世の遺構は、上段面の遺構とするが、遺構内・包含層の遺物の出土量が少なく、決め手に欠けるものである。平成12年度調査の北側に隣接する調査区は、古代から中世に帰属するもので、その面が調査区の北東部に続いているものと考えられる。また、上段面のSK09下層より近世の分銅が出土しており、あえてこの面を中世～近世とした。

谷部より出土している中世の遺物は出土量が少ないが、土師器の埦、土師皿、珠洲、漆椀がある。12後半～13世紀前半と14世紀頃の二時期のものがあり、前者に主体があると考えられる。中世の遺物は、北側に位置する平成12年度調査地区の遺物と時期幅が似かよっている。

近世の遺物としては、越中瀬戸、伊万里、そしてSK09より出土した分銅がある。この分銅の製作時期は17世紀後半であり、越中瀬戸も17世紀後半のものと考えられる。時代的には合致している。

黒河尺目遺跡は、射水丘陵北端が射水平野に接する、微高地上に位置している。昭和62年度から平成12年度にかけて4度実施された発掘調査によって、奈良時代や中世の遺構・遺物の発見が報告されている。

今回の調査で検出した遺構には、掘立柱建物、柵列、溝、井戸、土坑、柱穴状ピットがある。そして、調査区に3面の平坦面を持つ、北東から南西へと標高を下げる段丘状から、調査区の半分を占める谷へと落ち込む地形が確認された。現況ですでに1段の段丘は明らかであった。遺構が多く検出できた上段面は、果樹園・畑等によって削平・攪乱を受けており、包含層は薄く、遺構検出面が表土下で確認した。中段面の遺構は、深度が浅いものが多く、遺構内より出土した遺物は流れ込みのものとも考えられる。下段面は、谷底であり、遺構がわずかに検出できた。いずれの面においても、遺構より出土している遺物が少なく、遺構の年代を判断するには、資料が乏しい。

出土した遺物は、谷の覆土からのものが全体の9割を占めるものであった。この谷は、射水丘陵が小河川によって開析された地形であるといえるが、この谷部の堆積は河川の堆積様相とは違い、河川の機能はなかったと考えられる。また、中段面が生活面としていた時期には、谷が埋まっており緩やかに西側に低くなる地形となっていたと思われる。谷部の堆積時期を出土した遺物より推測すると、下層は縄文土器や須恵器・土師器が見られ奈良・平安時代に堆積し、これより上層は、縄文土器も出土しているが、須恵器・中世土師器があり古代から中世への転換期に中段面までほぼ堆積したと考えられる。さらに、中段面とほぼ埋まってしまった谷部の上面に20cmほど土層が堆積し、中世から近世に徐々に平坦面を作った。

今回の調査区の周辺には多くの遺跡が密集しており、隣接する遺跡そして丘陵の台地上に位置する遺跡から流れ込み、この谷部に堆積したと考えられる。この谷は、黒河尺目遺跡を二分する形となり、谷より南側は昭和61・62年、平成2・3年に調査が行なわれており、北側は平成12年に調査が行なわれた。平成12年の調査報告は概要までにとどまる報告であるが、奈良・平安時代、中世の集落跡・遺物が確認されている。両側の集落地は、似かよった時期ではあるが、若干の時代幅がずれるかと思われる。今後の結果報告によって、黒河尺目遺跡がさらに解明されることを期待する。

丘陵と平野の接する山麓地帯は、人々が居住するには好適であるため古くから開発され集落が発達しているところである。このような立地条件から、黒河尺目遺跡も縄文時代から近世まで、連綿と人々が生活を営んできた地域であるといえるだろう。（中村）

参考・引用文献

安念幹倫・関清　1987『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要（６）』　富山県教育委員会

池野正男　1987「射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡」『大境』第11号　富山考古学会

稲垣尚美　1999『HS―04遺跡発掘調査報告』　小杉町教育委員会

上野章・原田義範　1992『小杉町黒河尺目遺跡発掘調査概要』　小杉町教育委員会

上野章・原田義範　1992『小杉町戸破若宮遺跡発掘調査概要』　小杉町教育委員会

上野章・原田義範・稲垣尚美・桐谷優　1994『小杉町針原東遺跡発掘調査報告書』　小杉町教育委員会

岸本雅敏・関清　1987『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要（５）』　富山県教育委員会

久々忠義　1997『小杉町史通史編』　小杉町役場

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2001「埋蔵文化財調査概要―平成12年度―」

富山県教育委員会　1977「Ⅳ　県道七美・太閤山・高岡線」『昭和51年度富山県遺跡分布調査報告書』

富山市教育委員会　1987『長岡杉林遺跡―富山県富山市長岡杉林遺跡発掘調査報告書―』

野々市町教育委員会　1981『野々市町御経塚遺跡』

原田義範　2000『塚越貝坪遺跡、畑総№15遺跡発掘調査概要』　小杉町教育委員会

北陸古代土器研究会　1998『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』

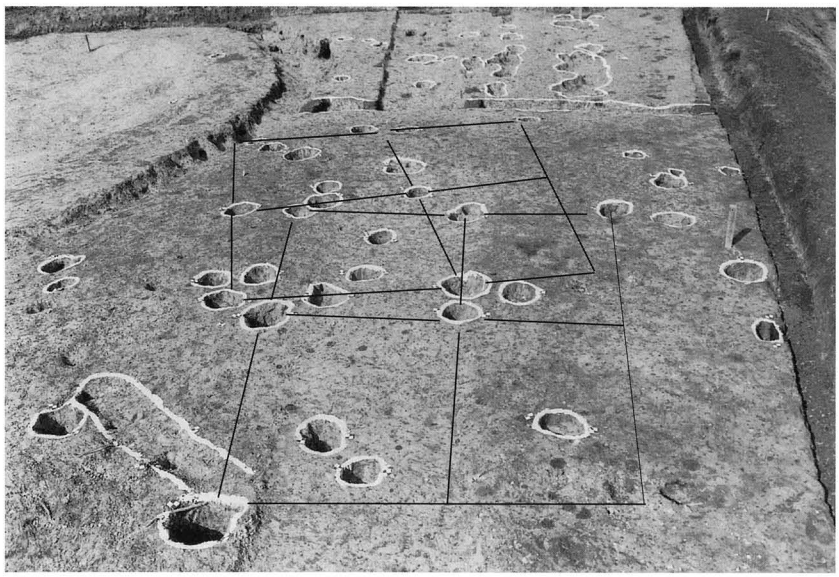
北陸中世土器研究会編　1997『中・近世の北陸』

写　真　図　版

図版１　全景（上：東より　下：北より）

中段面～谷部（北西より）

上段面～中段面（北西より）



上段面（南より）

図版 2　遺構

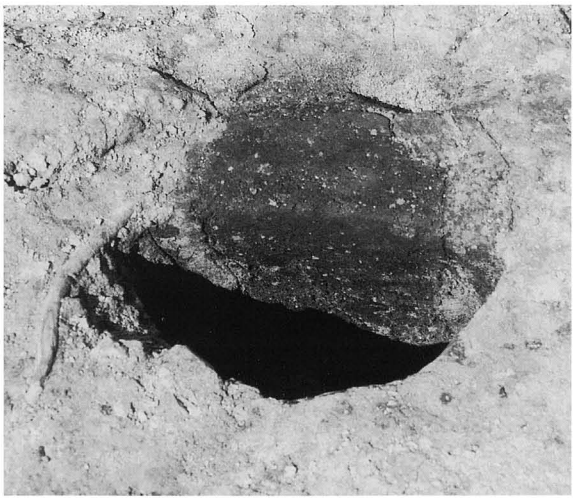
SD03

SK06：左　SE05：右

SD07

SE36

SB01—P19

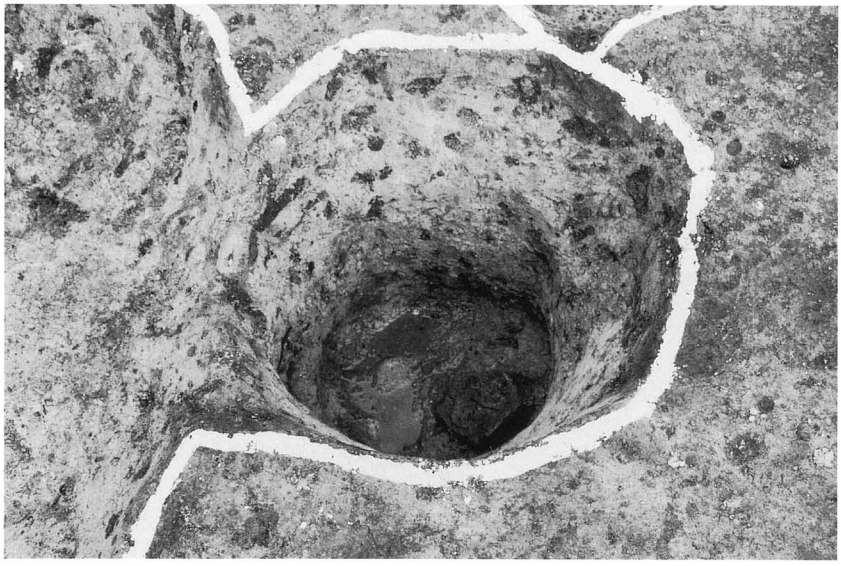


SB02—P51

図版 3　遺構土層

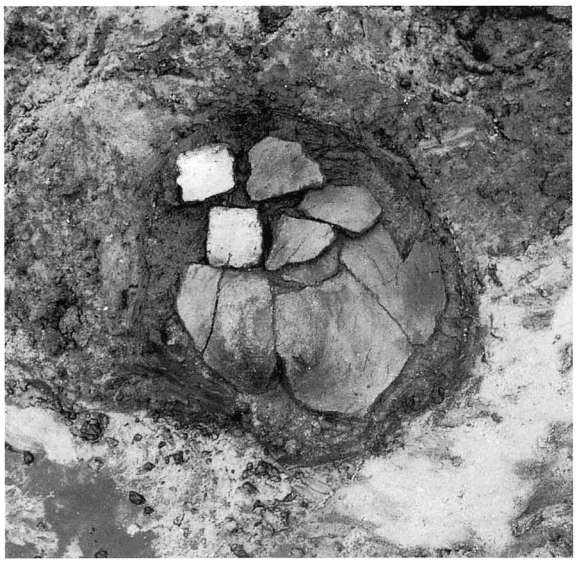
SK04

SE07



SE05

図版 4　遺構（完掘）



1．縄文土器（第17図―23）

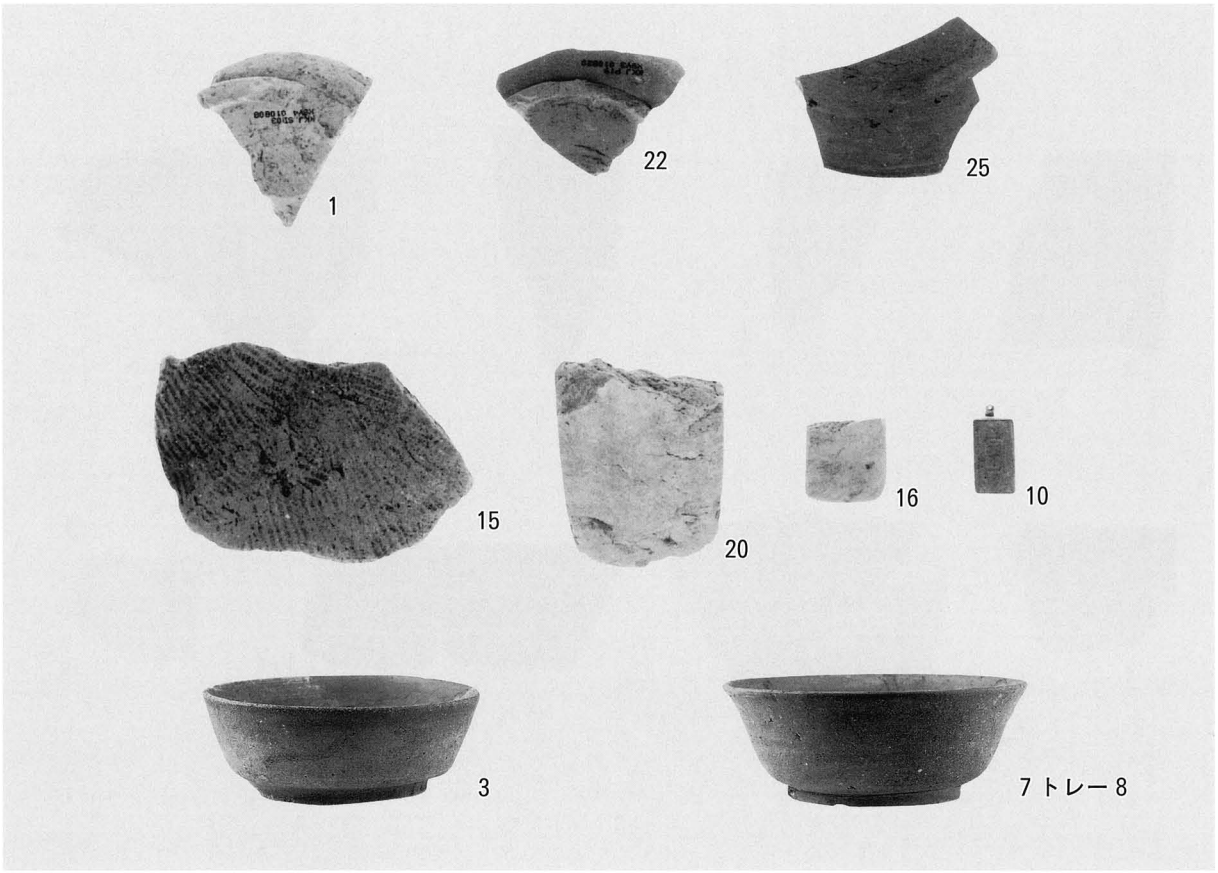
2．須恵器（第20図―60）

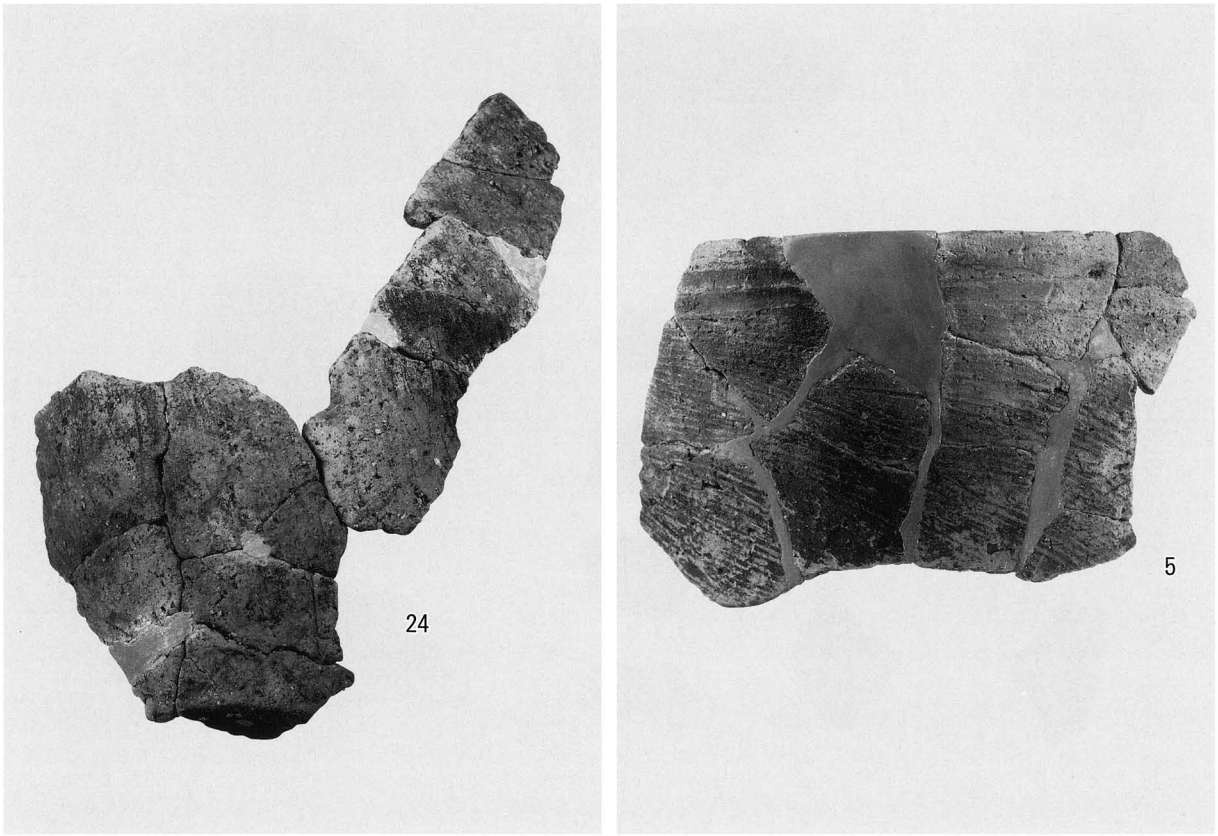
3．谷部地山直上

4．曲物底板（第25図―５）

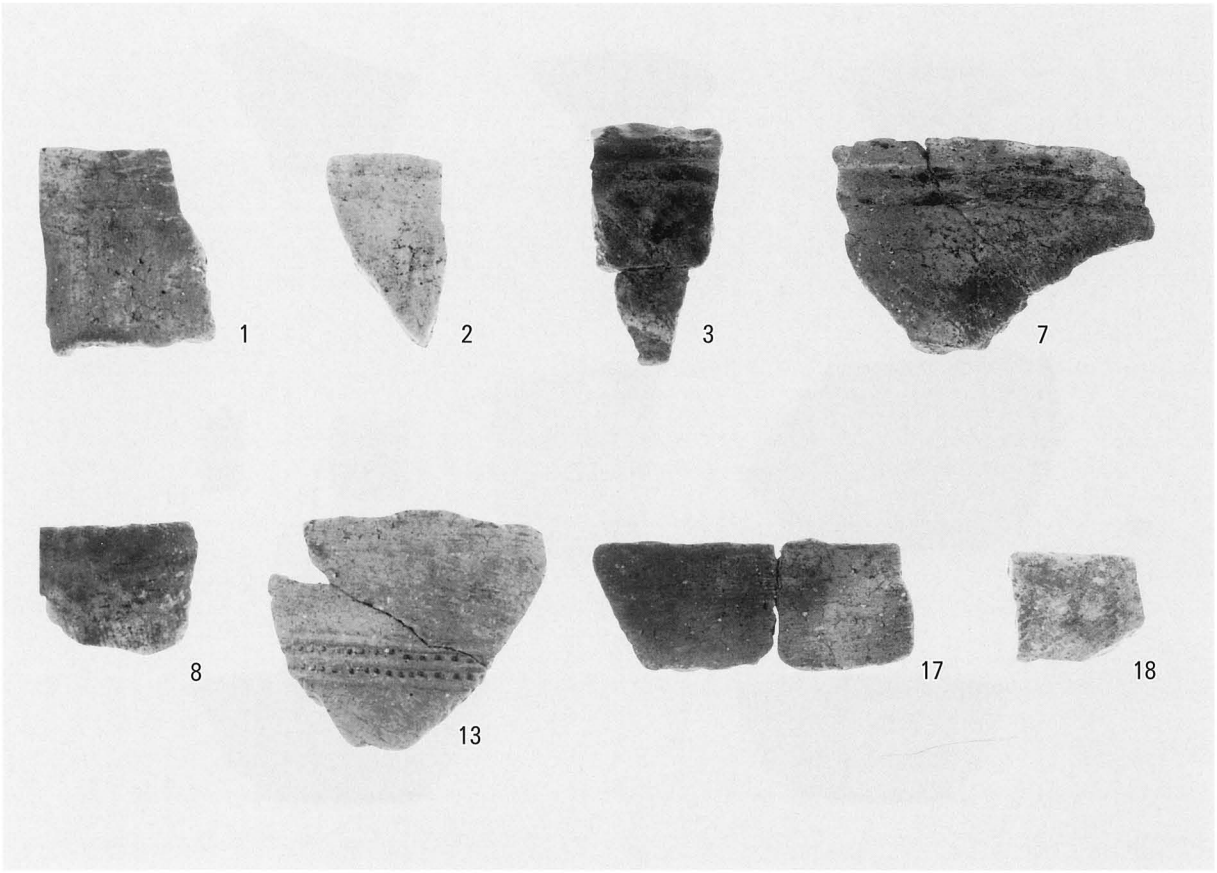
5．杭出土状況

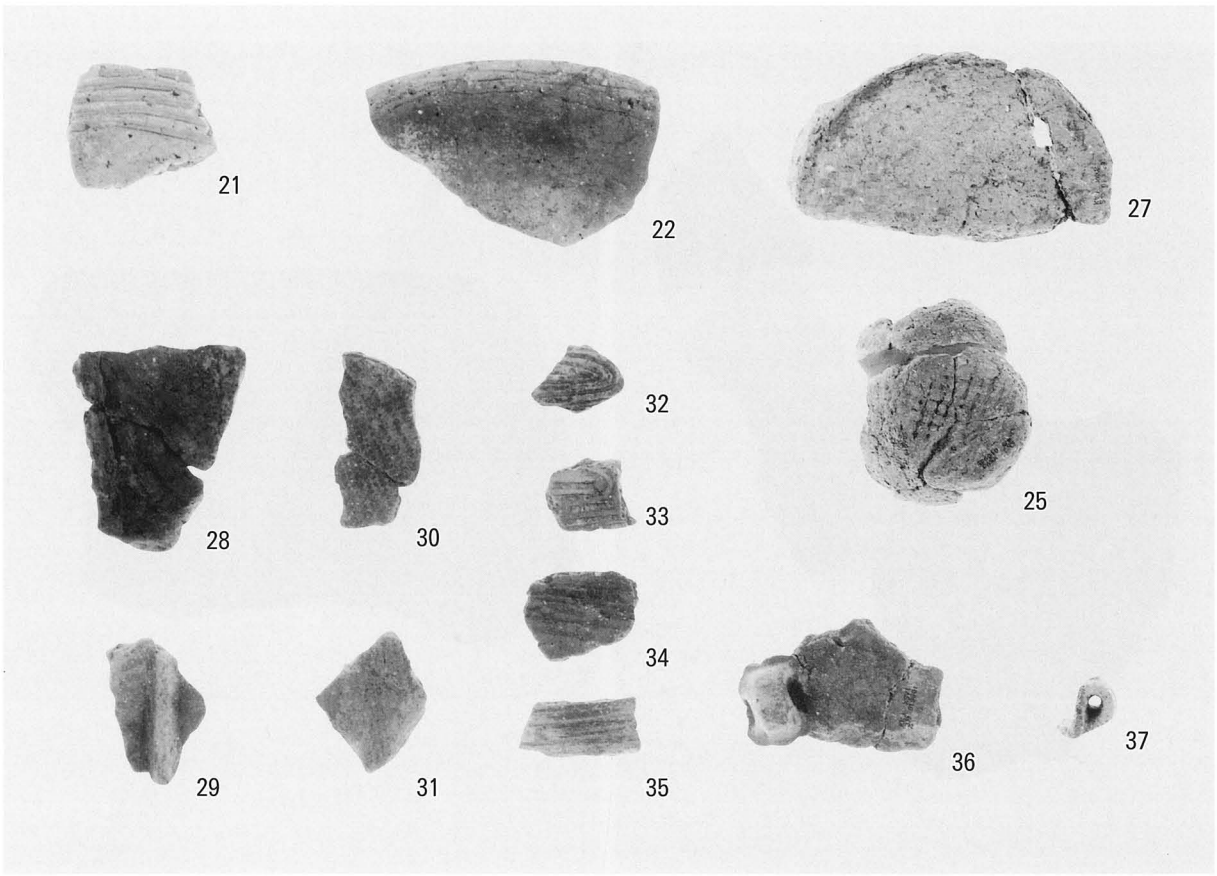
図版５　谷部遺物出土状況



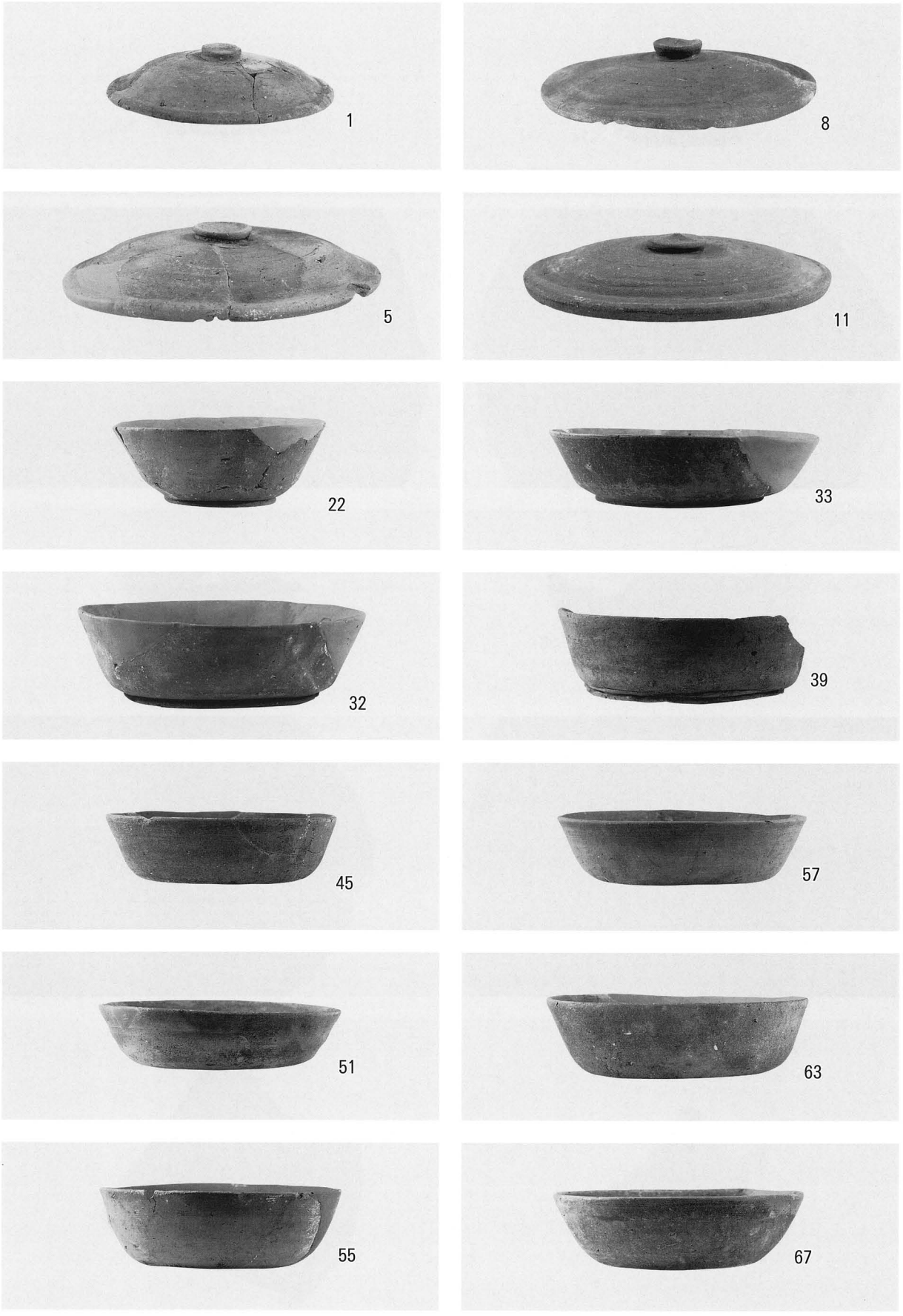


図版 6　遺構内遺物：上　谷部出土遺物・縄文土器：下(1/3)

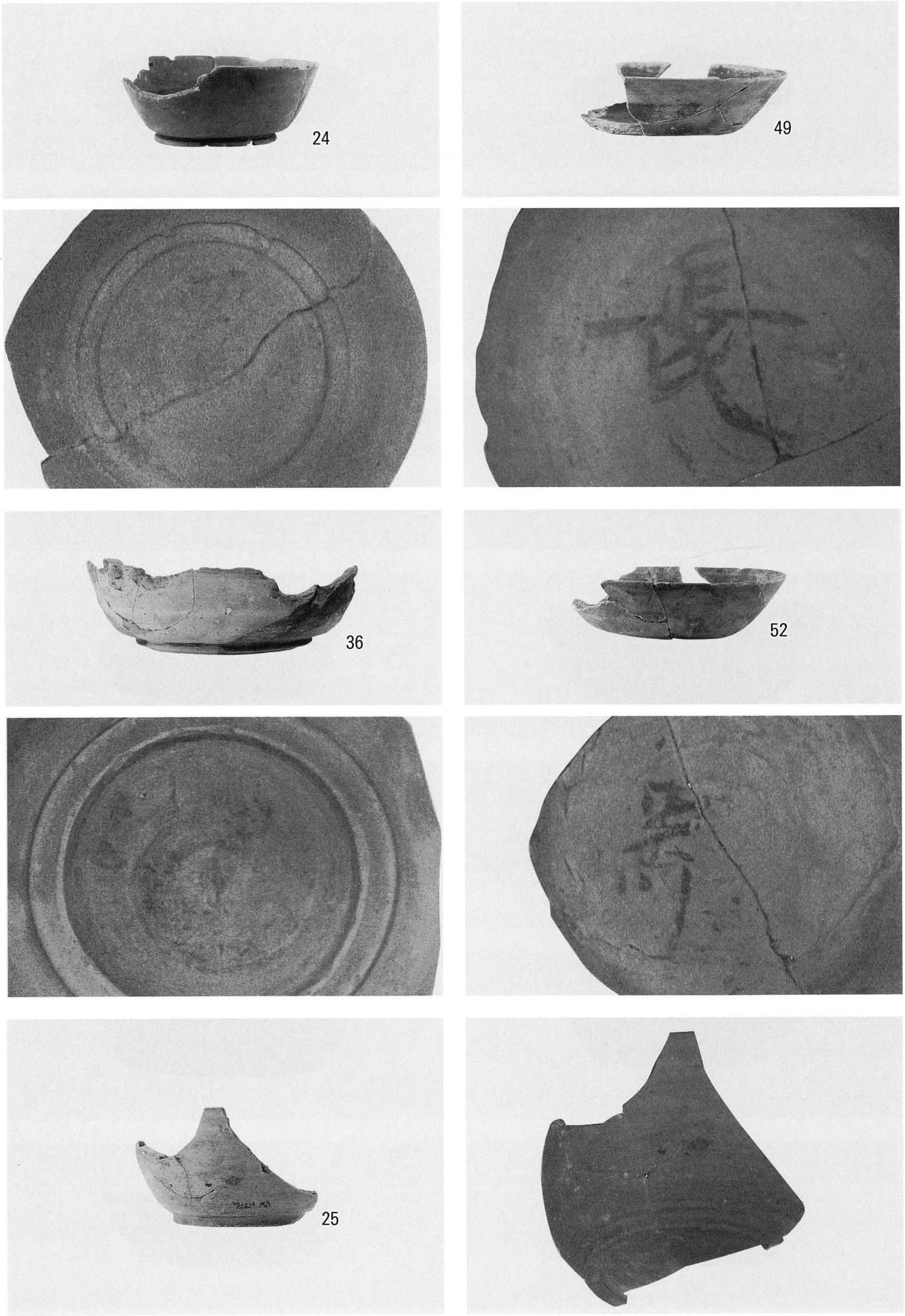




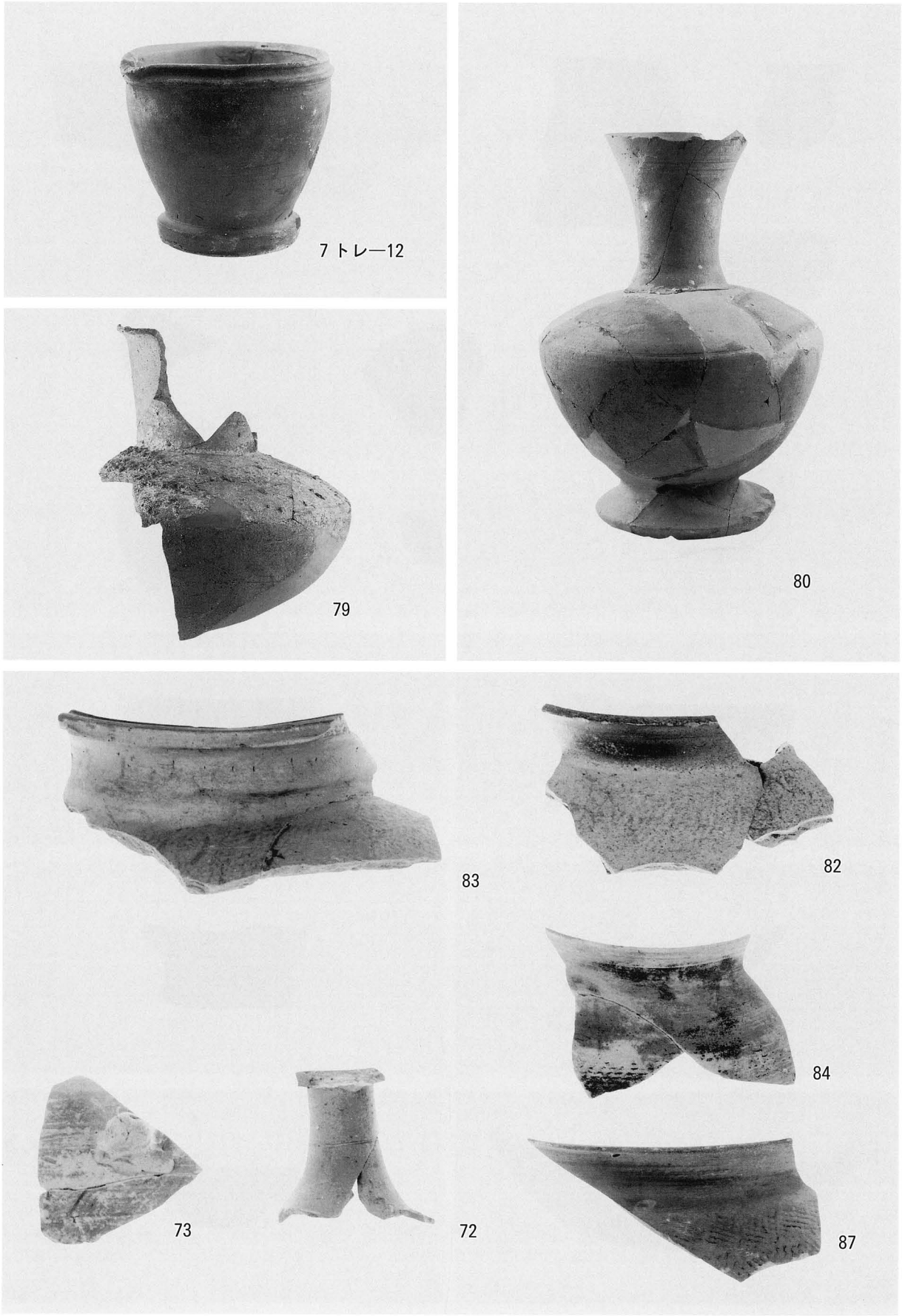
図版７　谷部出土遺物・縄文土器(1/3)



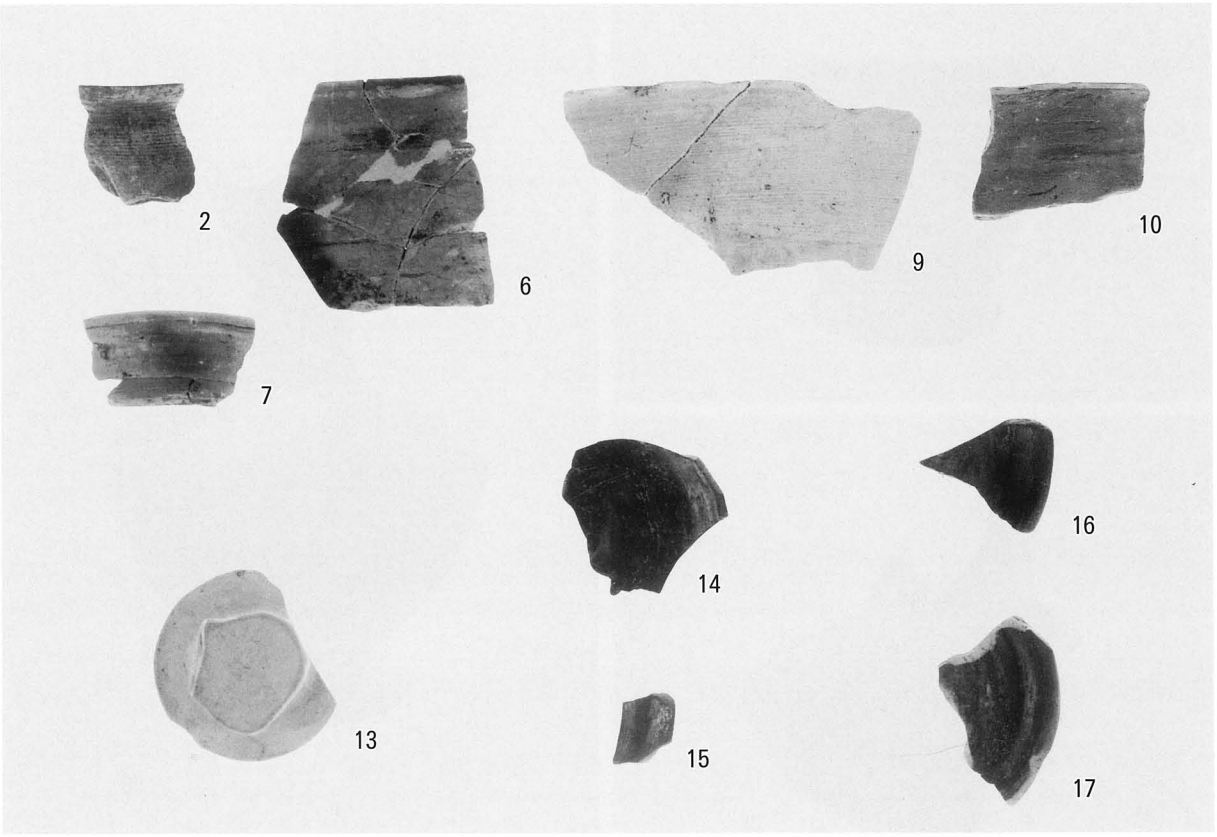
図版 8　谷部出土遺物・須恵器(1/3)

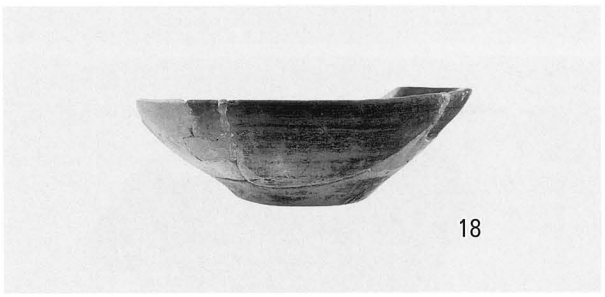


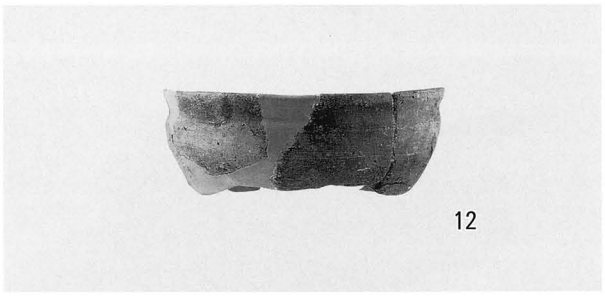
図版 9　谷部出土遺物・墨書土器

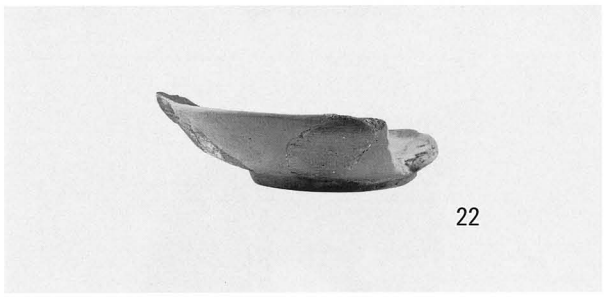


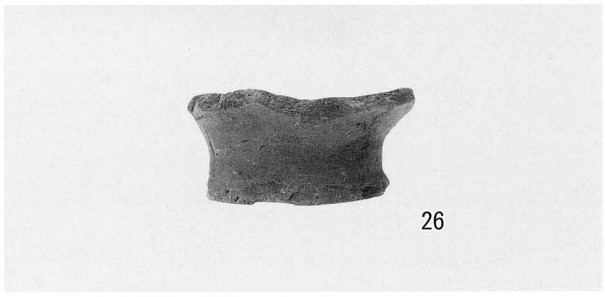
図版10　谷部出土遺物・須恵器(1/3、7トレ12・79は1/4)

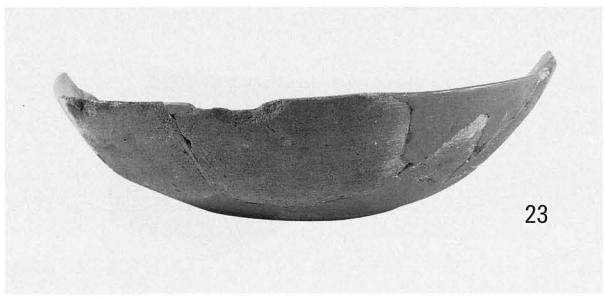


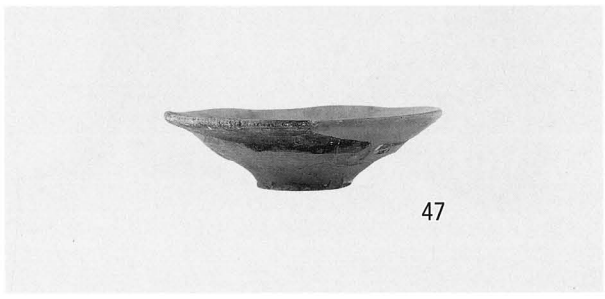




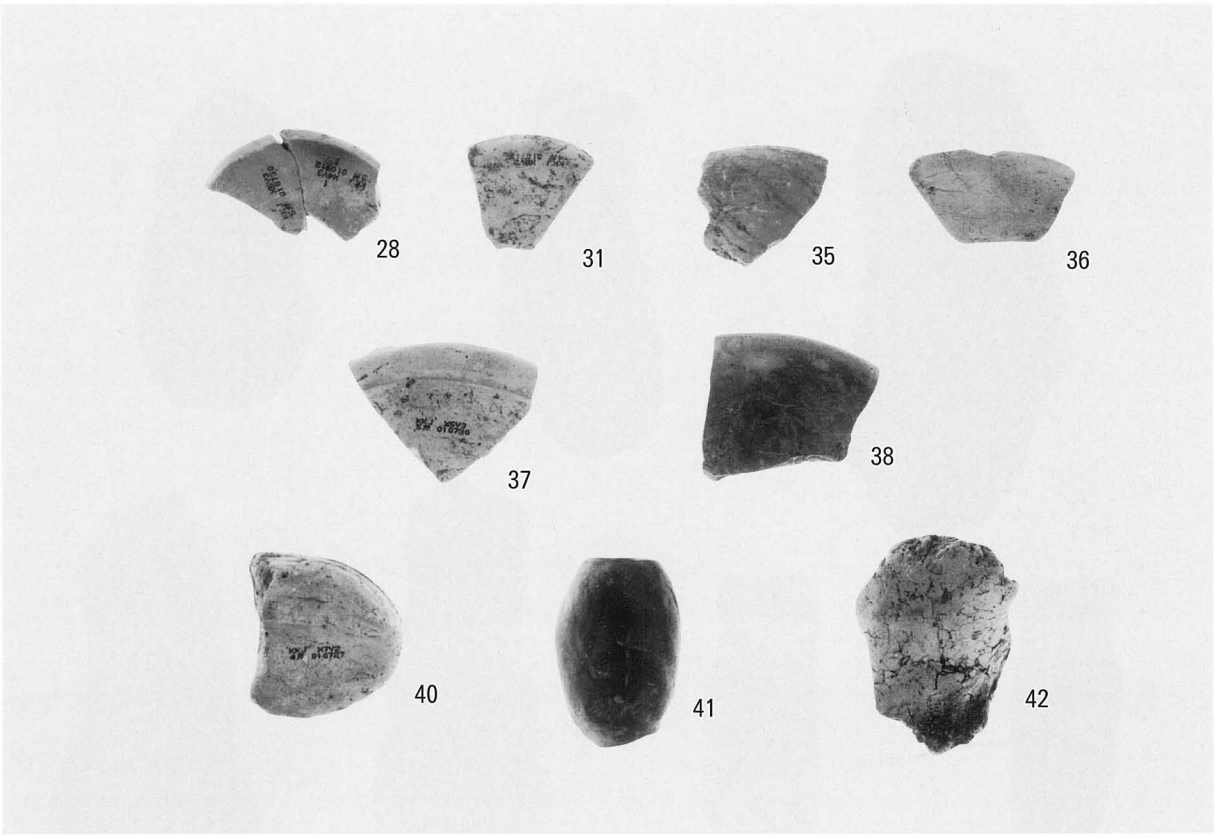


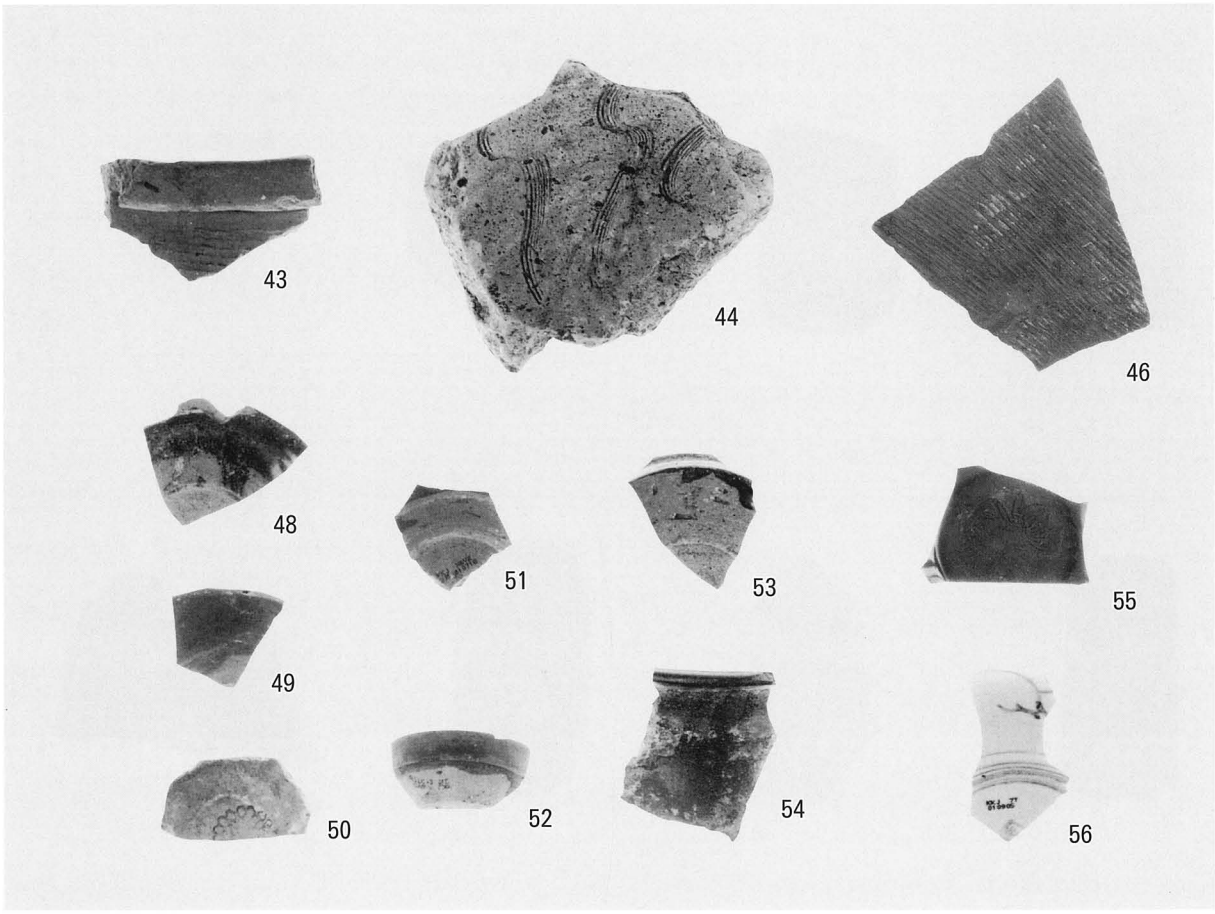




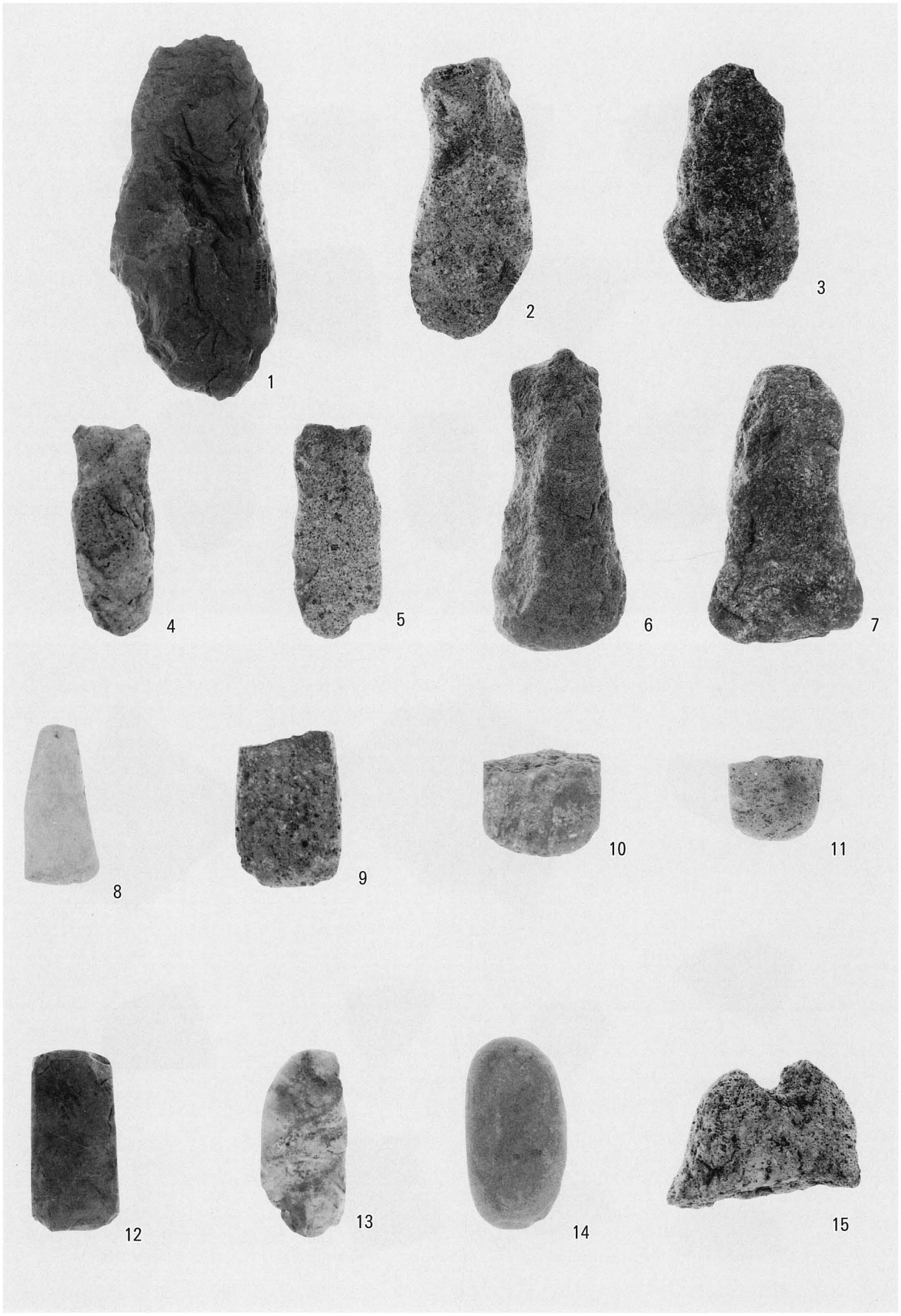


図版11　谷部出土遺物・土師器・越中瀬戸(1/3)





図版12　谷部出土遺物・土師器等：上　珠洲・越中瀬戸等：下(1/3)



図版13　谷部出土遺物・石器(1/3)

報告書抄録

ふりがな	くろかわじゃくめいせきはっくつちょうさほうこく
書名	黒河尺目遺跡発掘調査報告
編著者名	稲垣尚美、中村恭子、田所人志
編集機関	小杉町教育委員会
所在地	富山県射水郡小杉町戸破1,511　　TEL0766-56-1511
発行年月日	2002年1月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査基間	調査面積 ㎡	調査原因
黒河尺目（くろかわじゃくめ）	富山県射水郡小杉町黒河字尺目（とやまけんいみずぐんこすぎまちくろかわあざじゃくめ）	380		36度 41分 57秒	137度 07分 03秒	20010602～ 20020131	2,500	主要地方道小杉婦中町線臨時道路交付金事業（B）に伴う本調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒河尺目	集落遺跡	縄文時代晩期 奈良・平安 中～近世	溝 土坑 井戸 掘立柱建物 柱穴状ピット	縄文土器・土師器 須恵器・内黒土器 墨書土器・中世土師器 青磁・珠洲・越中瀬戸 伊万里・漆器椀 石器・木製品	当地は丘陵末端の谷に辺り、段丘状の地形である。

黒河尺目遺跡発掘調査報告

平成14年１月31日

編　集　　小杉町教育委員会
　　㈱中部日本鉱業研究所
発　行　　小杉町教育委員会
印　刷　　㈱富山フォーム印刷